
ヴィアナの花

暁 瑚都羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴィアナの花

【Nコード】

N8062F

【作者名】

暁 瑚都羅

【あらすじ】

町で評判な少女、エリー・マリヴェナはお見合い話があとを絶ちません。それを毎日跳ね除けながらもみんなと仲良く暮らしていたエリーですが、ある日王城で働く騎士団長の父から上流貴族の養子になってくれないかと言われ・・・!? 才色兼備な少女が織り成す一つの物語が、ここから始まるのです・・・!

花の芽は天へと架ける（前書き）

この物語は、ヴィアナ王国という洋風の国を中心とした異世界の物語です。楽しんでいただけたら嬉しいです。

多少修正を致しました。読んでくださった方、御免なさい。

花の芽は天へと架ける

あるところに、美しく聡明でそれはそれは心の優しい少女がおりました。

毎日毎日、休むことなくくると働く彼女は町の中でも有名であり、少女の父は王城で働く騎士団長とあって、婚約や結婚話は毎日のように飛び込み半ば取り合い状態になっていたといえます。

しかし、これはあくまで他人から見た様子。

彼女から見れば、けしていいものではなかったのです。

「あー！！エリーちゃんだぜ」

「ほんとだ！おい、エリーちゃん！！」

青年二人が顔を輝かせ手を振る先には、井戸で水を汲む一人の少女の姿があつた。

エリーと呼ばれた少女は、水で満たされた桶を置くと咄嗟に笑顔を取り繕った。

「こんにちは、マークさんに、カインさん。本日はいいお天気ですね」

「そうそう、ほんつといー天気だなっ！！まるで俺とエリーちゃん
んんの関係を祝福するかのようだぜ！」

「ちがうぞマーク！きょうのお天道様は僕とエリーちゃんおてんとさまの事を祝
ってるんだ！それに、お前とエリーちゃんとの関係ってなんだよ！
今日のお天道様は友達以下の関係を祝福してるって事かよ！」

「な、な、なんだと〜お！！！」

エリーはため息をついた。いつもこうなるから会いたくないのだ、
男とは。

「あ、わたし用事があるので失礼させていただきます。」

エリーはぺこりとお辞儀し、桶に手をかけた。

しかしエリーのファンクラブにまで入っているマークとカインは、
その機会を見逃さなかった。

「僕、その桶家まで運ぶよ！」

「俺も人肌ぬぐぜ！まかしとけーい！」

エリーはにっこり笑うと、桶を二人に渡した。

ふふ、男は力仕事にこそ当てはまるわ。

「じゃあ、お言葉にあまえて・・・」

二人のガッツポーズは傍からみてもまるわかりであった。

「ただいま、エリー。今日はいい天気だったな。」

あの桶の水が使われたスープの火加減をみながらエリーはとびきりの笑顔をみせた。

「父様！今日は早いよね、もしかしていいお天気だから？」

エリーが唯一慕う父、ジェイガン・マリヴェナは威勢よくわらった。

「はっはっはっ！残念だがいい天気ぐらいでは仕事は終わらんのだよ、実は……」

エリーはスープを深皿につき始めた。

「あ！もしかして昇格するとか？ねえ、食事の時に聞かせて！」

つきつきと昇格のことについて話し始める娘を見つめる父の顔が少しだけ曇っていることにエリーは気がつかなかった。

「よーしっ..」

エリーはスープをスプーンですくいながら父の言葉を聞き返した。父はロールパンを千切りながら頷く。

「そう、養子だ。実は・・・上流貴族のグルニエル公爵の一人娘が亡くなってな・・・。公爵夫人は今すぐにも美しく教養を兼ね備えた娘が欲しいと」

「それが、私？」

ジェイガンは顔を引き締める。

「いや、まだ決まったわけじゃないが・・・それに行くかどうかはエリーが決めることだ」

どうする、というような目つきで見つめる父の目には、まだ迷いがあるようだった。

そしてエリーの輝くような瞳にも。

「・・・一晩だけ・・・一晩だけ考えさせて。」

エリーはそれだけ呟いた。

「私にとっての今の生活は、とても幸せだとおもっわ。」

そう、心の中のエリーが呟く。

「でも・・・養子になっていままでの生活よりもっと、もっと幸せになれたら・・・」

もう一人の自分が言う。

この生まれ育った地、自分に明るく接してくれる人、そして優しい父様。

付きまっていたあの青年たちでさえも、今では愛おしく感じる。

そのすべてに別れを告げる勇気が、自分にはあるだろうか。

エリーは真夜中のベッドからゆっくりと起き上がり、窓辺に映る月を見つめた。

しばらくして、エリーはゆっくりと目をとじた。

もう彼女に、迷いはなかった。

小鳥が鳴き出し、朝日が昇り始める夜明けと共に、エリーの最後の家事が始まる。

エリーは鶏卵を釜戸の熱いフライパンに四つ割り入れた。

「父様、おはよう！今日もいいお天気ね」

エリーはフライパンの卵を見ながら言った。

「おはよう、エリー。・・・で、決めたか？」

父はさりげなく言ったつもりだったが、エリーにはすぐわかった。

「・・・私、養子にもらってもらわうわ父様。みんなと離れるのはすつごく悲しいけれど、養子になれば父様は公爵様に力をかりて出世できるし、私も・・・きつと幸せな生活や、結婚ができると思うもの。」

「本当にいいのか？」

その一言の中から父の気持ち痛みほど感じ取れた。
しかし、父の心配そうな表情にも、エリーは動かなかった。

もう、決めた事なのだ。　自分は今もう<道>を選んだ　　あとは
道をたどって突き進むしかないのだ。

エリーはいつも父に見せるとびきりの笑顔で言った。

「私、もう決めたの。たまにここにも遊びにきたいわ、いい？」

父、ジェイガンは娘の笑顔を見て、深い笑みをうかべた。

「ああ、いつでも待っているよ、エリー。」

そして、時は過ぎ行く。二人の思いを引き裂くように、
アナ王国の運命さだめが重くのしかかるかのように、
ヴィ

花の芽は天へと架ける（後書き）

私はこのヴィアナの花がデビュー作品なので、まだまだ直す所がたくさんあると思います。そのようなものがありましたら、意見をお聞かせください！

芽は濡れて

馬車に揺られること一時間。

ようやくエリーとジェイガンは、高級住宅街の一角にたたずむグルニエール家にたどり着いた。

「ここが、グルニエール家……すごく大きいお邸ね」

エリーは感心した様子で呟いた。

「本当だ……家とは比べ物にならないなあ」

「ふふ、そうだね」

二人して門の前で佇んでいると、門番がやって来た。

「エリー・マリヴェナさんとジェイガン・マリヴェナさんですか？」

二人は改めて姿勢を正した。

「今日は、わざわざ此方まで来ていただき誠に有難う御座います。」

私の願いを聞いてくださった事は一生忘れません。」

グルニエール公爵夫人こと、リーブ・マフィー・グルニエールはエリーとジェイガンに深くお辞儀した。

夫人は初めて見るだけでも相当の気品と教養が感じられるとても美しい人であり、同時に何処か亡くなった娘を思うような影を帯びた眼差しがあった。

ジェイガンは夫人のお辞儀に慌てた。

「そんな、グルニエール夫人、顔をお上げください。エリーはもう貴女あなたの家族なのですから」

エリーも高級ソファの上で身を掠よじった。

「そうです、リーブさん。私はあなたの娘になるんです。」

夫人は顔をゆつくりと上げると、ジェイガンとエリーを交互に見据えた。

「……いいのですか？これから貴方達は家族ではなくなるのですよ」

エリーはうなずく。

「もう覚悟はしています。これで父様が出世してくれるなら、安いものですし」

「……本当に素直で正直なのですわ……分かりました。貴女に

最高の教育と場所を与えます。貴女が幸せになれる様に、最大限の手をつくしましょう。」

夫人は柔らかな笑みを浮かべた。

「有難うございます、夫人。これでエリーも幸せです。」

ジェイガンは深いお辞儀をした。本当の気持ちを隠すかのように。

「では、私はこれにて・・・エリーを宜しくお願いいたします。」

ジェイガンは顔をあげるとエリーに笑いかけ、執事に連れられて客間を出た。

エリーはその間、立ちすくんでいた。

・それから四年の間の月日、最愛の父に会えなくなるとも知らずに・・・

ジェイガンは馬車に揺られながら、額を覆った。
いつも強いその瞳からは、ただ只管ひたすら涙が溢れた。

「……………っつ……………!!」

もう少し、もう少しだけエリーが傍に居てくれたならどんなに心強
かっただろう。

しかし、自分は言えなかった。

言えば、吉都きつと愛する娘が悩むから。

エリーの夢を、奪ってしまうから。

だから、こころするしかなかった。

ジェイガンはただ、涙を流した。

芽は濡れて（後書き）

皆様のご意見、お待ちしております!!

緑葉は太陽と出会い

「では早速、このグルニエール家の仕来りというものを説明致しますね」

グルニエール公爵夫人が、エリーを自分の部屋へと案内するなりそういった。

エリーは羊の毛のようにモコモコなシングルソファに座った。

「貴族にはそれぞれの家に仕来りがあるんですか？」

「そうね、上流貴族だと大抵はそうよ。私は下級貴族の方からこへ来たのだけれど。でもほとんどの家は同じような仕来りだから、一つでも覚えておくといいわ。」

夫人は大きな書斎机の椅子に座った。

エリーは夫人を見据えた。

「えっと、あの・・・」

夫人はゆっくりと微笑んだ。

「私のことは、あなたの好きなように呼んでくださいな。」

「・・・では、お母様。私に国一番の教育をしてください！」

エリーの言葉に<母>は驚いた。

「国一番？あなたはそこまでして何を求めるの？」

「貴女は最高の教育をして下さると言いわれました。そして私は、それを求めます。」

母はまさかそこまで娘が求めるとは思っていなかったもので、目を見開いたが、やがて立ち上がると本棚から何冊かの古そうな分厚い本を取り出し、エリーに渡した。

「・・・この何冊かは私も読んだ本でね、これは『ヴィアナ王国紀』、こっちは『王族の暮らし』ね。どちらも面白いし、貴族の暮らしとしても勉強になるわ。」

まずは基本的マナーと仕来り、それから貴族の暮らし方を勉強しましょう。」

エリーはうずうずしてきた。

「はい！がんばります、お母様。」

「ええ。今日の午前はとりあえずこの宮殿の間取りを覚えたり、本を読んだりして過ごしてちょうだい。」

明日からは教材が届くからそれでやりましょう。午後からはダンスや歌、お料理のレッスンをしますよ。」

それから、あなたに専属の侍女をつけておくから、宮殿を回るとき道案内してもらってね。」

私はお昼まででかけているから。」

「分かりました。・・・あの、この本全部読み終えたら次に読む本をいただいてもいいですか？」

母はエリーの表情を見て頬を緩めた。

「いいですよ。では、さっそくいつて来なさいな。」

「はい。いつてきます!」

エリーは本を抱えて走り出した。

ドアの閉まる音を聞いた母は、一瞬表情を厳しくしたが、すぐ緩んだ。

「……本当、リリアンに似てないわ。大丈夫かしら、エリー……」

その言葉が表す意味をエリーが知るのには、もう少し後のこと……

「うーん……、いいお天気! 宮殿の庭で読書ってすごく気持ちいのね。」

エリーは宮殿の庭の芝生でうーんと伸びをした。

そこへ、誰かがやってきた。

色の膝までのドレス……と言うよりワンピースを身に纏った、茶あはれ淡い東雲あはれ

色の瞳を輝かせ、豊かな卯花色うのはないろの髪を頭の上で束ねる少女。
いかにも貴族っぽくない。

「あんだ？エリーって」

その少女は、エリーの前にどかっと座り込んだ。

「？」

ん？なに、この少女こひ。こんな人も貴族なの・・・？

しかし、そんなエリーの表情を読む間もなく、少女は話し続ける。

「私は、ミーフェ。リリアンの専属騎士だったわ。ま、今日からあなたの専属だけど」

「・・・もしかしくなくても、あなたが侍女さんですか？」

「は？」

「え、だってお母様は専属の侍女をつけてくださると。」

真面目に話すエリーを見て、少女はため息をついた。

「あのねえ、この格好が侍女になんかみえないでしょ！？」

「そうなのですか。私、いままで侍女を見たことがなくてですね、ごめんなさい間違えました。」

「え！そーなの？」

「はい・・・」

なぜかこんな所で謝ることになるうとは。

しかしミーフェの底知れぬ気迫を感じ取った者ならば、無論謝つた
だろう。

「じゃあ、あなたは・・・？」

「今いったでしょ。専属騎士のミーフェ。きつと夫人が間違えて言
っちゃったんだわ。あれ程言っておいたのに」

エリーは本に槩を挟んだ。

「専属つて、私にずっと付いてるんですか？」

「ま、そんな所ね。私は命ある限り、もしくははこの役目から外され
ない限りあなたが死ぬまでこの命を捧げることになってるわ。ま、
めんどいけど」

「まあ、でもなんで私に？」

エリーは明るく輝く太陽を見上げた。

ミーフェも芝生にねっころがって太陽を見据えた。

「決まってるわ、それはあんたがリリアンの代わりの養子だからよ」

「リリアン？」

「あつ、夫人に言うなっっていわれてるんだった。リリアンはここ、グルニエール家の愛娘だった人であんたが来る前に死んだのよ。重い病気でね、まあ仕方なかったんだけど」

「私が来る前につてことは・・・」

「そう。あんたが来る前、私はリリアンの専属騎士をしてたのよ」

「そうだったんですか・・・でも、仕方なかったって」

「ああ、その事？リリアンはね、実は恋をしたから。」

「恋？？」

「そう。でもあんまり喋っちゃうと夫人のお説教をくらうからまた今度よ。それより、あんた剣は使える？」

「剣は少し父に習ったことがありますか、それが？」

きよとんとするエリーをよそに、ミーフェはうきうきし始めた。

「ほんと？私も剣使っただけど、今まで相手がいなくて！よろしくね」

「え！？でもほんっの少ししか」

「いいじゃない！やりましたよ！・・・」

剣・・・思い出したくもない、私のポリシーに反する存在。

いや、いや、いや〜！！！

剣なんて嫌い！

何はともあれ、ここからエリーの貴族生活が始まるのです。

緑葉は太陽と出会い（後書き）

皆様のご意見、お待ちしております!!

雲は花を隠す

「私、ほんとに剣とか武術は無理なんです!」

エリーは顔を覆った。

ミーフエはさっきの様子とは似ても似つかないあまりの変化に啞然とした。

エリーは深呼吸をして話し始めた。

「ある日・・・今から六年くらい前、丁度九歳の時です。

その頃は病気で亡くなった母もまだ生きていて、食事の手伝いをしてたんですけど、そこで父が仕事から帰ってきて剣を手入れし始めたんです。

父は騎士をしていたからいつものことだったんですが、その頃私はやったことが無い武術系にすごく興味があつて、父に剣を触らせて欲しいと言つたんです。」

「触つたの?」

ミーフエの言葉に対してエリーは首を横に振った。

「いえ。父は私の言葉でスイッチが入っちゃたみたいで、まずは肉体からだー!とかいって私は物凄い量の筋トレをさせられて・・・もう剣に触ることなくそこで終わつたんです。」

「ほんとに!?ほんとにそんなんで諦めちゃつたの!?!」

「じゃあミーフェさんはそこであきらめないんですか？」

「もっちろん！！体力には自信があるわ。だって女専属騎士って私しかないんだから」

ミーフェは胸をはった。

エリーは目を見開いた。

「え！？そうなんですか？」

「そうよ、剣や斧、槍に武術に空手に太極拳に弓も使えるわ。これもみーんな騎士の仕事で使うから」

「す、すごい・・・あなたって凄いのね。でも私、ほんとに剣は・・・」

ため息をつくエリーを見てミーフェはにっこり笑った。

「あんだ、面白いね。リリアンとはまた違ったカンジがあって」

「え・・・それ褒められてるんでしょうか」

「うん、多分。」

それよりエリーは弓をやってみたら？弓は出来ると狩もできるし、面白いのよ」

「でも・・・」

「なにも特別に運動が必要って訳じゃないわ。ただ、馬に乗れるよ

うになれるといいけど、一番大切なのは本人のやる気ね。」

「本人のやる気」

エリーは繰り返した。

「私でも、やれるかしら」

だんだん乗せられていくエリー。

「やれるわよ。勉強も弓も努力よ、ど・りよ・く!!」

ミーフェの言葉の釣られてエリーの心が動いた。

「ミーフェ！私やるわ、弓」

「そうこなくっちゃ！」

ミーフェはやっとできた弓友達にむかってガッツポーズを繰り返した。

「でも、いつやるんですか？練習」

エリーの性格は基本的に計画性なので、一応聞いてみた。

ミーフェは大らかな性格なのであまり深く考えない。

「さあ。午後の夫人の授業が終わってからでいいんじゃない？あと、これからずっと一緒なんだからその敬語やめといてね」

「え！？敬語やつといたほうがいいんじゃない！？」

「私してないけど」

「……………」

「まあいいや！じゃあ午後の授業終わったらここにくるから、ミーフェもきてくれる？」

「……私もほんとに午後の授業出なきゃいけないんだけど、いつも出てないし。いいわ、待ってる」

「そうなの？じゃあミーフェもいきましょ、きっと楽しいわよ。それに私、まだこの宮殿の道とか部屋とか、覚えてないもの」

「うー……………」

「何事も努力なんですよ？」

「うー……………」

「じゃ、決まりね。ミーフェはお昼どうしてるの？」

「食堂でコック達と食べてるわ。……仕方ないから食べ終わったら久しぶりに夫人の教室行って待ってるわ」

「夫人の教室？」

エリーとミーフェは暑い日ざしから逃れようと木陰へ歩きながら話した。

「夫人の午後の教室は毎回違うんだけど、今日はたぶん図書室ね。最近では料理教室ばかりで私行つてなかったから」

「ミーフエって料理するのニガテなんだ？」

「まーね、誰にだってニガテの一つや二つあるわよ」

「そこ開き直るとこ・・・？」

エリーが真剣に悩んでいると、ミーフエは立ち上がり、ポケットから小さい時計を取り出し、時間を確かめる。

「エリー、もうすぐ昼食よ。そろそろ戻った方がいいわ」

「そうね。」

「じゃ、また後で。あ、それから新しいお父さんに会ったこと無いんでしょ？気をつけなよ」

「え??？」

「あとで第一印象教えてよね」

それじゃ、と行ってミーフエは右の方へ歩いていった。

そう言われてみると、確かに、新しい父に会ったことは無かった。

でも、気をつける？

そんなに危ない人なのだろうか

エリーの頭に不安がよぎる。

そんなことも考えつつ、エリーも立ち上がってもときた道を歩き始めた。

「公爵様、お帰りなさいませ!!」

「お待ちしておりました」

数々の侍女や執事に迎えられて、一人の男が宮殿の敷居を跨いだ。

一遍見ただけで、その位の高さが伺える。

公爵と呼ばれた男はビロードの帽子と絹の薄い上掛けを執事に預けた。

「来たか？」

公爵の静かな問いかけのなかには重々しい雰囲気立ち込める。

「はい、二時間ほど前に来られました。」

「そうか。」

公爵はため息をつくとき長い廊下を歩き始めた。

「エリー様、貴族専用の食堂はそちらでは御座いません」

「え！あ……御免なさい、間違えてしまつて」

お腹がそろそろ空いてきたエリーは戸惑いながらウロチヨロしていて廊下に立っていた侍女に注意された。

「あの、貴族用はどちらに？」

「ここを左に曲がつたところの階段をあがり、突き当たりを右に曲がつたところで御座います。」

「ありがとう、私まだ覚えられなくて」

素直に礼を言うエリーに侍女は慌てた。

「そんな、宮殿が広いのは当たり前ですから心配なさらなくても……」

「そうですね、では……」

開き直って歩き始めようとしたその時、侍女が急にひざまづいた。

「え？」

振り返ると、とても背の高い、威圧感のある一人の男がたっていた。

「お前か、養子の娘というのは」

「へ？」

男の言葉にきよとんとするエリー。

すると侍女が呟いた。

「この方が、宮殿の主、メルファン・ニード・グルニエール公爵様で御座います。」

エリーは顔を引きつらせた。

こゝこの人が・・・

ミーフェの言っていたことが今分かった。

深い群青色の眼差しに白髪混じりの黒髪。

とてもいい人そつに見えない。

といつか、強い。

エリーはただ、その新しい父を見上げた。

これから、こんな人がお父様だなんて・・・

雲は花を隠す（後書き）

ちなみに・・・

エリーは落ちて着いた若草色の瞳に小麦色の豊かな髪が特徴です。
皆さんの意見、お待ちしております！！

芽吹く花と朝露

「貴女、ミーフェに会ったのね？」

夫人は魚のソテーを切り分けながらエリーに尋ねた。

今、エリーと夫人はあのグルニエール公爵と共に食堂で昼食をとっていた。

公爵はさっきから一言も喋っていない。

エリーはわざわざ公爵に話しかける気も無かったので夫人と話していた。

「ええ。ミーフェはとてもいい人だわ。私に弓術を教えてください」となったの

「まあ貴女、弓術ができるの？」

驚く夫人とは裏腹にエリーは首を横に振った。

「いえ、それどころか武術系は全く駄目で・・・」

「あら、そうなの。私も出来る武術って言ったら弓術ぐらいね。狩によく行くから」

「それって何時なの？」

いつの間にかエリーは敬語を使っていなかった。

「毎週日曜日の、九時からだったかしらね」

「私も行っていい？」

エリーの問いかけに夫人は笑顔で答えた。

「ええ。いいわよ、一緒に行きましょう」

「駄目だ」

公爵の太い声が聞こえた。

少しして、夫人の声が食堂に響いた。

「どうして？良いじゃない、貴方。折角エリーがやりたいっていったんじゃない」

グルニエール公は毅然とした態度を崩さなかった。

「いや、駄目だ。若い少女が狩になど連れて行けるか」

「貴方……」

「……ご馳走様。さて、私はまた仕事に行くとする。」

公爵は静かに立ち上がると、スツと食堂を後にした。

夫人は公爵の出て行った方に目を向けると、ため息をついた。

「いつもはあんなのじゃないのだけれど・・・エリー、御免なさいね。」

「いいえ、大丈夫。まだ私も狩やったことないし。ミーフェに教えてもらおうわ」

夫人はエリーの頭を優しく撫でた。

「御免なさい・・・あの人、きつとまだ　亡くなった娘のリリアンの事が忘れられないのね。私が養子を、貴女を引き取ったばかりに、貴女に迷惑を・・・」

「うん。私、宮殿ゴク好きよ。だって新しいお母様がいるし、それにミーフェだって」

ミーフェのことを思い出してニヤニヤ笑っているエリーを見て、夫人はお淑やかに微笑んだ。

流石貴族。笑ってもお淑やかである。

「貴女は本当にやさしい子ね。頑張って父上にお認められるようにお成りね。」

「うん！！私、ミーフェと待ち合わせしてるから、行くね」

「ええ・・・午後の授業ね？」

「うん。行ってきまーす」

エリーは元気よく食堂を出て行った。

「・・・御免なさいね、リリアン、エリー・・・」

夫人は悲しい過去に目を伏せた。

芽吹く花と朝露（後書き）

短くてすみません！

酷しき過去

それは、今から丁度三年前

当時、貴族が住む通りではある病気が頻繁に確認されていた。

あらゆる病気の最先端予防をしていた貴族だからこそ罹ってしまう原因不明の不治の病。

罹ってしまったら最後、ただ祈りを捧げることしか出来ない。

「お母様！どうしたの？ずーっと本ばかり読んで」

当時グルニエール家のお嬢様として世間に知れ渡っていたその少女、リリアン・ミールニス・グルニエールは母リープ・マフィー・グルニエールの余りの読書時間の長さに驚いた。

母はもつと驚いた。

「あら、まあ。貴女が私のことお母様って呼ぶなんて！私今日やっ
と貴女のことをお嬢様って思えたわ」

何時もなら

『母さん！！何やってんの！？本ばかりーい。あたし暇なんだけど何すればいいかなーあ。』

上流貴族の娘でもあるのに酷いひどものである。

リリアンは何かを思い出して椅子から立ち上がった。

「あのねお母様、聞いて！私考えたのよ、こんな頭で！

実は・・・私ってお嬢様ってヤツでしょ？だから・・・このままじゃいけないって思ったわけ！

だから私もお母様を目標にして、貴族っぽいモノ、チャレンジしてみよっかなーということよ！

そしてまずはお母様を見習って私も本！読むことにするから、ヨロシク！！！」

リリアンはここらでは誰もやらないガッツポーズをやったのけた。

「ええ、有難うリリアン。貴女の気持ちは十分理解できたわ。でも私は今病気について調べているのだけれど、貴女分かるかしら？」

リリアンは表情を一変させた。

「それって、あのエルエム病？」

「・・・・・・・・ええ。この付近も、どうやら一人感染してしまったらしいわ」

「お母様は医療の勉強、してたのよね？」

「ええ、だからこの病気の恐ろしさが感じ取れたの。だって私が勉強していた中でこの病気は全く聞いたこと無かったもの」

「ふうん。じゃあ、治らないの？」

夫人はため息をついた。

「今のところはね。王城ではいま特效薬を開発してるって聞いたけれど余り進展した様子は見られないし」

「・・・そっかあ」

夫人は何処か悲しそうにしているリリアンをみて尋ねた。

「リリアンは病気、怖い？」

リリアンは顔を上げると首を横に振った。

「ううん。だって私にはお母様がついてるもん！」

夫人は笑った。こんな笑い方はきっと家族にしかないだろう。

「ありがとう、リリアン。元気が出たわ。さあ、お母さんはもう少し本を読んでいるから、貴女はあちらの本棚から好きな本を抜いてお読みなさい。

お昼までね」

「うん、分かったー」

リリアンは立ち上がると本棚へと歩き出した。

リリアンは、いつもこんな感じ。

何か思い出したとおもえばすぐに口に出して伝えるし、何か思いつけばすぐに取り寄せたり、考え込んだり。

自由なのだ。

お嬢様だからって何よ！

それが何時もリリアンの口癖だった。

でも、何時も真っ先に考えるのは、何時も同じこと。

それは、この先もずっと変わらないものだど、夫人は思っている。

リリアンがこの世から解き放たれた後も、それは続くのだと。

リリアンに忍び寄る病魔は、あと一歩という所まで来ていた。

あの時から二カ月後・・・

刻一刻と、迫る。

しかし、だれも気づけなかった。

あの日、あの時間、そしてあの瞬間を後になって気づき、そして悔いたのは夫人自身。

もう、時は戻らない

「おカーあさん。何してるの？」

木陰ですっとレース編みをしていた夫人は、娘の声に手を止めた。

「あら、リリアン。お父様と狩に行っていたんじゃないか？」

「もう終わったの。今日は沢山の小鹿の群れを見つけてね、凄く可愛かったわ。あれを見たらとても狩だなんて出来なかったの」

「そう、良かったわね。もう小鹿が居るのね」

「ええ」

リリアンは母の横に腰を下ろした。

「お母さん・・・私ね、お母さんのこと大好きだよ。

お父さんも、侍女さんもコックさんもね」

リリアンは笑っていた。

「ありがとう、リリアン。その言葉が何より嬉しいわ」

夫人は微笑んだ。

そして、気づいた。

何か、おかしい。

夫人は直感で読み取った。

何処？何処がおかしい？

夫人は娘をよく見据えた。

リリアンはいつも通り。

侍女が編みこんだ豊かな髪に蒼い綺麗な瞳。

お気に入りの向日葵色のドレスに身を包んだ令嬢。

に、見えた。

やっぱり気のせいかしら・・・

夫人は笑顔を取り繕ってキョトンとするリリアンを抱きしめた。

「いい？リリアン。何かあったら直ぐに私やお父様や侍女たちと言
うのよ？」

リリアンは突然変わる母の表情にドギマギしながらも、笑顔になった。

「・・・うん。」

この時、夫人は気づかなかった。

リリアンの笑顔に、病魔が忍んでいる事を。

酷しき過去（後書き）

「」は「」と暗いです。

向日葵色の灯火

それは、突然だった。

「お嬢様、朝でございますよ。今日はいい天気でございますねえ。」

一人の侍女がリリアンの部屋へと足を踏み入れ、窓に掛かるシルクのカーテンを大きく開いた。

水差しからリリアンが飲むための水をグラスに注ぎ、大きなフランズ窓を開けて風を通す。

いつものように

ふと、侍女はいつもならすぐにさむーいと駄々をこねるはずのリリアンがなかなか起きてこないことに気づいた。

「お嬢様、お水を注いでおりますよ。早く起きて」

侍女はグラスを持ちながら天蓋付きベッドのなかで眠っているはず

のお嬢様を起こしに来た、が。

「パリーーーーーーン!!」

リリアンのあまりの寝顔に、思わずグラスを落としてしまった。

リリアンは静かに微笑んでいた。

暖かな、柔らかな、でも何処か寂しげな。

侍女はしばらく見つめた後、ハッとわれに返った。

「まあいけない! さあ、お嬢様!!! 起きてくださいまし!」

落ちたグラスの破片を拾い集めるとさつと雑巾で高価な絨毯を拭く。

「お嬢様、お嬢様!?!」

侍女はついに毛布を捲りあげた。

そこで、侍女ははじめて異変に気づいた。

何をしてもしも睫毛一つ動かさないリリアン。

「リ、リアン様・・・?」

ゆっくりと呼吸を確認する。

な、なんてこと

「だ、誰か！！誰か来てえ！！」

「こ、これは……」

専属の医師は息を呑んだ。

「先生。うちの娘は！？」

公爵は動揺を隠せなかった。

医師は深くため息をつき、公爵と夫人にお辞儀をした。

「残念ですが……」

「そんな……そんな……！！」

夫人はリリアンの遺体を抱きかかえた。

「リリアンはもう……!?!?」

「なんて、ことだ……」

公爵は顔を覆った。

夫人は訳が分からなかった。

「どうして?どうしてこの子は死んでしまったの!?ねえ、先生!どうして!?!?」

医師は一枚の書類を夫人に手渡した。

「これが、全てです……」

夫人は意気込んでその書類を受け取り、目を凝らした。

そして、気づいた。

ああ、なんてこと

公爵は夫人の異変によつやく気づき、書類を覗き込んだ。

これは
！！

「もう流行が治まったはずの、エルエム病です。おそらく流行期に感染し、最近になって発症したのでしょう……。」

まだ幼いのに、なんて事に……。」

医師は涙を拭いた。

「そ、んな……エルエム病？なぜ……！！なぜ……！！」

公爵は泣き崩れた。

なぜ、私が気づいてやれなかったんだ

！！

夫人はリリアンの魂が抜けた体を見つめると、ゆっくり額をなでた。

夫人は大分理性を取り戻した。

そして、たった一言呟いた。

「この子、きっと病気に気づいてたんだわ」

公爵は顔を上げた。

「なんだった!?!」

夫人は公爵の方を向き、一筋の涙を流した。

「だって、リリアンは最近何時も言ってたもの。私や貴方のこと大好き、ずっと一緒にいてね、って……」

リリアンは、何度もそういうことをいう子ではなかった。

「お母さんのこと好き？」

昔はそんなことを聞けば、娘は考え込んで、そして恥ずかしがって答えなかった。

なのに、最近は。

だから、笑顔のリリアンを見たとき、母はおかしいと思ったのだ。

ああ　　リリアン、貴女は見たのね？

私たちの、心を。

貴女の、命の灯火を。

向日葵色の灯火（後書き）

結局エリーが出てこなかった・・・。
ああ、なんてこと（引用！？）

花の心は変われど

「ミーフェ、アノ問題分かった？」

「いや、さっぱり。私数学だなんてあまりやったことないし」

「・・・私も。貴族って数学なんかやらないわよ。きつと」

「・・・そういえば、聞いた？舞踏会のこと」

ミーフェはエリーと一緒に回廊を歩きながらたずねた。

最近のエリーも夫人の授業になれ、ミーフェもちゃんと出席するようになったせいか、数学や世界史などで難しい授業が行われていた。

エリーは頷いた。

「ええ。グルニエル家が主催なんでしょ？」

ミーフェは笑った。

「そうね。会場は山の上の別荘ですって！舞踏会ってホントにめんどくさそう」

「？なんで笑ってるの」

エリーはまるで分からなかった。

それを聞くとミーフェは更に笑い出した。

「プツ！だっておかしいんだもん！エリーが舞踏会のドレスを着てるとこ想像すると」

「は！？なんでよ！むしろおかしいのはミーフェじゃないの」

「まあまあ。おかしいのはドツチもということぞ！」

ミーフェがそう言うと、二人して笑い出した。

なぜか、ミーフェと一緒にだと心が軽くなった。

日ごろの悩み（公爵）や、考えや悩みや悩みが吹き飛んでいくのを感じるよう。

だから、舞踏会だって気にならなかった。

まあ、貴族の行事が多いことは分かっていたことだし。

「で、どうしたらお父様と仲良くなれるかしら・・・まだいまだに話じづらいし」

エリーは切り替えた。

「えー？まだ話してないの。ふうん」

「そうなのよ、どうしましょうミーフェ。嫌われてるのよねヤッパ
リ……。はー。どうしてなのかしら」

エリーは真面目に考えた。

どうしてかしら、お父様が私を嫌う理由って……？

もしかして、子供が嫌いとか

エリーは青ざめた顔をさらに引きつらせた。

「ああ！どうしましょう、ミーフェ！！私もうお父様に一生認めて
もらえないんだわ。どうしましょう」

ミーフェはまた笑い出した。

「ふふ、エリーったらネガティブねえ。私だったら、

ああもう、いーわこんなお父さんなんて！こっちから願い下げ
よってなるわー」

エリーはつくづくミーフェを尊敬した。

「す、すごい・・・凄すぎるわミーフエ・・・貴女が輝いて見えるわ」

「まーそれは凄いね。私は黄金色？」

「・・・私、どうしたらポジティブになれるかな」

エリーが弱音をはいた。

その背中をミーフエは思いっきりたたいた。

「痛っーーーーー！！！」

「あのねえ、ウジウジ悩むんじゃないわよ！あんたのいいところは馬鹿でアホで生真面目でチリチリしてるところなのよ！？」

それを使わないでどーするってのー！」

「・・・なんか今物凄い事言われた気がするわ」

エリーは真面目に落ち込んだ。

エリーはドサツと自分のベッドに腰を下ろした。

寝転がり、窓に映る空を眺める。

「・・・私って、ココに来て本当に幸せだったのかな？」

今思うと、私は幸せじゃない。

そう思うと、罪悪感も・・・沸いてくる。

お父様、元気かな・・・

私、ここにきて、良かったんだよね？

「・・・今は、舞踏会にでる準備をしなきゃ・・・」

エリーは迷っている自分自身に言い聞かせた。

そして、気力を奮い起こして部屋を出た。

「エリー様はどのようなお召し物がよろしいですか？」

侍女がだだっ広いに案内し、有り余るほどのドレスをお披露目されたときはエリーもびびった。

いつもは侍女に渡されていた洋服を着ていたので、まさかこんな量があつたとは知らなかった。

「こ、こんなにあつたのね」

「はい、これは全てエリー様のもので御座います。」

「え！？お母様の分も別にあつたりするの？」

「勿論です。ご夫人は部屋二つ分ありますよ」

「！……！」

エリーはそれ以上深く追求するのを止めた。

「舞踏会にはどういふドレスがいいのかしら」

エリーは村にすむ娘だったので、無論舞踏会なんて出たことが無く

どのようなドレスを着れば良いのか検討もつかなかった。

そこで、侍女が腕組して答えた。

「確か・・・リリアン様はよく向日葵色やリンドウ色のドレスを着ておりました」

「ふうん、そうか。じゃあ、着たい色でいいの？」

「はい、黒や茶色、灰色などでなければよろしいかと」

侍女の言葉に、エリーはゆっくりとドレスに手を伸ばし始めた。

花の心は変われど（後書き）

あんまり話が進まない・・・御免なさい！

出会い降る舞踏会 <上>

『グルニエール公爵、並びにグルニエール公爵夫人、並びにグルニエール公爵ご令嬢のご入場でございます!』

盛大な拍手と共に、公爵と夫人、そしてミーフェに付き添われてエリーが舞踏会会場にやってきた。

エリーは綺麗なマリンスプルのシンプルなドレスに身を包み、豊かな髪は横髪を肩に垂らし、後ろ髪は後頭でまとめられている。

一方ミーフェは白藍のすっきりとしたドレスに、ゆるくカールさせた髪が似合っていた。

エリーはミーフェに囁いた。

「ちょ、ちょっとミーフェ!なんでこんなに人が居るのよ!」

「決まってるじゃない!グルニエール公爵は下級貴族も招いてるからよ。それに今日は公爵の弟君であるヴィアナ王国国王が来るって噂もあるし」

「は!?!お父様って王様の兄だったの!?!」

「何よ。知らなかったの」

「……うん」

エリーは情けなくなってきた。自分は何処まで政治を知らないのか。

そこから、ミーフェは今の政治の動きについて事細かに説明し始めた。

今の王は政治のことをよく理解し、国のために尽くしている・・・

王の名はヨージアン・エルドナ・グルニエル・スイープ・オブ・ヴィアナ・・・

そして、恥も恥らう青春真っ盛りの16歳。エリーの二つ上らしい・・・などなど。

エリーとミーフェが応接間で立ち往生していると、どこからか夫人がやってきた。

「エリー、ミーフェ。あなた達もステーキ・キドニーパイをいかが？ 凄く美味しくてよ」

「ありがとうございます、お母様。頂くわ」

エリーはミーフェを連れてお腹がなるのを抑えながら大広間へ進んだ。

大広間・・・

そこは、夫人の言葉だけでは言い表せれないような、夢の光景が広がっていた。

「凄い・・・凄すぎるわミーフエ。いつも食べてる食事の一年分がここにあるわ！」

只でさえ豪華な貴族の食事が更にパワーアップしている。

こんな量どっからもって来るんだ??

「本当。お腹なっちゃうわね、よし・・・どっちが多く食べられるか競争よ！」

「ふっ！受けて立つわよ」

ああ、とても公爵の娘とは思えない・・・エリーは自分でもわかった。

そして、エリーがゆでポテトをほおばり、ミーフエがステーキ・キドニー・パイにパクついていると、放送がかかった。

『まもなく、現ヴィアナ王国国王、ヨーアン・エルドナ・グルニエール・スリープ・オブ・ヴィアナ様をご来場されます。』

盛大なファンファーレと共に、沢山の警備隊に囲まれた王が入場してきた。

王様にしては華奢な体つきその人は、少し肩に掛かっている金髪を揺るがせ、王冠にきらめく宝石を輝かせながらゆっくりと公爵の方へ足を動かす。

公爵も立ち上がり王の下へと歩み寄ると、懐かしむように王を見つめ、礼をした。

「ヴィアナ王国国王様、この度は私の舞踏会にお越しいただき、誠にありがとうございます。」

「……………ああ。」

王は静かに声をだした。

「……………して、そちらに居られるのは？」

王は静かなトルコブルーの瞳をエリーに向けた。

うわー・・・すごい気品溢れまくりなんですけど！王様ってやっぱりすごいよね・・・

エリーは王の視線にビビった。

「わ、私は公爵の娘、エリー・リーブ・マフィー・グルニエールでございます。この度は国王様にお会いできて誠に嬉しゅうございます。」

「そうですか、貴女がかの・・・エリーさんですか。兄がよく話していましたよ」

「え、お父様が！？」

エリーは驚いて父に向き直った。

公爵は慌ててゴホンと咳をした。

「私は別に・・・ただ養子にやってきたことを話したただけだ！」

「可愛い娘だといってましたよ。リリアンちゃんのようにってね」

エリーは辺りをきょろきょろさせる父をキョトンと見つめた。

「お父様・・・」

「あの、兄は気難しい人ですが優しいので・・・仲良くしてあげてください」

王様はエリーにペッコッとお辞儀した。

お、王様がお、お辞儀した!!!

「きゃー！王様！お辞儀しないでください！」

「え？」

エリーは思わず叫んでしまった。

出会い降る舞踏会 & I t · 上 & g t · ; (後書き)

王様の名前・・・長っい！

出会い降る舞踏会 & l t ; 中 & g t ;

『それでは只今より、オーケストラにあわせてダンスを踊ります。みなさん二人一組でペアになってください。』

放送が掛かったと思えば周りの人は皆ペアを組み始めた。

「え、あ、どうしようミーフェ。私ペアなんて作れないわ！男の子の友達なんていないもの！」

エリーは慌ててミーフェに呟いた。

しかし、ミーフェはその言葉をサラリと受け流した。

「大丈夫よ、貴女は。もう決まってるもの。それに私は貴女を守るお役目だからダンスなんてしなくていいのよっ」

「え　　決まってるって言ったって　　」

エリーが呆然としてみると、アノ王様がやってきて、エリーの手を取った。

「私と一緒に踊っていただけですか、姫」

ん？この人王様じゃん・・・ん！？待てよ？王様？王様・・・

もしかしくなくても、王様って……

私のお、お、叔父さん!!!???

「ギャアアアア!!!」

エリーは堪えきれず叫んでしまった。

「だ、大丈夫ですか姫！えっと、私足を踏んでしまったですか？」

王はオロオロとたずねた。無理もない。一緒に踊っていた少女が突然発狂したのだから。

「つ、疲れたわ・・・えっと、ミーフェって何処？」

エリーは音楽が一旦止まった途端、すぐさま王様に一礼し、去って来た直後だった。

王様はキョトンとしたが、ややあつて笑顔になった。

『そうか、疲れたのか。では少し休んでおりますよう、姫』

いやー・・・王様って紳士的だな・・・思わず惚れるトコだったわ。

でも、なんでミーフェは私と王様が踊るって知ってたんだらう？

ま、いつか。

エリーは軽く受け流すとミーフェの搜索活動にはいった。

「え〜？ミーフェ何処よ？」

エリーはまた始まった音楽にあわせてスキップしながら目をキョロキョロさせていると、何処か一点に目を留め、ジーっと見つめると、スキップを止めた。

「ミー・・・フェ？」

なんと！！エリーが見つめる先ではミーフェが薄い空色の髪の少年と踊っている！！

ミーフェ・・・最初は舞踏会に行くことさえ、嫌がっていたのに。

「・・・すごいなあ、あの少年。どうやってあの頑固なミーフェを誘い込んだんだ？」

エリーは好奇心で近くに寄ってみた。

大きな柱の影でコソコソのぞく姿はかなり怪しい人物である。

ミーフェは顔をほんのり紅に染めながら、楽しそうに踊っている。

少年は顔を真っ赤にしてシルクのタキシードを強く引っ張った。

「なんか・・・初々しいな。両方。可愛い・・・」

エリーはクスツと笑った。そして、どこか決心したような眼差しで踵を返した。

一方テラスでは、夫人と踊り終えた公爵が一人夜風に当たっていた。

77

「お父様、少し、いいですか？」

振り返ると、そこには養女^{エリー}がいた。

公爵は深呼吸して心を落ち着けると、おもむろに口を開いた。

出会い降る舞踏会 & I t · 中 & g t ; (後書き)

ギヤーとか、ああーとかたくさんありますが、気にしないでください！

出会い降る舞踏会 <下>;

エリーは早速、公爵に一番聞きたかったことを尋ねた。

「どうしてお父様は私を嫌うのですか？」

公爵はいきなり迷った。

何と答えるべきか……

「……嫌っているわけではない。ただ……」

「ただ？」

公爵はエリーの挑むような眼差しを遮り、再び夜空を見上げた。

「ただ、お前の姿がリアンと重なって、また死んでしまうのではないか……と。だから、また死んでしまっても悲しくないように、軽蔑した……」

エリーはびっくり仰天した。自分の父はそんなコトを考えていたのか
！！

そして、次の瞬間、エリーは物凄い事をやったのけた。

「バシンッッッ！……！！！」

公爵の艶やかな頬に、なんとビンタを繰り出してしまったのだった。

「……………いた」

公爵はちよっぴり咳くと、エリーに眼を向ける。

エリーはぶちぎれた。

「なんなのよその理由！私はそんなコトのためだけに軽蔑させられてたってわけ！？意味わかんないわよ！ってか、……………いたって！遅いわよ反応！しっかりしなさいよ私の父！」

エリーは半ばヒステリック気味で息切れを辛うじて堪えた。

一方公爵は、ポカンと口をあけてそのまま放心状態に陥った。

そして、その後勢いよく笑い出した。

「あっはっはっはっはっは！！！！」

「あー？なんか文句でもあんの！」

「ツプ・・・別に。いやーよかったよかった」

「何がよ」

公爵はその後から急に口調が変わった。

「わが娘と新しい娘は全く似ていない。どうやら私の間違いだったようだ。しかし結果私は君が面白い子だと感じた！それは・・・どういう意味か、分かるかね？」

エリーも口調を変えた。

「わ、分かりません。」

すると、公爵はよしよしとエリーの頭を撫でた。

「私は、今このときに初めてエリーは私の娘なんだと感ずることが出来た、ということだよ」

「！！！！！！」

エリーは公爵を見上げた。

「私の今までにしたことを、許してくれるかい、エリー」
公爵はそつと言った。

途端に、エリーの目からは涙が溢れた。

「う……うん……」

エリーは思いっきり泣きはらした。

その後、貴族の住む通りでは、グルニエール家の公爵とご令嬢は大変仲が良いと噂が流れた。

そして実際、そうなのであった。

出会い降る舞踏会 & 1 t ・ 下 & g t ・ (後書き)

やっと和解できました。

緑葉は一時の光を見上げ

「ミーフェ、今日はいいお天気ですからぁー乗馬のののー練習をし、しましよー!？」

エリーは久しぶりの敬語に挑戦し、失敗した。

ミーフェは呆れて頭を抱え込んだ。舞踏会にもいったという令嬢がなんでこんななのか聞きたい。

「あんだねえ・・・なんなのよその宇宙人語・・・。私そんなのであんだと一緒に歩きたくないわ。」

「うつ・・・ごめんミーフェ!!私、やっぱり行き当たりばったりが丁度いいみたい」

「丁度いい・・・じゃないわアホタレーーーー!お前は何考えとるんじゃない!？」

「まあまあ、とりあえず、行きましょ乗馬!」

エリーは乗馬の服に着替えるため、ミーフェを引きずりながら着せ替え部屋に急いだ。

公爵はすっかりエリーを気に入り、乗馬も勿論許可してくれたのでエリーは毎日のように馬と戯れていた。

ミーフェは乗馬のプロフェッショナルだったので、エリーはミーフェに教えてもらっていた。

「今日は湖の方へ行きたいわ、ミーフェ」

エリーは馬に跨ってミーフェに言った。エリーはもう大体の基礎は覚えたので、今は何処へでもいけるようになっていた。

「そうね・・・ここは敷地も沢山あるし・・・じゃあ湖行ってみる？お弁当もって」

「っわあ！やったあ！侍女にいつて用意してもらいましょ！」

エリーは馬から飛び降りて侍女の方へ駆けていった。

「じゃ、出発ー！ー！」

エリーは侍女に渡された（正確に言うとなんかエリーがねだった）弁当を自分の前に置いて叫んだ。

エリーとミーフェは手綱を軽く揺らした。

馬はブルルツと一声あげるとゆっくり足を動かし始めた。

「気持ち良いね、乗馬！大好き」

エリーが肌で風を感じながら一言。

ミーフェもつられてほんわか咳いた。

「本当・・・なんかこのまま眠ってしまいそう。」

「・・・あ、そういえばミーフェさ、舞踏会の時誰かと踊ってたよね？あの人誰なの？？」

エリーは急に思い出してミーフェの方を見た。

その途端ミーフェは顔を赤らめた。

「な、何で知ってるのよ！？」

「えー・・・だって私ダンスの音楽一回止まった瞬間すぐに抜けてあなたを探したの。そしたら・・・ねえ」

エリーは嫌らしい目つきでミーフェを睨んだ。

ミーフェの顔はいまや赤カブの如く真っ赤だった。

「だって・・・バースが踊ろうって言うから・・・！」

「バースウ？それは、もしかなくてもカレの名前ね？まあ、すごいわ、ミーフェったら。恋もプロフェツショナルねえ！」

「……！ちよつと意味分かんないわよ！バースとはただの」

ミーフェは思わず馬から落ちそうになった。

エリーはふふふと笑ってミーフェの肩をポンポン叩いた。

「大丈夫よ、私誰にも話さないから。お昼時に詳しく聞かせてもらうわ」

「……」

ミーフェは悪魔という存在を、たった今確認したのだった。

「ふう、ここね！始めて来たけれど凄く綺麗な湖！」

エリーは馬から下りてうーんと伸びをした。ミーフェもおりて馬についている手綱や蔵を外すと、馬に草を食べさせた。

「あそこに魚が居るわ。見物しながらお昼をいただきますよ」

(そしてミーフェとバースの情報もいただくわ！)

ミーフェの言葉に、エリーは密かに付け足した。

お昼ご飯は小麦のずっしりとした美味しいパンと、麻布にくるまれたチーズ、それにありとあらゆる林檎や桃などのフルーツだった。

きつとエリーがいきなり厨房に駆け込む勢いで『弁当!!』なんていったから、すぐさま準備したのだろう。

しかしエリーはこういう味が村人の時を思い出させて懐かしく思った。このパンは大好きだ。

エリーはパンの欠片を口に放り込むと、ウーンと舌をうならせた。

「もいしいい！もてえ、もいひいよ、ヒーへ！」

口の中はパンでいっぱいなので何を話しているのか分からない。

「うんうん、分かるわ。もっちもちで美味しいのよね」

ミーフェは事も無げにエリーの言葉を理解してのけた。

エリーは嬉しそうにブンブン首を振ると、ミーフェにもパンを勧め

た。

ミーフェはパンを一口ちぎっていると、急に何かを思い出したようにうつむいた。それをエリーは見逃さなかった。

「ミーフェ、そういえば・・・バースとの関係は??？」

ミーフェは急に普通の口調に戻ったエリーを睨みつけて、それから深くため息をついた。

「・・・ただの幼馴染よ。小さい頃、私は騎士だった父に武術を教えてもらってたんだけど・・・そこにいつの間にかバースもやってきてバースも武術を習得したの。」

当然女の私より体力とかあるわけだからバースはすぐ騎士になった。確か　　12歳だったかな。」

「!?!?12才!すごい・・・もしかしなくても最年少よね」

エリーは感嘆した。もしかして、ミーフェも騎士になれるのかな

ミーフェは湖の水面を進む鴨の群れを見つめながら苦笑した。

「ええ。バースは才能をかわれてドンドン出世の階段を駆け上って、今じゃ地方の立派な騎士団長よ。」

「ええ!?!バースって人本当に才能があるのね!ミーフェは騎士に

ならないの？」

エリーはバースの凄さに感嘆した。そしてミーフェも騎士団長くらい出来るんじゃないかと思った。

ミーフェはその言葉を笑い飛ばした。

「あはははは！私はもう騎士よ？だって、貴女の専属騎士じゃない」

「あ、そっか。」

そういわれれば、確かに確かに・・・

エリーは気づいた。

「で、ミーフェはバースと両思いなんだ」

「は！？なんでそうなのよ！バースとはただのライバル！騎士団長も舞踏会に招かれてたからバースがいて、

たまた

まあったから一緒に踊っただけ！」

ミーフェはカンカンになって叫んだ。が、エリーの様子を見て驚いたようになった。

エリーは口をあんぐりあけて、今にも泣きそうにしていた。

「……騎士団長……」

……お父さん……来ていたのかしら。

「エリー？どうしたのよ、そんな萎れた菜っ葉みたくへこんじゃって」

ミーフェはポンポンとエリーの背中を軽く叩く。

エリーは目を少しだけ閉じて、また開いた。そこには、もう前の父を思う気持ちは少しも見当たらなかった。

「うっん、なんでもないわ。さあ！また乗馬しましょうっ」

「そうね。コースは？」

エリーはミーフェにこっそりと小声で何かを伝えた。ミーフェは小声で「いいわよ、行きましょ」と言いながら頷いた。

そして、二人は空のバスケットを持って再び馬に跨ると、もどきた道に戻った。

緑葉は一時の光を見上げ（後書き）

話がうまく進みません。

読んでくれた方、御免なさい・・・。

花は新たなる光を辿り

「あなた……どうしましょう……。あの子はこの事を望むと思えますか？」

夫人は心配を募らせた面持ちで夫であるグルニール公爵を見た。

公爵は重大極秘事項が書き記された手紙を覗き込み、少しの間沈黙すると、手紙を分厚い封筒に仕舞いいれ引き出しに入れた。

公爵は、おもむろに口を開いた。

「もしかすると、エリーは……」

「エ、エリーは？」

「……王家の花となる運命なのかもしれん……」

「おや、エリー。ミーフェも。もう戻ったのかい」

公爵は夫人と一緒に書斎に居た。

エリーは空の弁当箱を侍女に預けると、夫人の隣のソファに腰掛けた。

「ええ、お父様、お母様。」

「ご機嫌麗しゅう、公爵様、並びに公爵夫人」

ミーフェは深く敬礼した。クスクス笑いが二人から見えないくらいに深く。

エリーはミーフェに侍女からのレモネードを渡し、自分もレモネードを口に運んだ。冷たくて、レモンのいい香りがした。

やがて、エリーは見事な彫刻が成されたグラスをコトンとテーブルに置くと、公爵と夫人の方に向き直った。

「あのね、お母様・・・それに、空いてればお父様も。」

公爵と夫人はキョトンとエリーとミーフェを見つめた。

「何？今日はエリーは何も用事はないはずだけど・・・」

「う、うむ。」

エリーは大きく呼吸をして、立ち上がった。

「私達、お父様とお母様と一緒に乗馬に行きたいの！！！」

「・・・・・・・・・・はあ。」

公爵は公爵とは思えぬ眼差しでエリーを見た。

エリーは慌てた。怒られるかもとは思っていたが、まさかこんな反応を示すとは思いもしなかった。

「あ！別にいきたくなかったらいいの！全然・・・でも、やっと家族みんなで仲良くなり始めて、ミーフェも凄く仲良くしてくれた。

・・・・・・・・私は、みんなにお礼が言いたくて。」

「エリー・・・・・・・・」

夫人は喉を詰まらせた。目も潤む。

ああ、この子は、此処に来て、幸せでいる。

少なくとも、悲しい思いはしていないんだわ。

「あの、行ってあげましょうよ、2人とも」

ミーフェが加わった。

公爵は、暫くポカンとしていたが、その後立ち上がった。

「よし、行こう。エリーの頼みとあらば、何でも。」

夫人は、公爵を見ると、ふっと笑った。

「ふふ、そうね。」

そして夫人は一人の侍女を呼びつけた。

「御願があるの。・・・馬を四頭、それに・・・弓の用意を」

「畏まりました。」

夫人は、エリーのほうに向き直った。

「さっ、エリー！行きましょう」

「エリー！今よ！」

ミーフェの叫びに、エリーは矢を放った。

すると、一匹の猪を仕留めた。

最初は乗馬だけと思っていたものが、いつの間にか狩もしていた。

ミーフェは猪鍋が100個出来るかと思ったほど、多くの猪や野兎を仕留めた。

夫人と公爵もかなりの腕前で、次々と獲物に矢を放った。

「ふう、汗をかいたわね。向こうの川で少し休みましょう。」

夫人がそう言ってくれた事で、三人はやっと汗を拭う間ができたので感謝した。

川の水を馬に飲ませながら、エリーはふと思い出した。

「そういえば、私宛に手紙が来ていたわ。侍女さんが行く前にくれたの」

夫人と公爵は吃驚して飛び上がった。

「まー!?まさか!」

「だ、誰から!」

「え!?誰よ、そんなモノ好き!」

ミーフェはおやつのマーマレード味のサンドクッキーを頬張りながら、笑った。いかにもそんな人居るもんなんだという感じで。

エリーは肩をすくめてクスクス笑った。

「実は手紙は二通あって……一つは、なんとバースから!」

「きゃーーーーー!」

ミーフェはエリーのドレスのポケットから差し出された簡素な手紙を自分に渡されて、顔を引きつらせながら叫んだ。

「でも、私宛じゃなくて、ミーフェ、貴方だった。きっとどうやって送ればいいのか迷ったのね」

エリーはすつごく微笑んでミーフェにニカッと笑いかけた。

夫人は、バースのことを知りたかった。

「バース??? 誰なのそれは。ミーフェの知り合い?」

「それがねお母様。知り合いどころじゃないのよ。実は・・・ミーフェとバースは幼馴染で、しかも運命の相手なの!」

エリーは興奮して言い切った。

「ちょ、ちよつとエリー!!!」

ミーフェは顔を真っ赤にして撤回しようとした。

「これは違うんです! エリーの聞き間違いで」

「まあまあ! ミーフェったら、やるじゃない」

夫人は公爵と一緒ににっこり微笑んだ。

「だから違つって」

「何かあったら、なんでも言ってくれ、ミーフェ。何でも協力するからな」

公爵はキラーンとガッツポーズをした。

エリーは封筒から真っ白な便箋をとりだして、ミーフェに渡した。

「さあミーフェ。なにが書いてあるのか、読んでちょうだい!」

ミーフェは観念した。

「んもう全く・・・いいわ、読むわよ。」

ミーフェは手紙を読めるように日光に照らした。そこには、丁寧な細い字で、こう書かれていた。

『 ミーフエ

この前は、ダンスパーティーと一緒に踊ってくれて有難う。久しぶりだったね。

噂によると、大分剣の扱いが良くなったと聞く。

また何時か、手合わせは出来ないだろうか。

僕は騎士団長の仕事が世話しなく入っているため、出来る日にちは此方から決めさせてもらうが・・・大丈夫だろうか？

君はグルニール公爵のご令嬢に仕えているといったね？

そっちの生活は楽しいかい？

僕は・・・毎日が戦いだよ。

朝は早朝四時に起きて、稽古をするんだ。

本当に大変だ。

だが、騎士はやはり僕にあっていいると思う。

ミーフェは、自分もそうだとは思わないのか？

自分も、また騎士に戻りたいと、思わないのか？

いつか、日にちを記した手紙を送る。待っていてくれ。

ントラス地方ヴィアナ武力騎士団騎士団長　バース・エグフェイネ
ス・クリエスト』　カ

「あれ？ミーフエって前に騎士やってたの？」

エリーは初耳のことに驚いた。

「ああ、それね。うん、そう。専属騎士は、騎士を5年やってない
とできないのよ。」

その影で、公爵と夫人は「若いわねえ」とか、「青春だ……！」
とかなんとかを言っていた。

ミーフエは堪えきれず呟いた。

「……………もういいです。二人とも、応援なんて結構
！……………それでエリー！もう一つは！？」

「話題そらしたわねミーフエ。とにかくもう一通なんだけど……………」

エリーは緊張気味に手紙をみんなの前に翳かざした。

「あ……………王様からだったの。」

「……………なんと！ヨーアン直々に……………」

公爵はチョコレート・サンドを取り落とした。

「?何のこと?」

エリーには何かなにやらサッパリである。

そこで夫人は、エリーの口いっばいにサンドを詰め込ませてから、静かに言った。

「あの、エリー。手紙・・・ヨーアンさんの、読んだ?」

エリーは首を横に振った。乗馬に行く直前だったので読む時間がなかったのだと言いたかったが、口にモゴモゴはいつているせいで何もいえなかった。

これが、夫人の狙いであったが。

夫人は「そう。」と言って公爵に目を向けると、公爵はいかにも不安げに夫人を見返した。

夫人にはそれが合図になった。

「あのね、エリーには今・・・・・・王様への、なんて言うか　お見合い話があるの。この意味、分かる?」

ミーフェはそれを聴いた瞬間、口を覆った。

王の嫁になる　それは王妃になるといふ事でもあり、同時に、この王国の花と言ふべき存在となることを示していた。

即ち、エリーはこれから沢山の責任と、国民の思いと、そしてこの王国を王と共に背負っていくべき存在となるということだ。

三人が揃ってエリーを見つめる中、エリーはただ、口に入っているあらゆる味のサンドを動かしながら、下を向くばかりだった。

花は新たなる光を辿り（後書き）

随分長くなってしまいました。すみません。

評価・感想を、心よりお待ちしております！
もう一度言いますが・・・待っています！！！！！！

光と道が辿る運命は

エリーは、父と母とミーフェとの昼食を終え、真直ぐ母の部屋へ急いだ。

ノックをし、夫人の返事を聞き取ると、扉をゆっくりと開けた。

「お母様、少しいいですか？」

夫人はエリーに優しい微笑をみせると、手招きした。

「決まったの？」

夫人の直球な問いかけにエリーはたじろいだ。

「あの・・・はい。決まりました。」

「それで、どうするの？」

エリーは俯いたあと、母の方を向いて自信に満ちたような、悲しそうな笑顔を浮かべた。

「もうすぐ春が訪れます。ここに初めて来た日から、もう一年間が

経とうとしています。」

「……ええ。大きくなったわね、エリー」

「はい……そうなんです。だからこそ、私はいろいろな環境で、自分がどれだけの……生きていくうえでの期待に答えられるか、ぜひ試して見たいんです。でも、いきなり別れるのは寂しいから……春までここで、政治のことや王様に関しても含めて、勉強がしたいです。……これが、私の決めた道です。いいですか？お母様」

夫人は口を開けてエリーを見つめた。

「私……エリーは強い意志を持っているとは思っていたけれど、ここまで考え抜いているとは思いませんでしたわ。」

エリーは、瞬きました。

「それじゃあ、いいんですか？」

母は、瞼を閉じて微笑んだ。

「いいわ、貴女がそのように決めたのであれば、私に反対する権限はございません。ただ……」

「ただ？」

エリーはいきなり顔色を変えて夫人の顔を覗き込んだ。

一方夫人は嬉しそうに笑って、エリーの頭を撫でた。

「お父様があなたのお嫁入りを許してくれるかしらねえ？今は、あなたのことすつごく大事にしているから、もしかしたら・・・！」

「えええ！？どうしまししょうお母さん！私、お嫁にいけないのですか！？」

驚愕するエリーを見て夫人は思いつきり笑った。

「ふふふふ・・・！何もそこまで反対したりしませんよ。説得できれば、いい人ですし。政治に関していろいろと教えてもらえたりするわ。」

エリーは心底安堵した。正直言つて本当にお嫁に行けなくなったらどうしようとかを必死で考えていたのだった。

「よ、よかった・・・それで、ミーフェは、私の元でこれからも居てくれるんですか？」

夫人が窓の外で日向ぼっこをしているお昼休みの侍女たちを見つめながら、少し、顔を歪めた。

「それがねえ、何とやらなのよ。ミーフェは、王家を守る騎士の一環として、専属騎士になったでしょ？」

「はい、聞いたことがあります」

「でも、管轄で言うと、ミーフェは王に雇われてるんじゃないくて、兄の公爵に雇われてるわけでしょう？だから、エリーがもし王の下へ嫁いだとしても、ミーフェがずっと一緒に居られるかって言われ

ると、定かではないわ。」

エリーは腕を組んで壁に寄り掛かった。

「・・・じゃあ、もし王様がミーフェを雇いなおしたら、ミーフェは確実に一緒に居られるってことですよね？」

「ええ、それなら筋は通るけど・・・」

夫人は娘を同情の目を見た。

しかし、エリーは拳を天井に突き上げて叫んだ。

「だったら私、王様と仲良くなります！」

「え？」

エリーは、夫人をキラキラと輝かしい目で見て言った。

「私が王様と仲良くなって、それで結婚すれば、ミーフェをずっと専属にしてくださいってお願いできるかもしれないもの！どうですか、やってみる価値は大アリでしょう！」

夫人は一瞬ばかんとして、また微笑んだ。

「本当にあなたは面白い子ね。これからの国家は安泰だと思えてくるぐらいよ。」

エリーは苦笑いした。

「これでうまく行くか分かりません。でも、王家へ嫁ぐ最初の試練^{ミッシェン}として、頑張つて仲良くなりたいです！」

夫人は、エリーの背中をポンポンと軽く叩いて笑顔でドアのほうに導いた。

「あなたの覚悟は分かったわ。私からも機会があつたらお父さんに話しておくから、今日はミーフェと散歩にでも行つてらっしゃい」

「え？でも、午後の授業はないんですか？」

「今日は・・・三時から夫人お茶会があるの。私はジーグルド男爵夫人のところへ行かなくちゃなくなつてね。だから、今日は授業はお休みよ。ミーフェと一緒に、残された時間を存分に使いなさい。それにこれからは授業は受けたいときに知りたい分だけ、教えてあげるわ。そのほうが時間も節約できてお得だし・・・なーんてね、公爵夫人がお得だなんて言っちゃいけないけど・・・いい？エリー」

夫人の長い返事にエリーは喜んだ。

「はいっ！そのほうがいいです。じゃあ私今からミーフェと一緒に果樹園を散歩してきます！ミーフェに、今決めたこと、伝えたいので」

「そうね、ミーフェもあなたも、心の整理が必要だわ。じゃあ、ご夕食でまたね。」

「はい、お母様。」

エリーは、スキップしながら、お昼休みを終えた侍女達に挨拶しながら、ミーフェを探した。

光と道が辿る運命は（後書き）

随分更新が遅れてしまい、誠に申し訳ありません！

これからも不定期更新になると思いますが・・・
長い目で見守っていただければ幸いです。

果樹園の中で、桃の木が蕾を開かせようとしている。

エリーとミーフェは葉や花が消えて颯爽としている果樹園の中を歩いていった。

「ふーん、だから王と仲良くしようって訳ね。」

エリーから事情を聞いたミーフェは、灰色の空を見上げて言った。

エリーは頷いた。

「そう。ミーフェと一緒に居たいもの。」

それを聞いてミーフェは驚いて顔をエリーに向けた。

「そうなの!？」

「え? うん、そうだよ。 . . . もしかして、先客でも居た?」

エリーは首をかしげた。

それを見たミーフェは呆れた。

「先客って . . . 居るわけじゃない、そんなの。誰よ」

「・・・バース？」

「！！・・・アンタねえ、いい加減にしてちょうだい！」

ミーフェにカツンと一発叩かれたエリーは後頭部を摩った。

「いたっっ！もうミーフェの馬鹿！」

「ふんっっ」

ミーフェはそっぽを向いてからエリーをチラッと見た。

「・・・そういえば、バースとの手合わせだけど、今年の夏じゅうに決まったから。」

「あら、そうなの！じゃあ、私は王様と見物するわね」

「いいわ、今回は特別よ。私、勝つ自身あるんだから」

ミーフェはエリーに手を軽くあげた。

「うん、ミーフェはきつと強いよね。剣の素振りしてるときでも気迫を感じたわ！」

エリーは手を合わせて嬉しそうに笑った。

そして、ふと舞踏会のあの時を思い出した。

「そういえばミーフェ、なんでバースとダンスしたの？」

「え!？」

ミーフェは不意打ちをくらった。

「だーからー!バースの方から誘ったの?それともあなたが誘ったの?しかもあなた凄く楽しそうに踊ってたわよね」

ミーフェは苦笑いするほか無かった。

「う・・・まあ誘ったのはバースなんだけど、踊り始めたら私も楽しくなって、随分と踊ったわ。」

「おー!!これぞ恋の予感よねえ〜!ミーフェったらいつの間にな〜!？」

その後エリーはミーフェに肘鉄を食らった。ミーフェはしかり格闘技も強いのだった。

二人はその後もあれこれと討論をし、気づけば果樹園の端っこまで来ていた。

「なんか、もう日が暮れそうね。馬に乗ってきていないから帰るのが大変そう・・・」

エリーは暗褐色の空を見上げながら、不安げに呟いた。
ミーフェもブルブルと肩を震わせた。

「雨も降りそうよ。なんだか寒いし……」

「うん、とりあえず……どっか暖かいところ探そうか？」

エリーの提案に、ミーフェは素直に頷いた。

が。

見つけるのは、容易いことではなかった。

空はどんどん暗くなり、やがて雲で覆われ、拳句の果てには大粒の雨が降り始めたのだ。

「うわー！ちょっとミーフェ！どうしよう！？お母様やお父様も心配してるのに……！」

エリーはどんどん雨で濡れていく髪を巻き上げ、ドレスの裾を持ち上げてワンピースのようにしながら走った。

ミーフェはどこからとも無くおおきなマントを取り出して、エリーと自分に被せた。

「どっしりよじじゃないわよ！とりあえずこのマントに包まって、何処か屋根の下で一夜を過ごすしか……！」

「そんなこと言ったって屋根なんて何処にあるのよ!？」

エリーは吹き荒れる風に負けないように声を張り上げて叫んだ。

ミーフェも負けじと叫ぶ。

「そんなの知らないわ! って・・・あれ、なんか小屋じゃない!？」

エリーはミーフェの震える指が指すほうを見た。たしかに、掘っ立て小屋らしきものが見えた。

「とにかく、あそこへ行きましょう!」

エリーが声を張り上げ、雨が更に激しくなる中、小屋へと近づいた。

「バタン!」

ミーフェが警戒しながらも勢いよく薄いドアを開け、小屋の中へ流れ込んだ。

エリーは暗い中蝋燭を見つけ、灯りをとると、ゆっくりと質素な狭い床に倒れこんだ。

「ふう・・・なんだか、一瞬にして凄いことになったわ・・・」

「ほんとに・・・あ、これ置いてあったからもってきたわ」

ミーフェは小屋の中を物色し、勿忘草のような色の液体が入ったビンを二つ手に持って、蝋燭の火を移した暖炉の近くにコトンと置いて、自分も座った。

エリーは、暖炉の前で手を摩りながら、ビンを見つめた。

「・・・何かしら、この飲み物。勿忘草をそのままジュースにしたみたい。」

「ええ。なんか美味しそうだから持ってきたわ・・・ああ、大丈夫よ。もし飲んで死にそうになったら、解毒剤もってるし」

エリーが不安げにミーフェを睨んだので、ミーフェが付け足した。

「う・・・なんか喉乾いてるけど・・・飲んだ瞬間死んだりしたらどうしよう・・・」

「うん、すぐ死んだら解毒剤意味無いわね。」

ミーフェのさめた感じにエリーは眠気から現実に引き戻された。

「そうよ！私王の嫁になるのよ！？こんな所で死んでなるものですか！」

エリーは立ち上がって小屋の中に重ねて置いてあった藁を暖炉の前に敷き、簡単なベッドを作った。

「さっミーフェ！ここで一日過ごしましょ。蝋燭もつたいないから消すわよ」

ミーフェは驚いて藁に飛び込んだ。

「エリーったら、こうと決めればやりぬくタイプよね！」

「ええそうよ。さあ、あなたのマントを掛けて、藁を被せて。お休みなさい」

エリーはミーフェの手元にあつた蠟燭を吹き消した。

ミーフェはエリーにも藁を被せなおした。

「ええ、何だか私も眠くなったわ・・・お休み。エリー・・・」

エリーは、日光のいい香りがする藁に潜り込みながら、王と結婚したら自分はどうなるのだろうかと考えていた。

王妃になるのよね・・・ってことは、私の働き次第で、国も良くなったり悪くなったりするのかしら。

エリーは雨に打たれて今にも割れそうな窓を見つめた。

私、昔はこんな家に住んでいたのよね。お父さんと・・・

変わったなあ、私。

エリーは俯いて途方もない事を考え込んでいたせいか、小屋の外でなにやら足音が聞こえたことに気づかなかつた。

「ゴトン！……キイイイイ……」

小屋のドアのほうから、何か音が聞こえる。

エリーは心底ビビった。

『な、なに!?!』

心の中では恐怖と不安で自制心を抑えきれない。

『ミ、ミーフエ……!』

咄嗟にミーフエのほうを見るが、ミーフエは疲れのせいか気持ちよさそうに眠っている。

その間にも足音はどんどん近づいていき、次第にエリーたちが寝て

いるほうへと歩み寄ってきた。

エリーは金縛りにあったように動けなくなり、大きくなる足音に怯えながら乾いた口を開いた。

そして、とうとう目の前にまでやってきた人影に向かってエリーはあらん限りの音量で叫んだ。

「ぎゃあああああああ!!!!!!」

花と騎士と王と & i t : 上 & g t ; (後書き)

別にホラーではありませんが、この雰囲気はホラーっぽいです。

「きゃあああああ！いやあああああ！」

エリーは声の出る限り叫んだ。

ミーフェは飛び上がり、まだ重い瞼を擦りながら何事かと辺りを見回した。

「ひ、姫・・・？」

エリーの叫びが木霊する中、一人の優しい声が響いた。

エリーは震えながらもハツとして、目を開いた。

「うそ、なんで・・・なんであなたが居るの・・・？」

エリーは呟いた。

ミーフェは呆れて頭を抱えた。

エリーの目の前には、何とあるうことが王が不安げに突っ立っていたのだ。

「姫、もしかして、驚かせてしまいましたか!？」

「あ………あの………ごめんなさい!！」

エリーは王の姿をまともに見ることができず、そのまま跪いた。

「ああ、私何てことを!もういつその事死んでしまいたいわ!」

エリーは心の中だけで叫ぶことが出来ず、思い切り声に出して嘆いた。

ミーフェはその様子を見、だんだん込み上げてくる笑いを押し込めようとした。

「……ぶっ……ぷー……あははっはは!あはは!あははははは!」

が、出来なかった……。ミーフェはエリーにむかってお腹が痛くなるほど笑いこけた。

エリーはその笑い声で正気を取り戻した。

「って、そうよ、どうして王様がここに居るの?もしかして……」

てお城!？」

王はエリーに駆け寄りながら答えた。

「いや・・・ここは、いわゆる・・・私の隠れ家的なものです。今は定期的にここに来ていて・・・今日は勉強に飽き飽きしたからここに来たのですが、途中から雨が降り出して・・・」

そういえば王もびしょ濡れだった。

「あ・・・そうだったんですか。御免なさい王様。私ったら何を・・・あ、じゃあこの飲み物なにか知ってます?」

エリーは急に普通の口調に戻ってあのビンを掲げて王に訪ねた。この態度は王に対してどうなのか。

王も王で何か納得し、うんと頷いた。

「それは勿忘草の朝露を絞って凝縮させた高級飲料です。確か私がここに持ち込んだのです。」

「へえ・・・高級飲料・・・私今まで飲んだこと無かった。」

エリーはビンを不思議そうに覗き込んだ。ミーフェはビンのコルク栓を開け、一口その飲み物を口に含んだ。

「あららら、意外といけるねコレ!美味しいよエリー、飲んでみなーよ」

エリーはミーフエに習って飲んだ。

「なんか、これ逢みたいな風味があって、飲みやすいわ。さすが勿忘草！」

「そうでしょうか？・・・それで、姫と騎士殿は何故ここに？」

エリーは丁寧に今までの経緯を説明した。

「そうですか・・・ではどちらも雨宿りなのですね。」

王はふつくらと微笑んだ。エリーは顔を赤くした。

「はい・・・私、ここがあなたの隠れ家とは知らなくて、あの・・・雨が上がるまでここに居てもいいですか？」

「ああ、勿論ですよ。・・・それで、あの・・・」

王は何故か急にたじろいだ。

「どうか、しました??」

「・・・その、あなたは、王妃に、なるのですか・・・?」

エリーは王の急な問いに驚いた。もう王に知れ渡っているとは。

「えー・・・ええ！そう。私、あなたにお嫁入りします。えっと、

宜しく……」

二人はぎこちなく握手した。ミーフェはまた笑いこけた。

「どうしてあなたは、王になったの？私のお父様の方が年上だけど
？」

エリーは暖炉に薪を投げ入れる王を覗き込んで聞いた。前から気になっ
ていたのだ。

ふつう王家は年が上の者から順に王になると聞いていた。

「ああ、それはあなたのお父さんが王になるのを強く拒んだからで
すよ。兄さんは、駆け落ちしたんです。」

エリーは何かの聞き間違いかと思った。

「駆け落ち！？お父様が？」

「はい、そうですよ。駆け落ちです、今のあなたのお母様とね。」

王は頷きながら話し出した。

「当時お母様は下級貴族のお嬢さんで、兄さんとは、社会的に……つりあわなかったんですね。でもお兄さんは夫人のことが大好きだったから、勝手に今の屋敷を建ててそこに住んだんです。」

「へー、凄いのね、お父様達……！」

「ええ。私がそれを知ったとき、本当に笑いましたよ。」

王はエリーに、紙に包まれた何かを差し出していった。

「これ、魚を蒸し焼きしたものです。どうぞ、お腹空いたでしょう？」

エリーは二つ受け取り、一つをまた眠り込んだミーフェの頭に置いた。ミーフェはぐっすり眠り込んでいて、二人で笑っていても起きなかった。

魚は、潮のいい香りがしてとても美味しかった。エリーは二つおかわりした。

その後もいろいろと話し込み、気がついた時にはもう三時間が経っていた。

「大分時間が経ちましたね……一旦朝まで寝ますか？」

王は瞼を擦っていたエリーに声をかけた。エリーは返事をして藁の寝床に潜り込んだ。

「王様も寝ますよね？」とあいてますよ……。では、おやすみなさい……。」

エリーは半分寝ぼけて、王が棚から引っ張り出してきたシーツに体を包ませた。

「おやすみなさい、姫。よい夢を……。」

王はそう言いながらも、自分もシーツをかぶった。

二人の気持ちは空で繋がり

「エリー、起きて！ああ、大丈夫かしらこの子！ねえ、エリー！目を開けて！」

誰かの慌てる声を聞いたエリーは、夢の中から素早く現実に戻った。

「う・・・お母様・・・？ここは」

「エリー！まあ、あなた見て！この子ったら！」

母はエリーを抱き起こした。夫人はラベンダーのいい香りがした。

エリーは暫く目をパチパチさせて、頭を叩き起こし、すぐに夫人とその後ろでオロオロしている父を見て謝った。

「ご、御免なさい！！私ミーフェと一緒に果樹園を散歩してたんだけど、急に雨が降ってきて急いでここに駆け込んで・・・！ってあー！！王様は！？王様はどこ！？」

「王様？ヨーアンならさつき私達のもとに来てエリーとミーフェの場所を教えてくださいよ。もしかして、会ったのかい？」

公爵はエリーに訪ねた。

エリーは、少し顔を赤らめて頷いた。

「うん。ここってね、王様の隠れ家なんだって。だから、私達がここに駆け込んだら、王様がやってきて、助けてくれたのよ」

「何だつて!？ここがヨーアンの隠れ家!？こんな所で過ごさせるのか・・・!」

公爵は感心したように小屋を眺めた。

「で、エリー大丈夫!？」

夫人がエリーの体を叩きながら尋ねた。

エリーは自分の顔をペタペタと触って確かめた。

「うん、私は平気。そういえばミーフェは？」

「ここにいるわ。さっき起きてあのお魚食べてたんだけど、あれもまた美味しくって!」

ミーフェはエリーの元にやってきてちよこんと座った。

「うん、あれ凄く美味しかったわよね。」

エリーはミーフェに請合った。

「じゃあ、そろそろ屋敷に帰るか？バスルームで熱い湯に浸かっ

たらどうだろうっ?」

公爵は寒そうに肩を震わせてエリーとミーフェに提案した。二人は素直に頷いた。

「ぶっちゃけエリーは王様のこと、好きなの?」

ミーフェはそう言いながらバスローブを着て、エリーの部屋の大きなベッドに横たわった。

「え!?!ミーフェ、あなた本当にぶっちゃけね・・・」

エリーは侍女に出してもらったミントティーを危うく吐き出しそうになった。部屋を出ようとしていた侍女も立ち止まって、ぐるりと回ってエリーのほうに戻ってきた。

「お嬢様、誠に申し訳ありません。茶菓子を、出し忘れていたもので。」

これが言い訳だ。エリーはその侍女と親しかったので、辛うじて「分かったわ、すぐに取ってきてね、セト。」とだけ言った。

侍女はお辞儀をすると、すぐさま部屋を出て急いで茶菓子を取りに言った。

きつと心の中では早く話が聞きたくて仕方が無いに違いない。

エリーはため息をついた。

「・・・自分でも、よく分からないの。そりゃあ結婚すれば、相手のことがだんだん見えてきて、好きか嫌いかわハッキリするんだろうけど、今はまだあんまり親しくもないしね。」

「そっか、エリーは・・・」

ミーフェは侍女が戻ってきたのを見計らって叫んだ。

「いつかは王様を好きになるってことね!」

「うぎゃあああ!何でそうなるのよ!?嫌いになるかもしれないじゃない!」

エリーは顔を真っ赤にして叫んだが、ミーフェと侍女が横目でニヤ

リと笑っているのを見ると、これは諦めるしかない……と思わずにるをえなかったのだった。

侍女が持ってきたスコーンを一つ摘み上げてベッドで食べ始めたミーフェは、エリーが立ち上がって窓際に行き、窓の外を見つめる姿に思わず動かしていた手を止めた。

エリーは宝石のように輝く花畑を見つめ、一人呟いた。

「……好きも嫌いも、どちらも同じなのね……」

「？」

遠くで聞き耳を立てていた侍女とミーフェは顔を見合わせて、首をかしげた。

「エリー？どしたの？」

ミーフェが声をかけてみる。

エリーはその声に驚いて振り返った。

や、やば・・・私人前で独り言、言っちゃった・・・！

「ななな、なんでもない！！私！きつと！きつと・・・空耳よ！
ねえセト！？」

「え・・・あの、そのー、私はてっきりエリーお嬢様の声かと？」

「うわー！違うわよ。絶対違うから！！あら、あと三分で午後の授業始まるわ！勉強道具は何処かしら？ミーフェ、行くわよ。セト、明日社交パーティーだからドレス選んどいて！」

エリーは一方的に会話を終わらせて、片手に勉強道具、もう一方でミーフェを引きずって、走り去った。

侍女は暫く黙り込んだ後、クスクス笑い出しながら茶器を片付け始めた。

「ヨーアン王、いつもいつも城を抜け出されては困ります！王としての自覚をもっとお持ちください！」

王の側近・ネフルアードは、王のムスツとした顔を睨みつけて説教した。

「しかし、私は仕事もきちんとしてるだろう？なのに何故怒られなければならん!？」

王も負けじと反論する。まあ実はそうなのだ。

「じゃあ何故決まってパーティーや宴のときに抜け出すのです？」

ネフルアードはきつく問いただす。

「それは私が行きたくないからだ!どうだ、一番筋が通ってるだろう?」

ヨーアンはキラーンと自信ありげに側近を見下ろした。ヨーアンは背が高かった。

そしてその言葉で側近はあきれ果てて、もう宜しいとばかりに肩をすくめた。

「あなたは未来の王妃様と顔を合わせたのでしょうか?ならば」

側近は王の書齋にドンと書類の山を積み上げて、くるりと背を向けた。

「少しは人と顔を合わせてくださいね。あなたは、とてもいい王様

なので。だから。じゃ、その書類よろしく御願いますよ」

それだけを一気に言いえると、ネルフアードは王の仕事部屋を後にした。

ヨーンはそろそろ夕暮れ時になる、薄い茜色をした空を見た。

なんだか、姫はいい人だったな・・・面白かったし。

「・・・人、か。そういわれたって、どうすればいいの・・・」

ヨーンは、大きな欠伸をして、いつもより早く夕食の準備を言いつけた。

二人の気持ちは空で繋がり（後書き）

少し今までのことを振り返って見ようと思ひ、前の話を読んでいたら今回の話はなんだか調整みたいな感じになってしまいました・・・。

新たなる花の運命

それからの毎日は、飛ぶように過ぎ去っていった。

エリーは夫人からこれまでに習ってきたことを確かめるテストを満点でパスした。夫人は、これ以上の出来は無いと言ってくれた。

そしてエリーは、社交パーティーで王との婚約を、発表した。

「なんか、あつという間だったわよね、エリーがここに来てから
ミーフェはエリーの後姿を見つめながら、懐かしむように呟いた。

エリーは小さな箱にお気に入りのネックレスや宝石を仕舞いこみ、トランクにはいつも使っているハンカチや、羽ペンと世界地図などを詰め、最後の荷造りを終えようとしていた。

最初は侍女がトランクを持ち出してきたのだが、エリーはそれを見て自分でやりたいと申し出てきたのだ。

エリーは箱の留め金をパチンと閉め、トランクに最後の荷物を詰め終えたとき、ふと手を止めて、上を見た。

「・・・もう、ここには、居られないんだよね。なんか、実感が沸かないんだ・・・今日で、ここを去るなんて」

ミーフェは深呼吸をして、頷いた。

「・・・うん。」

二人は、しばらくじっとエリーの部屋を見つめていたが、突然エリーが言い出した。

「私、庭園に行つてこようかな。木陰で、今までのこと、振り返つて見るの。」

ミーフェは笑って立ち上がった。

「あなたらしいじゃない。行きましょつ、さあ、ほら！」

エリーとミーフェは手をつないで、最後の庭園に向かった。

「あなた、悲しい？」

大きなテラスで、手すりに寄り添っていた夫人が、その隣で風に髪を靡かせている公爵に聞いた。

「……娘を嫁に出すときがくるなんて、思いもしなかったんだよ。それが、こんなにも早くに訪れたんだから、もう何が何だかさッパリだ。」

公爵は、微笑みながら、丁度見える庭園にエリーたちがやって来たことを認めた。

「そうね。私も、驚きと不安を隠せない……。でもね、これだけは言える。言うことができる。」

夫人は、遠くで木陰に向かうエリーを見て、そして雲ひとつない天を見た。

「エリーは、きっと国一番の花となるわ。あの子なら、王と協力し
ヴィアナ王国を最良の道へ導いてくれるに違いないでしょう。」

公爵も天に顔を向けた。

「そうだな。ヨーアンとエリーならば、きっと。」

エリーとミーフェは時間まで様々なことを語り合った。

エリーとミーフェが最初に出会ったときのこと。

夫人の最初の授業。

公爵の軽蔑事件。

乗馬の楽しさ。

王との出会い。

話題は、尽きることが無かった。

やがて、数人の侍女が、あの箱とトランクを持ってやって来た。

「エリーお嬢様、残りのお荷物は此方こなたで宜しいでしょうか？」

「うん、ありがとうセト。あなたにはお世話になったわ。他の皆も、ありがとう。」

エリーは立ち上がってお辞儀をした。

侍女達はとんでもないとばかりに手を振った。

「私、エリーお嬢様といられてとても楽しかったです、こちらこそありがとうと言わせていただきます！」

「私です！お嬢様が乗馬をしているときの姿はとってもお綺麗でした！！！」

「お嬢様はとても勤勉でお淑やかで、社交パーティーではいつも花形でしたもの！」

「私、お嬢様の傍に居られたことを、とても誇りに思っております！」

「私も！」

侍女たちは競うように叫んだ。

エリーは、瞳をうるうるさせて、侍女達に駆け寄った。

「ありがとう、みんな・・・私のこと、忘れないでね・・・！」

侍女たちは涙を拭った。

「はい、絶対に忘れません・・・ではお嬢様、お時間です。参りましょう」

エリーは侍女達に囲まれながら、大広間に移った。

「エリー」

夫人の声がしたので振り返って見ると、窓際に公爵と、公爵夫人の姿があった。

「お父様、お母様。お待たせしました。私の準備は終わりました」

「そうですか、ではもう出発しましょう。」

夫人はそういうと、侍女に帽子とローブを持ってこさせて、エリーにゆっくり着せた。

「もう春はすぐそこといえど、まだ肌寒いですから、ちゃんと着ておかないとね。では、行きましょう」

エリーは、涙を押し隠して、笑った。

「・・・はい。」

グルニエール邸の大きな正面扉が開かれると、外には護衛のため馬に乗った騎兵隊や、王宮に移動するまでの世話係の侍女が乗るための小さな馬車、そしてエリーとミーフェ、公爵、公爵夫人とお付の侍女セトが乗り込む大型の高級馬車が、白馬の馬と共に待機していた。

「すごく大きな馬車・・・これに乗っていくんだわ。」

エリーは感嘆しながら、屋敷に残る侍女や護衛兵、執事に別れを告げて、馬車に乗り込んだ。

エリーはセトが入れたハーブティーを飲みながら、窓の外に映る景色を見た。

遠くに、緑に囲まれた王城が見える。

私、もう公爵令嬢じゃなくなるんだ・・・

エリーは、不思議な気持ちで、その風景を眺めていた。

その時、騎兵隊の叫ぶ声を聞いた。

「何者だ！」

「バリン！！！」

騎兵隊のその声と、エリーの横の窓が割れたのが同時だった。

自分の左腕に深く矢が刺さっていることが分かったときには、もうエリーは倒れこんでいた。

頭の意識が朦朧とする中、エリーはガラスの破片の向こうに、馬に乗った黒い人影を見たような気がした。

ミーフェが馬車から飛び降りて、その黒い影に向かっていくところを最後に、エリーは瞼を閉じた。

新たなる花の運命（後書き）

いきなり倒れました。

もしや、ネタ切れ！？もうネタがないの自分！！

傷ついた誓は雫を振り切る

「どうして、こんなことに・・・もし、リリアンのようになってしまっていたらと思うと・・・」

夫人が遠くで頭を抱えて嘆いているのが見える。

公爵は黙って夫人の手を握った。

エリーは、ゆっくり瞬きをした。

私、矢を射られたのね・・・

ここは天国じゃないし、きっと私は生きてる・・・良かった・・・。

エリーは、じんじんと響くように痛む左腕を見た。

腕は包帯でぐるぐる巻きにされていたけれど、ところどころ血のような模様が見えた。

その痛々しい傷を見ていると痛みが増しそうだと思えたので、目を背け、今度は自分が寝ているこの部屋を見渡して見た。

部屋は白を基調とした明るい部屋で、ところどころに花瓶に生けた花が飾ってあった。

部屋の大きさはエリーの部屋を半分にしたくらいの大ささで、部屋は円形に造られていた。

円形の部屋？

ここって・・・何処なの？

エリーは窓の外に目を向けた。

しかし、ベッドから見上げているということもあってか、空しか見えない。

ここ、高いところなのかな・・・

エリーがよいしょと、重い腰を持ち上げて起き上がった瞬間、夫人が駆け寄ってきた。

「エリー！！ああ、目が覚めたのね？よかったわ……！」

夫人は駆け寄ってエリーを抱きしめた。

すぐ後から公爵も駆け寄って、エリーに安堵の笑いを向けた。

「エリー、大丈夫か？腕は痛むかい？」

エリーは頷いた。

「少しだけ、痛いわ。それで……」

公爵はエリーの言おうとした言葉を引き継いだ。

「エリー、君はカルビナ帝国のスパイに矢を射られたんだ。ミーフェがエリーが倒れたのを見たとき、すぐさま走って捕まえてくれた……いつものミーフェとは違ってとても怒っていたよ」

「そうだったの……ミーフェが捕まえてくれたのね。よかったわ。怪我はしてない？」

エリーはミーフェの姿を探した。

夫人が答えた。

「あの時いた護衛兵の中で、ミーフェより強いものはいないでしょう。ミーフェは怪我をするまもなく捕まえたのよ。もうすぐここに来るはずよ」

エリーは、ほっと胸を撫で下ろした。

「それでここは？」

「ここは王宮の中、ラントランス塔だ。王宮で一番高い塔だよ。」

「そうだったんだ・・・ここはもう王宮なんだ・・・」

こんな形で王宮に着いてしまった・・・なんというか、不思議な感じがする。

ここは塔だったのか・・・だから円形なのかな。

・・・あの時矢を放ったのはカルビナ帝国のスパイ。

カルビナ帝国って確かヴィアナ王国とはメテンス国をはさんだ所にある大帝国よね・・・もともと戦争を好む国なんだからお母様が教えてくれた。

じゃあ、ヴィアナにスパイを送り込んだということは、もしかして戦争を・・・？

エリーがうとうと考えていると、夫人が心配して、薬湯を持ってきた。

「エリー、これ飲んでおきなさい。」

エリーはそれを見たとき、急に喉が渴いた。いや、気づいていなかっただけかもしれない。

「ありがとう、お母様。心配かけてごめんね。」

夫人は、何かエリーの世話をしていないと気がおさまらないようで、今度は麦のパンと薄味のスープを盆にのせてやって来た。

「ちよつとでも何か食べておかないと……さあ、食べれる?」

「うん。ねえお母様……」

エリーは盆をベッドの隣の小さいテーブルに置いてパンを齧ると、夫人に聞いた。

「なあに?」

「結婚式は、いつなの?」

エリーの率直は問いに夫人は考え込んだ。

「予定だと二週間後なのだけれど、エリーの腕がそれまでに治るかどうかは分からないから、まだ決まってるわい。

でもきつと、ヨーアンはエリーのことを考えて、少し遅らせるわね。」

「そう……遅れるんだ。私のせい……」

エリーは俯いて答えた。

自分が、あのときスパイの矢を避けれたら・・・ちょっとは変わったのかな。

でも、矢なんて避けたことないもの・・・

どうすれば、良かったの？

「私の・・・せ・・・で・・・王様に・・・迷惑、かけて・・・」

エリーはそのまま蹲って、泣いた。

自分は、なんの力もないのか。

自分ひとり、守る力さえも。

そう思うと、涙が堪えきれずに、頬を伝った。

「う……ごめんなさい……たしの、せいで……!」

私のせいだ。

私が、もっとしっかりしていれば、こんなこと起きなかったのに。

ミーフェにもお母様にも王様にもお父様にも心配されずに、すんだのに。

ミーフェだって怒らなくて。

結婚式だって……遅れなくてすむのに……。

私、ミーフェに顔向けできないよ……

「……エリー、自分を責めては駄目。悪いのは、あなたではなくカルビナ帝国のスパイよ、そうでしょう? あなたは今、休養をとっ

て怪我を治すことを一番に考えて。」

エリーの泣き声を耳に聞き入れた夫人は、エリーの艶やかな髪を撫でながら優しく言ってくれた。

公爵も夫人の向かい側に座ってエリーに笑いかけた。

「エリーは本当に優しい。だからときに、皆に迷惑や心配をされて
いないか不安になってしまうことがあるんだ。」

だから、せめて怪我を治す間だけでも、皆に甘えてみてごらん。
気が楽になるからね。」

エリーは二人を交互に見て、笑いながら泣いた。

「ふふ……あ、ありがとう、お母様、お父様……。」

エリーは涙を拭って、急に盆からまたパンとスープをとって食べ始めた。

スープとパンは、まだほんのり温かくて、美味しかった。

暫くして、夫人と公爵は騎士長との用事でエリーの元を離れた。

「ミーフェ、まだかな・・・」

エリーは食後の薬湯を口に含ませながら呟いた。

すると、エリーの寝ている部屋のドアがゆっくり開き、ひとり人が入室してきた。

エリーは顔を輝かせてその方を見た。

「ミーフェ、待ちくたび・・・」

途中で、ミーフェではないことに気づいて、声が止まった。

入り口に花束を持って立っていたのは、エリーの専属騎士ではなく、王だった。

傷ついた書は筆を振り切る（後書き）

今回の話は、ハリー・ポッターのヘドウィグのテーマを思い出しながら書きました。

あ、でも話とはあんまり関係してないかも・・・。

幸せに潜む影

お、王様！！

エリーは心の中で叫んだ。

エリーは痛む腕を出来る限り動かし、王に敬礼の姿勢をとろうとした。

「そのまま結構ですよ。只でさえ貴女は怪我をしているというのに」

王はそういいながらエリーのベッドの隣の椅子に腰掛けた。

「申し訳ありません国王陛下。お茶の用意もろくに出来ず・・・」

エリーはせめてもと王に頭を下げた。

すると、意外な答えが返ってきた。

「いえ、私が迎えに行けばよかったです。しかし貴女が来るまでの急用が入ってしまい、行くことができなかったのです。どうか、許してください」

王も頭を下げて、なんと謝ったのだ。

「え！？なんで貴方が謝るのですか？悪いのは私と、矢を放ったスパイです。どうか心配なさららないで。」

エリーはあわてて言った。

王は顔を上げたものの、浮かない様子でエリーに話した。

「実は・・・その、結婚式は、延期できないんです。」

結婚式に招こうとしていた客人にもう招待状を出してしまい、今更変えることはこの国の信頼を失うことになるに値すると大臣に言われたのです。」

「まあ、なら結婚式を延期しないでやりましょう。私、それまでにはなんとかしますから。」

王が打ち明けてくれたおかげでなぜか気が軽くなったエリーは、笑いながらそう言った。

「なぜだか分からないけれど私、あなたに打ち明けてもらえて気が楽になりましたし、別に骨折したわけじゃありませんから、早く治りますよきつと。」

エリーの自信に満ちた声ですこし笑った王に、エリーはそつと囁いた。

「あの、国王陛下、御願いがあのです・・・」

「なんですか？どうぞ、遠慮なく申してください！」

エリーは、少し赤くなって微笑みながら、王の耳元に何かを囁いた。

「そ、それでいいのですか？」

「はい・・・あの、天気がよければ。子供の頃からの夢で・・・いいでしょうか？」

頬を赤く染めて恥ずかしそうに笑うエリーに、王はエリーの手をとって答えた。

「いいですよ、それが貴女の、最初の望みとあらば」

それから王とエリーは三時間近く結婚式の詳細について話し続け、ようやくエリーにも結婚式に実感が湧いてきた。

「ありがとう、国王陛下。私、だんだん結婚式が楽しみになってま

いりましたわ。」

エリーは、もう薄暗くなってきた空に気づいて御礼を言った。

王はエリーの手にキスをすると、椅子から立ち上がって微笑んだ。

「いつまでも国王陛下ではいけませんよ。ヨーアンとお呼びください。では、またいつか。」

「また今度お会いしましょう、さようなら……ヨーアン……」

エリーは王の名前を呼ぶ寸前、少しだけ頬を染めながら別れを告げた。

その日の夜、やっとミーフェがエリーの元へやって来た。

「ごめんねエリー！私お見舞い行こうと思ったんだけど、なんか護衛軍の指導活動かなんかにあたっちゃってさ。午後までかかったのよね」

ミーフェはそうついや否やエリーのベッドの向かいのソファにドサッと倒れこんだ。

「ミーフェお疲れ。体は大丈夫？」

エリーは久しぶりにミーフェに会えて、嬉しさでいっぱいだった。

「まあまあね。それよりも心配すべきはあなたでしょ。体はどう？」

「うん、今のところは痛むだけ。大丈夫よ」

「そっか、よかったわ」

それからミーフェはエリーにこの王宮の護衛システムについて語りだした。

この王宮には何百の護衛騎士がいるが、そのなかで本当に「護衛」出来る者は少ないということで、自分が派遣されて、殆どの護衛騎士をしごいた事。

そして、王宮にエリーが来るということで、護衛のシステムを改善し、王族を守るように最大限の手を尽くす護衛のみを残し、厳しい訓練を行ったことなどだ。

「大変ね、騎士って。でも凄いなと思うわ。」

エリーは感嘆してミーフェを見つめた。

ミーフェは自信満々に笑った。

「凄いでしょう。まあ、こんなことできんの私ぐらいよねえ」

「うんうん。ミーフェは凄いわ。流石わたしの専属騎士よね！」

エリーが頷いた。

一方ミーフェは専属騎士と聞いて、俯いた。

「それ・・・なんだけど・・・」

「どうしたの？ミーフェ」

エリーは侍女に入れてもらった紅茶を飲みながら、マカロンを口に放り込んで尋ねた。

「私って、エリーの専属騎士として、残れるのかなって、考えてたんだよね。」

ミーフェの思いつめた表情を見た瞬間、エリーは笑い出した。

「あはははは！うふふ・・・ミーフェったらもつ。私が王様に頼んであげるわよ、勿論！だってミーフェは、私の最初の親友なのよ？
何とかしてでも、私と一緒に居てもらおうわ」

エリーはお腹を押さえて、それでもまだ笑い続けていた。

でも、エリーとミーフェの絆はとても深いものだ。二人は知っていて、その上でこんな会話をするのだ。

ミーフェは、微笑を浮かべた。

「……そうだよ。ありがとう、エリー」

エリーは、思い出し笑いを止めて、微笑んだ。

二人の絆はどんなことでも崩れないと知っていたから、自信をもって、「一緒に居る」という言葉が言えた。

それは、ミーフェも、言いたかった。

でも……

もう、一緒には居られないかもしれない。

特に、エリーの傍には。

エリーの部屋の下の階の部屋で蹲ったミーフェは、そっと泣いた。

幸せに潜む影（後書き）

やっこのことで二十話突入！本当に嬉しいです・・・。

しかし、今はなんともいい難き状況です。

エリーと王は結婚話で盛り上がってますが、

作者の私が注目してるのは、ミーフェと、スパイ（まだあまり触れてませんが）です。

皆様にもその点を注目して読んでいただけると、分かりやすいと思います。

なるべく皆様に読みやすいように書いていきますが、なにか読みにくい所や、誤字・脱字などありましたら、お知らせください。

今後も、ヴィアナの花をよろしく御願います！

過去のロケットペンダント

エリーが目覚めた次の日の朝。

ミーフェは、王城の端に位置する牢獄で、エリーに矢を放ったスパイを睨みつけていた。

スパイは二人組みで、二人とも黒いマントに、黒い羽根付き帽子、そして何かの紋章が描かれたモニユメントを着けていた。

ミーフェは、その紋章を知っていた。

だからこそ、このスパイがカルピナ帝国だとすぐに分かったのだ。

「……………この者たちの処理を、私に任せてはもらえませんか

？」

牢獄の責任者にそう話したミーフェは、その後、【牢獄投獄者処理
任務責任委任許可証】の封筒を握り締めて、再び牢獄へ向かった。

スパイを、確かめるために。

あの人かどうかを、確かめるために。

「やっぱり、あなただったのね……」

ミーフェは、潤みそうになる目に力を入れて、投獄されて弱りきつ
たあの二人組みに呟いた。

「ミ、ミーフェ……か？何故ここに居るんだ？早く、助けてくれ・

・・・」

「あなたを投獄したのはこの私よ!!!」

ミーフェは叫んだ。

その途端今までミーフェに喋りかけていた一人の中年の黒い男スパイが怯んだ。

「でも……………」

その中年の男は、怯えながらも叫んだ。

「私達は、家族だったじゃないか!!!」

ミーフェは、もう涙を堪えられなかった。

ゆっくり瞬きをしても、泪は頬を伝い、首を勢いよく振って、涙を振り切らねばならなかった。

「それは・・・それは、もう昔の話よ。それに、裏切ったのはあなた達のほうじゃない！」

ミーフェはそう叫んでその男ともう一人が容れられている牢獄に飛び込んで、二人の黒いマントを掴み破いた。

マントを破られた二人から、そのやせ細った顔が現れた。

さつきから喋っていた男は白髪交じりの茶髪で、あらゆる方向に伸びた髭が、年をとるごとに刻まれていく皺を覆い隠しているようだった。

もう一人は、ミーフェとそっくりの髪を靡かしている女で、継ぎはぎだらけの村民服に身を包んでいた。

ミーフェは、暫く黙り込んでいた女を見た。

「・・・お母さん、なんでお父さんについて行ったりしたの？わ、私と一緒に・・・私と一緒に家出すれば良かったのに！」

母と呼ばれた女は、お母さんという言葉に一瞬眉をひそめた。

そしてミーフェの母は、服のポケットからロケットペンダントを取り出して、ミーフェに投げた。

「……………もう、家庭を壊したくなかった。だけど、あんたは出て行ったんだ。もうあんたは家族じゃないよ……………」

「じゃあ、これは何だったのよ!？」

ミーフェは投げられたロケットを思い切り叩きつけた。

「それに……………サラのメッセージが入ってる。読みな。」

母の素っ気無い対応にいらいらしながらも、ミーフェはロケットを取り上げた。

『ミーフェ

私は、毎日が暗く、希望が見えません。

ミーフェが居てくれないと、とても心が締め付けられます。

あなたのような人は、他にまわりに居ないんですもの。

だから……………此処に来て。私の元で、私を守って欲しいのよ。

あなたが来なければ、私自らが、ヴィアナ王国に攻め込んでまで、あなたを取り戻すわよ。

信じてるから、きつと来てくれるって。ミーフェなら……………

サラ・ア

リエンテイル・カリオナ・デイビス』

「サラ・・・・・・・・」

サラ。それは・・・

かつての・・・・・・・・公爵に勤める前に出会った、生まれてはじめての主人の名。

「あなたは、過去から逃げるのか？」

まあ、あたしがあれこれ言えやしないけどね」

母は、きつきつきと奇怪に笑いながら、夫を見た。

「お前はどんなんだい。何とか言ってみな」

妻の言葉に、ミーフェの父はため息をついた。

「わからんよ。まあ、いずれは過去のことも今の主人は知る羽目になる。」

「今から伝えておくのもよし、後から王妃直々に知ってしまうのもよしだ。」

「……………」

エリーは、いずれ知ってしまう。

ならば、自ら切り開いてみせよう。

運命の扉を。

ミーフェは、動きやすく作られた専属騎士の服裾を翻し、牢獄に鍵をかけてあつという間に走り抜けていった。

その足は、王のいる、執務室へと向かっていた。

涙の後ほど強くなる心

「さて、王様。私が言いたいこと、分かりましたね？」

王に事情を説明したミーフェは、物分りのよい王に確かめた。

「あ、ああ・・・分かったが、それではそなたは・・・」

王は心配そうにミーフェを見た。

「・・・そうよ、さすが王ね。私は・・・」

エリーの専属騎士を辞めて、決着をつけて来ます。サラは、昔の主人でしたし・・・一応行っとかないと。

その間エリーには相応しい騎士を数人集めておきますんで、いいですか？」

ミーフェの言葉の中には、悲しみと責任感に満ちていた。

「分かった・・・それでは、早めに決着をつけて来るように。」

王はそれだけ言って、ミーフェの瞳を見つめ、ミーフェの決心を再度確かめた。

ミーフェは少しだけ笑って、さっさと歩いて王の執務室を出て行った。

「では行ってきました。エリーの元にする騎士団は今日中に到着しますから、ご心配なく」

ミーフェは最後にグルニエール公爵と公爵夫人に挨拶に来た。

公爵と夫人は納得が出来なかった。

「でも、サラって……あの人でしょう!? 止めときなさいミーフェ!」

「エリーはミーフェを守ってもらうんだ! 駄目だ!」

「……いいんです。エリーは、何が何でも死にません。だから私も、安心して行けるんです。」

「いつか必ず戻ってきますから……。では」

ミーフェはそれだけ言うと、二人の反対を押し切り走って部屋を飛び出した。

「あの子……どうしましょう! エリーが心配するに決まってるわ!」

「ああ。だが……これでいいのかもしれない」

公爵の言葉に夫人は驚いた。

「なんですって?」

「ミーフェは、過去の後悔と悲しみに決着をつけにいったんだ。私達は、見守ってあげることが一番いいと思う。」

公爵の言葉は、どこか安心できるものがあつた。

夫人は、王城の門を潜り抜けていくミーフェの小さな人影を見つめた。

ミーフェは、最後までエリーと会おうとしなかった。

「サラ・・・待ってなさい。私があなのもとに行つたこと、後悔させてやるわ!」

ミーフェは意気込んで叫んだ。

木々が生い茂り、草花がそよ風に揺れる、広い中庭に、人影が見えた。

「爺や、ミーフェは来るかしら?」

上質なベンチに座る一人の女性が、白髪の腰が曲がった赤い目の老

人に話しかけた。

爺は顎に手をあてた。

「どうでしょうな。あの方は約束は守るが・・・この度は来るかはまだはつきりとはしないでしょう。」

「そうよね・・・どうしましょう。やっぱり今の主に矢を放ったのはいけなかったのかしら」

「いや・・・あの方とはいずれ争うことになります。これでよかったのです。もしミーフェ殿が来なければ、こちらから攻めればよいのですから」

日光のまぶしさで額に手をあてていた女性は口を開かず、目を伏せた。

「そうよね、私とエリーさんは、決して仲良くはならないんだわ。きつとね・・・」

「だって私は、カルビナ帝国第四十七代女王なんですもの・・・きつと私の血筋は、ヴィアナ王国との争いを好むわ」

そのとき、遠くから侍女と護衛がやって来た。

「女王様！ある少女が、あなたに会いたいと・・・！！」

「護衛を振り切って、走ってやってきて」

「・・・やってきたのね、ミーフェ」

サラは口をぎゅっと結んで、立ち上がった。

向こうから、多くの護衛を押し切って走ってくる一人の少女が見える。

サラは微笑んで出迎えた。

「お久しぶり・・・御機嫌よう、ミーフェ。待っていたわ。」

跪いたミーフェに、女王サラは声をかけた。

しかし、顔が見えないのでミーフェの表情は読み取れなかった。

「・・・カルピナ帝国女王・サラ・アリエンテイル・カリ
オナ・デイベス殿。

お約束と聞き、参りました。」

ミーフェは冷静な声音で言った。

サラは笑った。

「そう堅苦しい言葉で話しかけないで、ミーフェ。まずは、歓迎しなくては何。爺や、部屋に案内して頂戴」

「畏まりました。」

爺やの言葉で護衛兵は女王とミーフェを囲むようにして進み、二人も王城内へと歩き出した。

部屋に案内された二人は、無言でロイヤルソファに腰掛けた。

しかし、サラは微笑を浮かべて。

「さあ、お飲みになって、ミーフェ。私の好きな紅茶なの。わざわざ遠くの国から取り寄せてるのよ。」

女王の言葉に従わないわけにはいかず、ミーフェは琥珀色の温かい飲み物が入った王室色のロイヤルカップを手に取った。

「美味しゅうございます、女王陛下。」

ミーフェは冷淡な声で棒読みした。

一方サラは気を害した様子も無く、美味しそうに自分も紅茶を飲んだ。

それから、茶菓子のベリータルトを食べてから少し落ち着くと、女王サラの方から切り出した。

「ミーフェ、今の生活はどうかしら？楽しいの？」

「今までに無いほど楽しいといえるでしょう。」

ミーフェは出来る限りの憎しみをこめて冷たく言い放った。

「・・・そう。それは、良かったわ。それで、考えてくれた？」

「何のことでしょう?」

しらじらしく聞き返したミーフェにサラは当然のように笑った。

「ふふふ、決まってるじゃない!ここに、来るかどうかのことよ。あなたは、ここに来るのよね?」

ミーフェの顔は、まだ無表情だった。でも、顔の筋肉を引き締め続けるのは難しかった。

「私は」

「ミーフェ・・・」

エリーは、塔の最上階から、カルピナ帝国の方角を見つめた。

「エリー様、包帯の巻き直しをさせていただいても宜しいでしょうか?」

医師免許を取得していた公爵家での仲の良かった侍女・セトは、エリーの傍に居るお付役として、また治療の手助けとして、派遣されていた。

セトはエリーが頷いたのを確認すると、扉に鍵をかけ、衝立を置き、しっかりと準備してから作業にかかった。

「腕はまだ痛みますか？」

「少々ね。でも大分良くなったわ。セトのお陰ね。ありがとう」

エリーはセトに礼を述べた。

セトは、微笑むとエリーのに巻いてあった古い包帯をくるくる外して、消毒液を染み込ませたガーゼを軽く腕に当てた。

「エリー様。ミーフェ様はきっと・・・戻っていらっしやいますよ。ミーフェ様は、エリー様のことを本当に慕っていられたのですからね」

セトは、エリーの曇る心のうちを見抜き、優しく、そして心強く言ってくれた。

エリーは、消毒液のジメジメした痛みと、ミーフェのことで顔をゆがませた。

「本当に、そうかな・・・」

ミーフェは、本当に私の大切な人。

それは、間違いない………けれど。

本当に、ミーフェは私のこと好きだったの？

もしかして、まだ昔の主人が忘れられなくて、やっぱり昔の方がいいなんて思って……？

エリーは、空笑いした。

セトに、心配をかけたくなかったのだ。

「あ……あはは！そうよね、セトの言うとおりだわ！私、どうかしてるわよね。もう………」

泣くな。

泣くな、自分。

でも、もうその時には、目から滝のように、どっと涙が溢れたきた。

「ど、どうしたのかしら、私……」

「……お嬢様。それで宜しいのです。王妃になると言えど、感情は表に出し、常に心を開け放つのです。」

セトは強く話した。

「で・・・も、私、いつも泣いてばかり。いったいどうすればいいのよ?」

「・・・泣きたいときは、思い切り泣いて、笑い出したいときは思い切り笑えばよいのです。それが、感情を表に出す、ということなのです。」

エリーの顔に伝う大粒の涙を手ぬぐいで拭いながら、セトは言うてくれた。

それが、エリーの壊れかけた心に、どれだけ染み渡ったことか・・・

エリーはセトに心から感謝した。

「・・・・・・・・。」

「お嬢様、何かお飲みになりますか?」

無口で黙り込んだエリーを見て、セトは茶器を取り出した。

「決めた。私、決めたわ。セト!」

エリーが、腕を庇いながら叫んだ。

セトは、こんなにも早くエリーが立ち直るとは思ってなかったのだから驚いたが、とても喜んだ。

「お嬢様、どうなさるのですか?私もお手伝いしますわ」

「セト……」

エリーが意味深に呟く。

「私、行動派なのよねー！行くわよ、行ってやるわよ、ミーフエの元へー！」

セトは、あまりの行動の早さに、思わず笑い出した。

花の思いは城を超えて

エリーはミーフエの元へ向かうと決めた後、そのための準備を始めた。

まず適等な大きさの飾り布のはぎれや服を作るときに余った布地をセトに持ってこさせ、その時一緒に針と糸を貸してもらった。

「お嬢様、何を縫うのですか？」

セトの興味津々な質問に、エリーは笑って答えた。

「この端切れを縫い合わせて、バッグを作ろうと思うの。ここには私がついていける入れ物が無いし、いかにも手作りのものなら、私が王妃となるものだなんて分からないわ。分からない方が好都合なのよ」

「そうですか。では、このサファイアブルーの布は？」

今度は大きく無造作に広げられた布を指した。

「ああ、それね。それは、頭巾にするの。私の計画だと、どうしても頭巾がいるって思ったのよ。」

セトは興味深く頷きながら、エリーに質問した。

「失礼ながら、どのような計画かお聞きしても宜しいでしょうか？」
エリーは頷いた。この計画を思いついたときからセトには言いつつも
りだったのだ。

エリーが話し出した。

「まず、私はごみ捨て係のおばあさんの姿に変装するの。ほら、
いつも庭のベンチで蹲ってる頭巾をかぶった人よ。」

で、そこから城で出たごみを積んだ馬車を引いて、裏門を出ちゃ
うって訳！そうすると後々必要になる馬も手に入るし、ごみに紛れ
て生活用品や食べ物も積んでおけばいいのよ。どう？この計画！完
璧じゃないかしら？」

「まあ、素敵ですわ！流石お嬢様！ですから頭巾を……」

セトは感嘆した様子で手を合わせて喜んだ。

エリーも笑った。そのせいで針が指に思いつきり刺さっていたのに
も気づかなかった。

そしてエリーは左腕を庇いながらも、まもなく端切れを縫い合わせ
た肩にかけるショルダータイプのバッグを自分で作り上げた。

セトは、時々紅茶を入れてくれたりして、見守っていた。

その後もエリーの手は動き続け、そしてとうとうサファイアブルー
色の頭巾までも完成させたのだった。

ふぶん・・・元下町暮らしの令嬢舐めんなよ！

とエリーは心の中で呟いた。

「やった・・・！出来たわ！！これでミーフェを迎えにいける！！
ミーフェに会えるのね・・・」

エリーの心は、喜びでいっぱいだった。呟きを除いては。

セトも感嘆していた。

「凄いですわお嬢様！！これで少なくとも明日の朝には出発できま
すわね！」

「うん、やったわ！」

そしてエリーは、その出来上がったばかりの二つを丁寧に蓋付きバ
スケットに仕舞いこみ、夕食のサンドウィッチを食べた。

夜が更け月が真上へ上るのを見届けると、エリーとセトは塔の地下
にあった暗闇の貯蔵庫に忍び込み、大きなバスケット五つにありつ
ただけの食べ物を詰め込んだ。

その貯蔵庫は緊急時用のものだったので、誰かに見られる心配も無
く、食べ物がなくなつた事も気づかれないのだ。

最後の食べ物・・・ベーコンの塊や小麦の粉を袋ごと入れた後、二

人はまた最上階に続く階段を上り、あのもう一つのバスケットとまとめてエリーのベッドの下に隠した。

計画の詳細を事細かに決め、最後に明日に着るためのおばあさんよりの服をセトに借り、馬車に積み込む毛布やエリー自身の服、装飾品が容れられた小さな箱などをクローゼットに詰め込んだ。

装飾品とエリーの服は、いずれサラ王と会ったときに必要になるからだと、セトが準備してくれたものだ。

「もう明日には、出発するおつもりですか？」

セトが寝る前のココアをエリーに渡しながら聞いた。

「そうね、できるだけ早い方がいいと思うわ。それに明日はゴミニだしの日。条件も揃ってるのよ。行くなら明日しかないわ。」

エリーはココアを受け取るなりそう答えた。

「そうですね・・・では、お気をつけて。お嬢様がミーフエ様と出会えますよう、私はここで祈っておりますわ。」

セトは優しく言ってくれた。

「ありがとう。じゃあ、お休み、セト・・・」

エリーは瞼を閉じた。

次の日・・・

エリーは夢を見るまもなく目を覚ました。

エリーが目覚めたときにはまだ太陽は上っておらず、薄暗かった。

水差しから冷たく冷えた水をついで飲み、着替えると、計画を再確認した。

緊張感と期待感と不安で、胸が締め付けられているようだった。

セトはまだ夜が明けていないからか、姿が無く、エリーは酷く心細かった。

「ミーフェに会えるよね、きっと・・・そうよ！」

エリーは椅子から立ち上がり、やっと上り始めた太陽に笑顔を見せた。

エリーは、完全に目覚めた。

そこからの行動は、気づかれれば大事になるものだった。

エリーはまず、ゴミだしのおばあさんにお茶会があると嘘をつき、城内のエリーの塔四階に連れて行った。

そこにはエリーの計画を打ち明けられた数人の侍女が婦人のフリをして待機しており、おばあさんをそこに放り込んだ。

そして変装したエリーは、物が入った数個のバスケットをゴミ入れ用の紙袋に入れて何度も塔を往復し、おばあさんが運ぶ予定だった馬車の薄木の敷かれた簡素な荷台にゴミに隠してのせた。

・・・よし、計画の最終過程へ突入よ！

エリーは心の中でそう叫ぶと、腰を曲げ、いかにもおばあさんを真似ながら馬車に乗って二頭の馬の手綱を持った。

その時、一人の侍女がやって来た。

セトだ。

「おばあさん、大丈夫ですか？」

セトは出来るだけ大きな声でそういいながら、エリーにそっと手紙と小さな紙袋を渡した。

セトが小さく呟いた。

「これは、関所を通るときの旅券と、腕に巻く包帯です。消毒液なども入ってますからね、気をつけて・・・」

エリーはおばあさんのように腰をさらに曲げ、ふかくお辞儀をする
と、呟いた。

「・・・ありがとう。行ってくるね、おばあさんは任せたわ、セト・
」

エリーの眩きに微笑んだセトは、馬車から離れ、王城の裏門の護衛兵に声をかけた。

「今からゴミだしの馬車が通ります。門をお開けください。」

エリーはゆつくりと、時間をかけて、なるべくあのおばあさんのように振舞いながら、馬車を進み、門を通り抜けた。

護衛の一人が挨拶した。

「いつも大変だねえおばあちゃん、頑張れよ！」

エリーは出来る限りのかすれ声でかえした。

「ありがとうね、行ってくるよ」

こうして、エリーは王城を脱走・・・ではなく、抜け出したのだ。

ミーフェに、会いに行くために。

花の思いは城を超えて（後書き）

やっと更新できました

姫と騎士団は小川で出会う

「やったわ！ようやく王城を抜け出せたわ！！」

エリーは喜びと感動で、危うく叫びそうになったのを堪えた。

エリーはその後もしばらく馬車を走らせ、幾つもの町や通りを走り去り、やがて国境沿いの細い馬車道に入った。

もう人気は全くと言っていいほど無く、日も暮れようとしていた。

「はあ・・・結構頑張ったわ・・・もうくたくた！はやく夜ごはん食べたい・・・」

エリーは疲れ果てた。お昼は何も食べておらず、拳句の果てには水も飲まず何時間も手綱と格闘していたことでもうご飯を食べる気力すら薄れてくるのである。

「でも、何か食べなきゃダメよね・・・」

エリーは最後の力を振り絞って、狭い馬車道の脇に通る小川の水辺に馬車を進ませ、そばの木に馬を繋いで、自分の重たい足をやっとのことで動かし、一口川の透きとおった冷たい水を口に含んだ。

い、生き返ったかも・・・だいぶ。

あのままだったら、私ポツクリ逝ってたわね。うん、頑張ったわ私！

エリーは顔や腕まで水に浸した。

「気持ちい〜！何だか私このまま死んでもいいかも……って、ダメダメ！ダメよ、自分！何考えてんのよエリー！ミーフエを捜すためにお城抜け出したのは誰よ！？そう、この私よ、わ・た・し！」

エリーは1人興奮気味に叫びながら、馬車の荷台から食料入りバスケットを取り出した。

「えっと……この小麦粉とー、ベーコンと卵でいいかなあ？」

エリーの特技追加。その名も独り言！

「あ、フライパンあるじゃない！これ使おうとー」

エリーはゴミ袋に入っていた古いフライパンを取り出して、独り喜んだ。

それから小川のそばに石を集めて丸く囲むように置き、その周りに生えている草を抜き取ってその囲いの中に投げ入れた。

「私一応自炊できるんだから、見てなさいミーフエ！下町育ちの令嬢舐めんじゃないわよ！？」

なぜかミーフエにむかって再度あの台詞。

自分でもわけが分からずあれこれ遠く遙かに居るミーフエに愚痴りながら、エリーはちゃきちゃきと食事の準備を始めていった。

夜に使うランプに火を灯してその火を石の中にくべた小枝に移した。火の加減を調節した後、小麦粉に水をいれてちょうどいい大きさにこねて丸めたものをその火のなかに投げ入れたエリーは、熱したフライパンにラードを薄くひき、その中にベーコンを薄く切ったものを数枚、卵を二個割り入れた。

フライパンの上でベーコンがジュウジュウ焼ける音と、風で木の葉が靡く音がそこらに響く。

「おいしそうじゃないのよ。おなか減ってきたじゃないのよ、もう！」

なんだかヒステリック気味になってきているエリー。

「……ミーフェったら、何で急にいなくなっちゃうの？心配するじゃない……」

混乱したままきゆうに悲しくなった。もう心の制御が出来ていない。

「ミーフェに会ったら、頭ひっぱたいてやるわ。今度こそ、私怒ったわ……ぐすっ」

エリーの涙腺が緩み、目がきらりと光った。

「あ、居た！！おい、エリーさんだるあんたあ！おい？」

ふいに背後から男の声が聞こえ、驚いたものの、エリーは自分が名前前で呼ばれたことに気づき、振り向いた。

するとそこには、馬にまたがった騎士団……のような男軍団が。よく見ると、ヴィアナ王国の国旗や紋章が見られる。

「あ、あなた達は、一体？」

エリーはとっさに立ち上がった。初めてみる顔の人たちだ。

全員を凝視していくと、1人の騎士が目にとまった。さっきから叫んでいた騎士の隣だ。

薄い空色の髪を風に靡かせ、優しそうで、それでいて強そうな瞳。もしかしくなくても……

「バ、バースさん!!!!!!」

あの時舞踏会でミーフェと踊っていたその人である。

バースはまだ青年で、騎士の服装がそれを隠している。

しかし、屈託ない笑顔はやはりミーフェと同じようにまだ幼いのだ。つた。

「はじめましてかな？エリー・リーブ・マフィー・グルニエールさん。私はバース・エグフェイネス・クリエストだ。カントラスの騎士団長をしている。」

バースはゆつくりと、でも気張った様子は見せずに挨拶した。

な、なんかすごい威圧感と優しさが伝わってくるわ・・・ミーフェも惚れるわけだね。うんうん。

エリーは勝手に納得しながらバースや他の人と握手を交わした。

「それで、バースさん達はなぜここに？任務でしたの？」

エリーは出来る限りの敬語を尽くし、笑顔で尋ねた。

バースは首をかしげた。

「確か私は、あなたの護衛で参ったと思ったが・・・？王宮から抜け出したと侍女から手紙を受け取った後、こちらへ馬を走らせてきたのだ。ミーフェに頼まれてな。」

「え？そうだったんですか。護衛が来ることは存じておりましたが、まさかあなただとは思っておりませんでしたわ。」

エリーは驚いて目を見開いた。

ミーフェはそんな事にも言っていなかったので、今はじめて聞いたのだ。

「あ、そうだね。バースさん達は、もうお夕飯を召し上がったのでしょうか？」

エリーは思いついて聞いた。

「え？いや、まだだが、それが？」

エリーは、バースと騎士団の部下たち総勢七名に、夕食を招待した。とても疲れていた騎士団の人たちは、喜んで受け入れた。

姫と騎士団は小川で出会う(後書き)

一話一話が投げやりな為か、一話一話が難しいんです・・・。

帝国の影にうつる少女

エリーは騎士団の人たちの食事を追加しようと、ベーコンをまた切り出し、卵をフライパン三つ分割りいれた。

自分の分は他の人にあげ、エリーはひたすら料理に専念した。

「んーと、塩コショウ・・・塩コショウは・・・あった！あ、もうすぐ出来ますから、待っててくださいね」

焚き火の周りを囲んできた、お腹を空かせた騎士団員に、エリーは呼びかけた。

騎士団のひとたちはいい人で、了解！と敬礼すると、また互いに雑談を始めた。

ふう、けっこうな量ね・・・

エリーは忙しく働き、さらに人数分のベーコンエッグと小麦パンを乗せて、みんなに渡した。

「お！やるねえエリーさん、おいしそうじゃん！...」

「俺も俺も！はやく食べようぜ」

「いただきまーす・・・」

騎士団員の人たちは、ありがたやーとエリーを拝み、その次の瞬間卵に食らい付いた。

「ん！んえー！うえーよ！」

「おおあーい！おっおおーお！」

皆口に食べ物詰め込みすぎて、何を言っているのか分からない。

エリーには何を言っているのかサッパリだったが、とても嬉しそうな表情からして、自分も喜んだ。

「嬉しいです、ありがとうございます！さあ、どんどん召し上がってくださいね」

「あっあー！ー！！！」

騎士の数人がそういった。どうやら「やったー！！！」と言っているらしい。

バースも美味しそうに小麦パンを齧っている。その表情は無垢な少年だった。

「なかなか美味しいな。エリーさんはいつもこのようなことを？」

バースの無邪気な問いかけに、エリーは首を振った。

「いえ・・・昔、下町に住んでいたときによく作っていたもので。

お口にあって幸いです。」

「下町？君は養子なのか？」

「はい、王都騎士団長のジエイガン・マリヴェナの娘だったのです。それから、グルニール家に養子に行つて……」

「何！？君があの子のマリヴェナ師の娘なのか！」

そう叫んだバースは、続いて目を煌かせながら語りだした。

「私はマリヴェナ師から武術を学んだんだ。僕が入る前にも数人弟子入りして……あ、ミーフェもいたよ。」

マリヴェナ師はとても武術に長けていて、まさに武人として生まれてきたのだと思うほどだったよ。

……もしかして、たまに差し入れしてくれてたマリヴェナ師の奥さんの後ろにちよこちよこつくついていた小さな女の子は、君だったのかい？」

「あ……まさか、いつも泣いていた少年って、バースさん！？」

エリーは記憶と目の前の人を照らし合わせた。

よく見ると、目元が似てるような……

でも、記憶の中の少年は、すみっこで泣いてたような……

「そつだよ。覚えてたんだね。」

バースはあっさりと頷いた。

「え!？」

バースは何故か急に少年のような口調になって、幼げな笑みでエリーを覗き込んだ。

「ミーフェは覚えているかい？ほら、一人だけ女の子で剣術に励んでいた、あの子だよ。なんか運命感じないかい！」

ウキウキしながら、さっきまでのイメージを壊していくバースをよそに、エリーは黙り込んだ。

「女の子・・・？あ・・・！そういえば、居たかも。あれはミーフェだったのね！」

ミーフェも言っていたな・・・バースさんと一緒に騎士修行してた。あれ？でも、なんか違うわ・・・

「あの、バースさん。気になることがあるんですけど・・・

ミーフェは自分のお父さんから武術を習って、その後からバースさんも来たんだって教えてくれたんです。

でも、あなたは私の父から習ったって、今・・・これはどのようなことなんですか？」

「あ・・・大体あってるけど、ちょっと違うな」

バースの答えに、エリーは素早く食いついた。

「え？じゃあ、何ですか？」

今回の失踪もミーフェの過去が関係しているのかも知れない・・・その思いつきで、妙に知りたくなった。

バースは話し始めた。

「あのね、ミーフェは君の父に弟子入りする前、カルビナ帝国で騎士の修行をしていたんだ。

当時ミーフェは家族三人で幸せに暮らしていたけど・・・そのときのカルビナ帝国王は溢れんばかりの規律を作ったね。ミーフェのお父さんはその一つに引っかけられて、王宮に一人行くことになったらしいんだ。家族が離れ離れになって、ミーフェがお母さんを守ろうと騎士になっただけだ。詳しいことは聞いてないなあ。」

「まあ・・・そうだったのですか。ミーフェは悲しい過去を・・・」

エリーは愕然として、口に手をあてた。

昔ミーフェにそんなことがあったなんて知らなかった。

今まで・・・

バースは続けて話した。

「ミーフェは優秀だったからすぐに騎士になったらいいよ。そこから、サラッという遠い王族のお付の護衛になったんだって。

そのあと、ヴィアナ王国大使だった父に連れられた僕と出会って、そこからはすぐにそこを脱走して、僕の祖国ヴィアナ王国に来たって訳さ。」

「そうだったの……それから二人は父の元へ？」

バースは素直に頷いた。

そして、エリーの頭の中では、新しい疑問が生まれていた。

「遠縁の王室のサラさんって……今のカルビナ帝国女王と同じ名前ですよ？これって」

「ああ、うん。サラって言うのは、今の女王に当たるね。なぜか遠縁なのに、王族がサラを除いて全て亡くなったばかりに、サラがなっただって、言ってた。」

「そうだったんですか。なんだか、気味が悪いですね……」

「まあ、王族内ではそのようなこともよくあるようだし、別にたいして調べもしなかったようだね。」

「……………」

エリーは頭の中で状況を整理した。

ミーフェは前の主人の命令に背けなくて向かって……

その主人は今のカルビナ帝国女王、サラ。

そしてサラ王は、遠縁の王族にもかかわらず、王家がサラを除いてすべて亡くなったために、仕方なく女王になったんだ。

一方ミーフェはカルビナ帝国に生まれて、厳しく育てられていた……

サラのお付の護衛になったけれど、バースが駆けつけてようやく帝国の恐ろしさを知ったのね。

「バースさん、今のミーフエには、お父さんもお母さんもないんですか？」

エリーはバースが言おうとしていたことを口に出した。

「ああ、それなんだけどね。僕が無理やり連れてって以来、両親と別れていたはずだ。

それからは君のお父さんや僕の両親に世話してもらったんだ。

……まあ、今も両親がいるかどうかは分からないけど」

「そうですか……。貴重な情報ありがとうございます、バースさん。私、今日寝たら、急いでカルビナに向かいますから、止めないでくださいね」

「ああ。僕は侍女に頼まれたので君の護衛をすることになったよ。よろしくね」

エリーは驚いて、聞き返した。

「侍女って……。セトのこと？」

「確かそうだね。」

「そうですか。セト……」

セトは、何処まで自分のことを考えていてくれたのだろう。

そう思うと、感謝とお詫びで心がはちきれそうになった。

「・・・君はいい侍女と出会ったようだね。侍女はいつも傍に居てくれる人だろうし、心を許せる相手が多い方がいいと思うよ。」

バースはニッコリ笑って、エリーの頭をなぜか撫でた。

「あ」

「?どうした」

エリーは、少しニヤリと笑って、バースの耳元に口を近づけた。

「・・・あの、ミーフェとはうまくいってるんですか? 舞踏会でミーフェと踊ってるとき、すごく顔赤かったですよね」

「・・・!!君、見たのか!？」

バースは耳に声が届いた瞬間顔を真っ赤にしてすびゃつとエリーから飛びのいた。

エリーはフッフッフと微笑んだ。

「大丈夫ですよ。私、二人を応援してますから。二人はもっと積極的に会って、くっつけばいいんですのに」

「・・・君、さりげなく物凄いこと言ったね? 今言ったよね!？」

「フフフフ、私黙っときますよ。このことはね。じゃあ、お皿洗
つてきますね」

エリーはフフフフと微笑みながら、お腹いっぱい食べおえた騎士
団の人の山のような皿を抱えて歩き出した。

バースはただ赤くなっていく顔を隠そうと、やきになっていた。

帝国の影にうつる少女（後書き）

会話分がしこたま増えてしまい、最後に結論を書くことになってしまいました。誠に申し訳ありません！

更新も大分遅くなってしまったので、これからは出来る限りハイスピードで更新できたらいいなと思っております！

出発と決断の刻

「皆さーん！！朝でーすよーおきてくださいね！」

早朝から川の辺では、エリーの叫び声が響き渡った。

「うーん・・・あれ、エリーちゃんか。早いねえ」

むくむくと起き出していた騎士団の人たちは、伸びをしながらエリーの声に口を開いた。

エリーは笑顔で朝ごはんの盛られた皿を差し出し言った。

「勿論です。朝はしっかりご飯食べないといけませんから、早めに起きて体を起こさないと！」

「はいはい。っと・・・」

エリーは騎士達と朝の挨拶をかわしながら、一人の騎士を目で追った。

その先には、バースが眠たそうにしている団員を起こしていた。

「お早うございます、バースさん。ご機嫌いかが？」

エリーはバースにも皿を差し出ししながら挨拶をした。

「僕は相変わらずだね。というか、僕の場合は夜中もずっと見張りをしていたというのに、他の部下達の方が寝起きが悪いと言っているのが聞き捨てならないね。ありがとう。」

バースは口早に喋りながら、朝ごはんを食べ始めた。

「バースさん、朝ごはんが食べ終わり次第、すぐに出発できませんか？ミーフエは」

エリーがその先を言い出そうとしたとき、バースが口を囲むようにして抑えた。

「その先は言わなくていいよ。僕達は、きっとミーフエの助けになるし、君の意のままに動かされるだろう。ではこの後出発でいいかい？」

エリーは、複雑な微笑で、頷いた。

「……はい。御願います」

それからエリーとバースの騎士団たち一行は朝ごはんを手早く食べ終え、すぐに出発した。

エリーが使っていた馬車は騎士団の一人が城へ戻してくれると請合ってくれたため、エリーはその騎士が乗ってきた馬を借りることにした。

「馬車じゃなくていいのかい？」

そんな一人の騎士の声にも、エリーは笑顔で答えた。

「はい。こつちのほづが早いですし、気が楽ですから」

そしてその一行は、ミーフェのいるカルビナ帝国へと、出発した。

「…今、なんと!？」

玉座の隣に陣取っていた側近・ネフルアードは、一人やって来た遠地武力騎士団の騎士の言葉に、思わず立ち上がった。

「仰ったとおりです、大臣陛下。私はヴィアナ王国次期王妃、グルニエール公爵令嬢様が使われていた馬車を返却してきたところでございます。」

その騎士の胸に光るバッジには、王国内のカントラス地方の紋章が描かれていた。

「そんなことがあるはずはない!今令嬢様は、王城内の塔にて療養

中のはず。抜け出すなどありえないであろう」

ネフルアードは、その騎士にむかって、自分を落ち着かせるかのよう
に空笑した。

「……………」

その間も、玉座に座っている王、ヨーアンは黙り込んだままだった。

騎士は自分の言っていることをなんとか分かってもらおうと、必死
で言い募った。

「しかし、確かに私の隊長がエリー殿だと仰っており」

「ガタン！」

その途中、急に玉座の間の扉が開いた。

入ってきたのは、数人の侍女。その全員が、エリーの塔で働いてい
た者だった。

「国王陛下、突然の無礼をお許しください！！しかし、大変なことが
起こったのでございます！！」

「何事だ？」

ようやく王が口を開いた。

すると、一人の侍女が咽びながら口を開いた。

「エリー様が・・・グルニエール公爵令嬢様の、姿がなく、どこ、何処を捜しても・・・」

うう、私たちの責任です！こんなにもなるんでしたら、いつそ私が無理やりにも護衛を増やしていれば！！こんなことには・・・」

「なんとということだ・・・これは嘘ではあるまい、そうだな大臣」

「・・・まさかとは思いますが・・・しかし、もし本当だとするならば、すぐさま搜索しなければなりません。どこへ行ったしまわれたのやら・・・見当もつかぬとなると・・・」

「恐れながら、令嬢様はカルビナ帝国へ向かわれたかと思われまします！」

傍で佇んでいた騎士が口を開いた。

「なんだと！？それでは令嬢は何故そのように向かわれたのじゃ？」

「何でも、帝国へと移られた専属騎士を追うとかで・・・」

騎士の言葉に、王は眉をひそめた。

専属騎士・・・ミーフェ殿？

だが、あの性格。よほどのことが無い限りエリー殿のそばを離れることがないはず。

そして、それを追いかけたエリー殿も・・・

「事情は分かった。すぐさまカルピナ帝国へ軍を送ろう。」

帝国の現女王とは面識が無いが、事情を話せばきっと分かってくれるであろう。大臣、急いで軍の召集を！」

「はい！いますぐ準備いたします。」

大臣は、王に敬礼をし、急いで王座の間を後にした。

「さて・・・ではその騎士。そなたは十分な仮眠をとり、体を休めてからまた此处へ参り、詳しい話を聞かせて欲しい。よいな？」

「国王陛下直々のご命令とあらば、必ず。では、これにて」

騎士も敬礼をし、別の騎士に連れられてその場を後にした。

「侍女達よ。早めの報告、礼を言わねばならない。しかし今は緊急時ゆえ、後々礼をいたす事にする。よいだろうか」

王は数人の侍女に向き直り、そう言った。

侍女は、滅相もないとばかりに首を振った。

「そ、そんな、国王陛下に礼を言われるなんて。先ほどはそれどころではなく、急いで玉座の前に立ち入ったこと、深くお詫びを申さなければなりません。」

「そうか。では、そのことも後々だ。今は、エリー殿の手がかりとなる物品を塔内にて探していただきたい」

王の呼びかけに、侍女はかきこまりました、と言い残し、足早に去った。

「エリー・・・大丈夫だろうか。」

王の咳きは、玉座の間に鳴り響き、木霊した。

出発と決断の刻（後書き）

今回は早めの更新が出来、ふうーっと息をついた暁瑚都羅です。
（
今回も遅かったんですけど…）

何だかこの回でちょっと進展したかな？と思ってます。
このまま、きちんと更新ができれば！と願うばかりです。

騎士が呟く最後の言葉（前書き）

少し過激な表現がありますので、注意してください。（血とかでで
きます。）

騎士が呟く最後の言葉

「さあミーフェ、返事をして頂戴。あなたならば、きっと私を選んでくれるのでしょうか？これをずっと待っていたのでしょうか？」

サラは、目を爛々と輝かせ、ミーフェの返事をせかした。

ミーフェは、目に静かな光をたたえたまま、俯いた。

「何度話したら分かるのです。私は、ここに残るつもりは無いと、何度も念を押しておいたはず。あなたは、なぜそこまでなさるのです」

ミーフェの静かな表情にも、少しだけの情を見て取ったサラは、ミーフェの手をとった。

「…ミーフェ。あなたは少し疲れているのよ。きつと休めば元のように優しくて、私のことを最優先にしてくれるあのミーフェになっているはずよ。そう、きつとそうなのよ。」

だって、あなたはおかしいわ。何度も言ってるじゃない。私は、ミーフェのことを考えて言ってあげてるの。

あなたがここへ戻れば、あなたのお父様とも、お母様とも一緒に暮らせるわ。今の生活なんかより、余程幸せな暮らしが待って

「ガタン!!!」

ミーフェの手がサラの両手をすり抜け、机を叩き鳴らした。

「ミーフェ？」

サラは、立ち上がり髪で顔が見えないミーフェを覗き込んだ。

「…お言葉ですが、あなたの話の意図が全く理解できません。あなたの言葉を聞いていると、まるで私は悪いことをしたかのように聞こえます。違いますか？」

ミーフェの声には初めて、苛立ちが読み取れた。

「あら、そうよ？あなたは私が引きとめたにも拘らず、ヴィアナなんかへ姿を消したのです。それは、悪いことではないと言いたいのですか？」

サラは微笑を浮かべている。

「…あなたのほうが、余程おかしくなった。私は、そんなあなたに仕えたくはありません。さあ、これで私の心中は察知できたでしょう。では、私はもうお暇させていただきます。」

ミーフェは、途中から息を弾ませ、サラに向かってそう言い放ち、部屋の入り口へと足を踏み出した。

「ミーフェ、あなたの心のうちだなんて、もうとつこの昔にお見通しなのよ。だからこそ、私は今になってあなたを呼び戻したの。あなたは、それを知っていたのかしら？」

サラは、相変わらぬ微笑でミーフェが座っていたソファを見ながら言った。

ミーフェは一瞬動きを止めたが、また歩き出し、扉の取っ手に手をかけた。

途端、扉の向こうから衛兵が数人飛び出し、ミーフェを取り囲んだ。

「!？」

ミーフェは腰の剣に素早く手をかける。

「あなたを取り戻すためなら、何でもすると、言ったでしょう。さあ、はやくその身を私に捧げるがいいわ！」

サラの声と共に、衛兵がミーフェに飛び掛ってきた。

ミーフェはそれを素早くかわし、剣を鞘から抜き取った。

ミーフェは衛兵を二人一度に切りつけ、残りの人数を目で追う。

しかし、残りの衛兵に加えて、近衛の騎士たちまでやって来た。

「……………っ！」

ミーフェは数がかえって増えたことにいらだちながら、次々と騎士や衛兵を倒していく。

ミーフェは専属騎士の実力を見せつけ剣を振りかざしていくが、次

々と現れかかってくる兵士に体力を奪われ、徐々に顔に苦痛の表情を浮かべた。

「…はあ、はあ、はあ…」

ミーフェは、血で濡れた剣を渾身の力を込めて握り締め、息切れをむりやり押さえ込む。

しかし廊下から、更なる兵の足音が近づいてくるのが聞き取れた。

「…もう…昔には…戻れない…の…？…サ…」

ミーフェは最後にそう呟き、新たにやって来た兵士に捕らえられ、意識を失った。

「…ミーフェを、アビリスタの地下牢へ案内しなさい。くれぐれも慎重にね。本人が目覚ましたら、睡眠薬を与えるのよ、いいわね？」

サラはミーフェを抱えた兵士にそう言うと、侍女に付き添われ、部屋を後にした。

「…ふふふふふふ…これで、ミーフェは私のものよ。ヴィアナ王国の、エリーさん。あなたには失礼だけれど、私のほうがよっぽど、ミーフェのことを分かってあげられるの。」

サラは廊下で、不気味に笑った。

もう、昔に戻ることは出来ない、呪われた闇の笑みを浮かべて。

エリーは、ヴィアナ王国を出発し、隣国メテンス国を通り過ぎ、とうとうカルビナ帝国の首都・エンデセルファディアに到着した。

「此処が…カルビナ帝国…何処か、重い雰囲気を感じるわ…」

エリーの一言に、騎士団の者達も息を呑んで頷いた。

「エリー殿、今夜どこかの宿で休み、気持ちを整えてから王宮へ向かうとしよう。」

バースは、まるで自分の気持ちを押さえつけるかのように説得し、エリーを守るようにして、宿を探した。

そっか、バースさんもミーフェを早く連れ戻してあげたいんだね…

私が覚悟を決めて、ミーフェを助けてあげなくちゃ

エリーはバースの顔をチラリと見て、目に炎を宿した。

今度は私が、守ってあげるから、助けてあげるから、待っていてね。
ミーフェ…

エリーの目に映る王宮の城は、降り続く雨で湿り気を帯びていた。

騎士が呟く最後の言葉（後書き）

頑張って書きました…

花は辿る道を見抜く

王都安宿に泊まったエリーと騎士団は、翌朝、身支度をし、王城へ向かう支度を整えていた。

「今から行くのね…お城へ」

エリーは、持ってきたバスケットから自分の服や装飾品を取り出して身につけ、治りかけの腕の傷に包帯を巻きなおしたばかりだった。貴重品が入られた袋の中で目に留まったのは、ミーフェがくれた護身用の小剣だった。

ミーフェ、あなたは自分がもしいなくなるときに私が死なないように用意してくれたのね。

自分が居なくなることも、分かっていたの…？

エリーは、自分のドレスの肌触りのよい裏地の隙間に、あのサファイアブルーの頭巾でくるんだ小剣を忍び込ませた。

「何かあるかもしれないし、バスさんに迷惑ばかりもかけてられないわ。自分のことは自分で何とかしましょう！」

エリーは不安を消しきれない表情で決意した。

そして、個室から廊下へ続く扉の物音に気付いた。

「トントン…エリーさん、準備は宜しいかい」

扉の向こうの声はバスだった。エリーは声を張り上げて返事した。

「ええ、丁度終わりました。今行きます」

そして、荷造りを終えた大きなバスケットを宿屋の亭主に預けると、貴重品を愛用のハンドバッグに放り込み、宿を後にした。

王城を真正面から見上げると、この大理石の階段は、ミーフェも歩いたのだらうと、思えた。

正面に佇む巨大な鉄製の扉は、昔の戦歴を物語るかのように、あちこちに傷が浮かんでいて、親しみを感じることは出来ない様だった。

「……………」

エリーは、無言のまま入城届を済ませ、王城外で待機しているバスを除く騎士団員にちらりと視線を移して、バスと共に遂に王宮へ足を踏み入れた。

「エリー様、無事に行けたかしら。カルビナ帝国って、とても恐ろしい国だと聞いていますわ」

ヴィアナ王国王宮内に仕える侍女の1人が、声を低くして他の侍女に目くばせした。

「昔はここら周辺を全て従えていた大国だと聞いたことがあります。無事にたどり着ければいいのですけれど…結婚式にも間に合うかどうか、あと五日なのですよ。結婚式は」

「そうですね…エリー様も少し無謀と言えますわ。いくら専属騎士を助ける為とはいえ、結婚式のこととも考えずお探しになるなんて」

「そういえば、私疑問に思っていることがあるのだけれど…どうしてエリー様のお付の侍女ともあるうせト様が、エリー様が出発することに反対しなかったのかしら。」

ある一人の言葉で、侍女たちが使う部屋はたちまちその話題で盛り上がった。

「せト様は、もとはエリー様の前の令嬢に仕えていたとか、いないとか。」

「あの人、まだお若いのに、どうして侍女長を務めさせてもらえるのかしら。私たちと同じ年代に見えますわ。」

「…ねえ、気づきました？今はお昼休みなのに、せト様はお帰りになっっていないわ…」

その言葉に、侍女達は不安を覚え、エリーが療養していた塔や王宮中を探して回った。

だが、エリーが消えたのと同じように、セトが見つかることは遂に無かった。

「女王陛下、客人が参られました。お通ししましょうか？」

衛兵の声がサラの元へ届くと、すぐに答えが返ってきた。

「いいわ、通して。それから、すぐにお茶の用意をして頂戴」

「ははっ」

暫くして女王の玉座の前に通されたのは、煌びやかなドレスを身に纏い、頭にはこれでもかという程装飾品が施された帽子をのせた若い女だった。

「女王陛下、お久しぶりのご対面、誠に嬉しゅうございます。私、アルデンヌ・デルラシュリアは、あなた様直々のご命令による任務を終え、たった今女王陛下のもとへ、懐かしい故郷へと戻りました。」

女は帽子を取り、硬い質感の黄金色の髪を床につけるようにして頭

を伏せた。

サラは、嬉しそうに身を乗り出した。

「よくぞ戻ってきてくれましたわ、アルデンヌ。任務を全うしてくれてありがとう。心から礼を言うわ。さて、別室で思い出話でも聞かせてもらえるかしら？」

サラは意思を伝える眼差しでアルデンヌを見ると、アルデンヌは深く頷いた。

「勿論です…あなた様の意のままに。」

アルデンヌは、瞳にしっかりと女王の姿を刻み込んだ。

はるか昔から映りこんでいた、本当の主の顔を思い出すかのように。

「今は駄目というのですか？私はヴィアナ王国公爵令嬢なのです。今すぐここを通してください。」

エリーは待合室で二時間も待たされた挙句、いまだに女王と会えないことに腹を立て、力づくでも兵を破り女王の元へ向かおうとした。

「お、お待ちください。今女王様は他のものと面談しているのです。さっきから何度も言っているでしょう。」

兵はエリーから浴びせられる殺意に満ちた目を必死に逸らしながら扉から向こうは行かせまいと粘った。

エリーは暫くその兵士に熱い視線を投げかけていたが、ふと思いついて、またおとなしくソファに座った。

「…もういいわ。そこまで言うならもうちょっとだけ待ってあげる。バースさん、ちょっと聞いて。」

エリーは浅い眠りから覚めたバースの肩をちよんちよんと叩き、兵士に聞こえないようにそっと耳打ちした。

「…分かった。じゃあ私は時間までまた眠るとしよう」

バースは軽く頷くと、また瞼を閉じた。

エリーは不敵な笑みを浮かべると、兵士にあることを頼んだ。

「兵士さん、さんざん叫んだら喉が痛くなつたわ。お茶の替えを用意してくれる？私冷たくなつたお茶だ何て飲みたくなくてよ」

兵士はようやく落ち着いたらと一安心し、同時にあの騎士と何を話したのか聞きたくなつた。

「では侍女に頼んでおこう。して、その騎士と何を話したのだ？」

エリーはくすりと笑った。

「あら、あなたはこの帝国の兵士のはずよ。いつからヴィアナ王国の行政に顔を出さるようになったの？さあ、早くお茶をください

な。
」

エリーの有るまじき変貌振りに、兵士は違和感を覚えながらも侍女を呼び出した。

花は辿る道を見抜く（後書き）

あはははは、エリーが変貌してしまいました（書いてるうちに何
だか凄いことにな〜）

あ、このエリーじゃない！とか思ったら意見御願ひします・
。

花を守りし光の行方

女王と客人は、その後すぐに玉座の間を後にし、別室へ移った。

「さあ聞かせて頂戴、アルデンヌ。あなたの任務の事」

女王・サラは、部屋のなかを一人きりにさせると、すぐさまアルデンヌ又に向き直った。

「ええ、今からお話します。憎き令嬢と、その傍で偽り続けた私の化身・セトという名の侍女の話…」

アルデンヌは帽子を取り、かぶっていた艶やかな髪を取り床に置いた。

髪が取られ、そこには茶色の豊かな髪が露になる。

それこそが、エリーが頼りにしていた侍女の姿であった。

サラは声を潜め、アルデンヌから聞きだした。

エリーの素性や気質、その他ヴィアナ王国の政治の仕方などを。

「あの子はどういった子なの？」

サラの問いに、アルデンヌは優雅に微笑む。

「一言でいいますと、ただの人情にあつい馬鹿ですわ。今回だって、専属騎士が居なくなっただけで結婚式も投げ出してしまったのですよ。」

「そう…やはりミーフェには相応しくないと言うことね。分かったわ。早々に凶手を送るとしましょう。」

サラは事も簡単に、まるでこういわれることを予想していたかのよう、ため息をついて言った。

「…ねえ、アルデンヌ？」

「はい、サラ様。」

アルデンヌが見つめる先で、サラはもたれていた顔を上げた。

「やはり、ミーフェが仕えるべき主は、この私にこそ相応しいと、そう思わない？」

サラの顔はアルデンヌのほうを向いていても、目にアルデンヌの姿はなかった。

その目には、エリーに対する異常なほどの憎しみと、ミーフェへのおぞましい愛情のみがあった。

アルデンヌは、微笑を絶やさず、ただはい、と言った。

休息を願い出てバルコニーへ出たアルデン又は、華麗に咲き誇る花々の傍で立っていた。

「エリー…あの女程、馬鹿な者はおりませんわ。私に止められることも無く、そしてそれを不自然に思うことも無くまんまと此方へやつてくるだなんて。本当に…」

そう呟いたアルデン又の手の上には、冷たい涙が零れ落ちた。

「な…なんで泣いて…！」

アルデン又は急いで目にスカーフを押し当てる。それでも止まらない涙にアルデン又は座り込んだ。

ああ、そうか。私の体はちゃんと見極めている…

本当の、主の存在。その人が、自分のなかでどれだけの輝きを放っているのかということ。

「う…ご、御免なさい、エリー様…私は、あなたの傍に、居たかったと言うのに！もう…それも、ままならないなんて」

アルデン又は、今だけ、この少しの間だけ偽りの仮面を外した。

生まれ故郷のこの国でさえ仮面を外さない彼女は、ただ只管進み続けるしか無かった。

それは、前に進んでいるのかどうかも分からない、暗闇の道だった。だから、エリーと出会って、初めて自分の居場所がはっきりしたような気がした。

エリーの前では、仮面を付けられなかった。それは、あのリリアンと同じ。

二人の前では、眩いほどの光に包まれていたから。

アルデンヌ…そして、セトも、その光にあたたかく包み込まれて、束の間の幸せを感じ取れたのだった。

「セトこそが、あの侍女の人生こそが私の真の姿なのかも知れないわ。もう、戻ることは出来ないけれど、楽しかった…」

少しの間だけ、味わうことが出来た幸せ。

アルデンヌは、一生忘れることは無いと心に誓った。

遠くでサラの話し声が聞こえる。

もう行かなくては…偽りの交差する世界へ。

アルデン又は、また仮面を付ける。見えないけれど、頑丈な、心の仮面。

そしてそれは同時に、一生その仮面は外せないということの意味していた。

「美味しいわねこのお茶。やっぱり王室のお茶ですものね。一流だわ」

エリーはおかわりのお茶だけでゆうに五杯目を飲み干そうとしていた。

バースは相変わらずの熟睡ぶりで、エリーが使用人にお茶の産地などについて伺っている時も身動き一つ見せなかった。

使用人も護衛兵も大人しく窓を眺めている。エリーはこの瞬間を見逃さなかった。

「あの、護衛兵さん。私お茶を飲みすぎて…あの…」

エリーはもじもじしながら俯いた。

護衛兵はその意図を容易く汲み取り、立ち上がってエリーに呼びか

けた。

「ああ、それなら此方ですよ。どうぞ。」

兵士は大人しいエリーに免じて案内を始めた。

「ここです。どうぞ」

「ありがとうございます、護衛兵さん。じゃあ、ここで待っていてくださる？
一人じゃまた迷ってしまうから…」

エリーは廊下の端に兵士を待たせ、一人化粧室へ入室した。

「ふふふ、このときを待ってたのよ。さあ、ここからが計画の山場
よ！がんばるわ」

エリーは力強く呟いて、化粧室の窓に手をかけた。

「ドサツツ!!」

「痛っああ！何よ此処！何で窓のすぐ下に石が敷いてある訳
!?!」

エリーは豪快な音と共に石畳の地面に落ち込んだ。

「もうやだ…酷いよ石…」

エリーは半いじけ気味に石を蹴飛ばし、急ぎ足で向こう側手の窓が

連なる方へ回り込んだ。

「確かこつちだったわね」

そういつてたどり着いたのは、さっきまでエリーが居座っていた部屋だった。

中ではバースが目覚め、エリーの指示を今か今かと待っている。

よし、今しかないわ。行くわよ…

エリーはまた裏側へ戻ると、ミーフェの小剣を取り出し、あの石に思い切り叩き付けた。

「ギギヴィヴィヴィン…」

鈍い音と共に、かすかな振動が体を巡る。きっとバースの部屋にも届いたに違いない。

「ミーフェ、あなたの剣今役に立ったわよ。石に復讐も出来たし、一石二鳥ってところね。まあ、剣としての機能は何一つ使っていないけど。」

エリーの言葉が終わるかおわらないかで、向こう側からバースの聲が響いてきた。

「…じゃあ、迎えにいきます。ええ、ご令嬢を見つけたらすぐ

に戻ってきますよ。では」

バースも巧く使用人を出し抜いたに違いない。エリーは満面の笑みで向こう側へ駆けた。

誰も居ない回廊で窓から飛び出したバースを見つけたエリーは、すぐに顔を綻ばせた。

「バースさん！凄いわ。これから女王様に会いに行きましょう！」

しかし、バースは首を横に振った。

「いや、この女王は今も面談の最中だろう。今向かっても会うことは出来まいと思う。とにかく今は、ミーフェを捜すんだ」

「でも、ミーフェは何処に居るの？分からないわ」

「大体的見当はついてる。さあ、見つからないうちに早く！」

「え、ええ……」

バースに手を引かれるままにエリーはミーフェの姿を目で捜し、二人は王宮内の中庭へと姿を消した。

花と太陽を結ぶ銀糸

「バースさん、何処にミーフェは居るの？」

エリーの問いに、バースはただ言葉を連ねる。

「候補は二つだ。まずはこの王宮内の部屋と言う部屋に居るか。それを確かめた後に……」

「？もう一つは……？」

「……もう一つは、昔帝国が利用していた大陸最大とうたわれる大監獄……【ヴォーンレイズ】に居る可能性が極めて高い……」

バースの声に、エリーは口を覆った。

「大監獄ですって！？何故そんなところにミーフェが行くの？」

「昔、帝国の王族は、自分にとって最愛の……愛おしい人が目の前から去らぬようと、大監獄や地下牢に監禁したと聞く。もしミーフェの存在が女王にとってかけがえの無い者だとすれば、辻褄が合う」

「そ……そんなこと、ミーフェに限ってないわ。だってミーフェは騎士なのよ？騎士がそう簡単に捕まるわけ……」

エリーの声が、だんだんと小さく、儂いものにかわる。

バースが嘘をつくとは思えない。それはエリー自身も分かっている。だが、大監獄とも言われると、エリーは心にピンと張った糸を揺るがせた。

何故かは分からないけれど、ずっしりと、でも脆い銀の糸。

ずっと紡いで来た思い出が織り込まれた銀の糸は、絶対に切れることは無いと信じてきた。

それが今、消えかけようとしている。

エリーには、それが信じられなかった。

「無いわ。」

だったら、紡ぎ直そう。

この手で自ら、銀の雫をかき集めて。

ミーフェとの思い出が消えることは無いから。

だから、きつと紡ぎなおせる。いや、また紡いでみせる。

「バースさん知ってる？私とミーフェはね、幾つもの運命が重ねてやっと出会えた、奇跡の二人組みなのよ。だから、そう簡単に離

れたりしないの」

そう、自分があの時令嬢になると言っていなかったら、二人は出会うことは無かっただろうし、きっと存在すら知らずに生きていたことだろう。

ミーフェが帝国を出て、専属騎士にならなければ、あのリリアンとも会わずに人生を終えていた。

そう、全ては奇跡なのだ。偶然が折り重なって出来た、運命なのだ。

「だから私は、絶対に諦めたりしない。ミーフェが離れるときは、永遠に訪れることはないのよ。でしよう?」

エリーの言葉に、バースは一瞬ぼやめき、微笑んだ。

「そうだね。ミーフェは君と…」

ヴィアナ王国と共に生きるべきなんだ。

「行きましょう、バースさん。ミーフェの元へ…運命の銀の糸の先へ。」

エリーは、胸をはって立ち上がった。

揺ぎ無い心と眼差しに、バースも心を決めた。

「うん、行こう。そして、ここには二度と戻ってこなくていいように、キッチリかたを付けよう。」

やがて二人は王宮内の探索に取り掛かった。

二手に別れ、取りあえずは廊下を歩き回って見ることにした。

エリーの心の中では、直感が働いていた。

《ミーフェは、大監獄の中に居る》

それは、バースが青ざめて口にした様子からも容易く想像できる。

「サラさんは、余程ミーフェのことを大切に思っていたに違いないわ。それは分かるもの」

エリーは悟ったように一人呟いた。

それもそのはず。そもそもここにミーフェを呼び出したのは他でもない帝国女王なのだ。女王以外に閉じ込める者は考えられないし、そうと仮定するとミーフェが大監獄に居ることは間違いない。

そう考えていると、向こうからバースがやって来た。どうやら二人で王宮内を一周したらしい。

「エリーさん…」

バースの顔には、苦痛が滲み出ていた。

しかし、エリーは優しく、でも少し不安げに微笑んだ。どうせ悩んだって変わらないことなのだから。

「バースさん。やっぱりミーフェは大監獄に居るのよ。バースさんだって最初から気づいていたでしょう?」

「……………だが、あそこは危険なんだ。君が向かうところじゃない。凶手や闇人が数え切れないほど溢れているんだ。いくら国営といわれていても、管理はされていない。つまり助けは来ないんだ」

バースはエリーを試すかのように言葉を重ねた。

「…私が求めている命は、ちよつとやさつとの価値なんかじゃないの。溢れ出るほどの凶手や闇人で満たされるような価値じゃないの。助けが来ないからつて諦められるような価値じゃないの」

それが、バースが求めていた以上の答えだったと、エリーが気づくことは永遠にないだろう。

バースは暫し黙り込み、険しい表情でエリーに手を差し伸べた。

「君が望むのなら連れて行こう。ただし、いつも優先的に自分の身を守ることだ。いいね」

「…出来る限り、従います。でも、いつか約束を破るときが来ます。」

エリーは、力強く微笑んで見せた。

花と太陽を結ぶ銀糸（後書き）

忙しくとも、やっとこさ三十話を突破できました！とーっても嬉しいです…！

ヴィアナもいよいよ核心に迫り始めましたね。

作者から言つのもなんですが、結構進んで嬉しい限りです。

なかなか更新が出来ない日々が続いておりますが、これからは出来る限り最善の策を練って執筆し、皆さんにお楽しみいただけるような小説にしたいと思っておりますので、応援よろしく御願います。

思い描く幸せへの導

いつそ短い命なら、ふわりと消えてしまった方がよかった。

儂い命の灯火なんて、いらない。

欲しいのは、たった一人の少女だけ。

そう、あの頃の少女さえ居てくれれば、命さえ尽きてしまってもいいと思えた。

「……………?」

ミーフエは、囁きが良く響く石造りの地下牢で目を覚ました。
すると突然鋭い痛みが頭を襲う。

「……………」

喉が切り取られたように、声が出せない。

ミーフェは霞む視界の隅で、睡眠薬の瓶を持って駆けて来る一人の女を見た、気がした。

そこからはまた深い眠りにつき、やがて自分が目覚めた事すら記憶に無いまま瞼を下ろした。

眠ると頭痛が和らいだ。ミーフェは眠ることが記憶に残らないまま、ただ眠り続けた。

あの時口に出したかった言葉が何だったのかも忘れ、全て遠い谷底に投げ出してしまったことも知らずに。

王城を急いで飛び出し、数分馬車で緩やかな坂を降りたところにある大監獄があった。

エリーは馬車から跳ね降りると、バースと城を出た理由を説明した騎士団員を引き連れて、門衛が居ない監獄へ足を踏み入れた。

「なんて所だ！ここは国営のはずなのに…よくミーフェさんを預ける気になったな」

騎士団の一人が呻いて言った。

そこは、入った瞬間に視界が奪われる、暗黒の世界だった。

石畳床や壁にはもう何年前に死んだか分からないほどの死体や白骨死体がもたれ掛けられて、この場の空気をより一層冷たく残忍なものにしていた。

そして、その上をただの床のように歩いている、目が落ち窪んだ百人程度の地下住人の黒い影が、バースの持ったランプに照らされる。

「こんな所だったなんて、知らなかった…」

流石にエリーも口元を覆った。

バースは、青白い顔で口を結び、ランプを掲げた。

「こっちだ。こっちは役人用の特別応対室があるから、こっちで間違いない」

バースはエリーを引っ張り、早々にその場を立ち去ろうと目を向けた方向に足を踏み出そうとした。

「待てよ。お前ら何者だ？ここに何の用があった来た」

野太くしゃがれた声は、騎士団の者ではなかった。

「私達は最近ここに連れ込まれたある少女の開放を目的としてここへ来た。通してもらいたい」

バースも負けじと声を張り上げる。

しかし、話を聞きつけた他の住人が大勢現れ、エリーたちは完全に囲まれてしまった。

「くそっ！なんてこつたい、これからミーフェちゃんどこ行くんだぞ。お前ら除けよ！」

騎士の一人が近づいてくる人に吼えた。

その間にも、地下住人の群れは周りに群がり、完全に振り切れなくなっていた。

「よっし、隊長！エリーちゃんを連れて先に行って下さい！俺らはここでこいつら叩きのめしますから」

「お前達に借りが出来たな。すまない、では」

隊長のバースはエリーを連れて他の騎士が切りつけた住人達の隙間を通り、特別応対室がある長い廊下を走り出した。

「バースさん、あの人たち大丈夫かしら…地下の人たちは数えきれないほど居たのよ」

エリーは走りながらバースに問いかけた。

バースは久しぶりの笑顔を浮かべた。

「大丈夫だよ。あいつらはああ見えて結構強いから、何とかなる。問題は、こっちの方だよ」

「？もう敵はいませんよ」

小首を傾げるエリーとは裏腹に、バースはまた険しい表情になる。

「ミーフェは今牢獄の中だ。だとしたら、助け出すためには鍵が必要。それがどこにあるのか私達には分からないんだ」

「……そうだわ！鍵がいるんだ……」

エリーはその時初めて気づいた。

エリーにも鍵の場所に全く見当がつかなかった。

「どっしり……」

顔には悔しさが広がる。腕の傷がズキズキと痛んだ。

「とりあえずミーフェの元へ向かおう。もうすぐ着くだろう」

バースはエリーの肩を叩いて優しく言ってくれた。

エリーは無表情で頷いた。

体中が痛い。きっと石畳に直に寝転んでいるせいだろう。

瞼の重みは今は気にならなかったが、もう眠りというものに飽きてきた。

あ
うー…もう起きたいけど体痛いしー、どうせ起きたって暇だしな

ミーフェは眠りながら頭を動かしていた。

起きた所で目に映るのはただ只管続いていそうな長い廊下と暗い世界ののみ。

これでは起きる理由も無い。起きても空腹に気づくだけだろう。

ということ、ミーフェは眠っている間思案に熱中していた。

減多にしていなかったので自分で関心していたのも束の間、もういい加減に鈍った体を動かしたかった。

うーん。やっぱり起きるべきかなーでも別に誰も居ないから寂しいに決まってるしい。もうやだ！

太陽を見守る月の眈

さうて、こっからどうするかな…

ミーフェは途方に暮れていた。

何しろ、どうやって起きればいいのか分からないのである。

うーん、とりあえずも一回寝返り打ってみようかな

ミーフェは体に信号を送ってみた。

しかし、ちょっとやさっとでは動かない。そこでミーフェは強行作戦に出た。

よし、受け取れ自分の体よ！くらえ、今考えた奥義・必殺！えびぞり！！！！

ミーフェはうつ伏せの体に渾身の力を込め、思い切り反り返った。

よっしやあああああ！上手くいった！これで起きれ

そこで、ミーフェの思考回路が止まった。

すんでのところで、ミーフェに新たな睡眠薬が投与されたのだ。

ミーフェはそのまま再び床に倒れこみ、意識を失った。

「…危なかった。もう少しだった」

ミーフェの顔を見ながら呟いたのは、ミーフェの実母だった。

傍には父も佇んでいる。顔は青ざめていた。

「何て生命力だ。しかしこれでは睡眠薬の過剰投与で死んでしまう。おい、何とかできないのか!？」

父の声に、母は頬を引きつらせる。

「…駄目よ。女王陛下が言ってたじゃないか。あの子はわたしらの物じゃない、女王陛下のものなんだって。だから無闇に手を加えちゃいけないんだよ」

「しかし……まあいい。これでミーフェが戻ってきてくれるなら…」

ミーフェの母が父の言葉の中で別の気持ちを読み取れたのは、自分

もそう考えていたからだ。

小さい頃のミーフェは、父と母によく懐いた愛らしい、優しい少女だった。

「お母さん、見て。このお花綺麗ね！」

小さなミーフェ無邪気な声音に、若き頃の母は微笑んだ。

「そうね、じゃあお父さんにも見せてあげて。ほら、あそこの川の辺に居るわ」

母の視線の先には、川の辺の草原に寝そべった父がいた。

「お父さん、見て！このお花、とっても綺麗でしょ？」

「ああ、とっても綺麗だ。じゃあ花瓶に生けてあげよう。花が長生きするようにね。さあ、花瓶を取りに行こう」

ミーフェの差し出した花を受け取った父は、起き上がってミーフェの小さな手をとった。

「うん！お父さん優しいね。お母さんと同じだね！いいなあ、私も優しくなりたいなあ」

「簡単だよ、ミーフェ。優しくなりたければね、いつも笑顔でいればいいんだ。ずっと、ずっと…皆が見ていないところでも、神様が見ているのだから」

父は低くて心地よい声でミーフェに語りかけた。ミーフェはきゃあきゃあ言っつて父の腕に掴まった。

「お父さんすごいね！お父さん大好き！」

「ふふ、私もだよ…ミーフェよ。大きく育っておくれ」

「うん！」

あの頃の記憶は、数年後の記憶の前とは思えないほど純粋なものだった。

「ミーフェ、よくお聞き。あなたの父さんは裏切ったよ。もう、戻ってくることは無い。諦めな」

「そんな…なんで？お母さん、何で諦めちゃうの？お母さんの旦那でしょう？どうして裏切ったのに追いかけないの？ねえ…」

ミーフェは年を重ねた母に縋り付いて泣いた。

それは、久しぶりに見たミーフェの泣き顔だった。

「あ、あんた。なんで泣いてるんだい。もういくら泣いたってあいつは帰ってこないよ。王宮に呼ばれたんだから・・・」

ミーフェの父は、力仕事を募集した王宮内での仕事に採用され、家族を捨て一人遼に住み始めた。

母は引き止めることも無く、ただ黙って見送った。しかし、ミーフェは黙ってなんかいられなかった。

「お母さん、悪いのはお父さんじゃない。この国よ。この国の制度が悪いの。だって、収入が条件を満たさない者は出稼ぎに放り出されるなんて、間違ってる！」

「でも、父さんはもういない。今更ほざいたって仕方の無いことだ。もうやめなミーフェ。」

ミーフェはこの瞬間に、父から突き放されたのだと知った。

同時に、目の前にいる母だけは失いたくない、守り抜かなければと、使命に似た感情を抱いた。

そしてそのころからミーフェは武道に目覚めた。

体のうちに秘めていた強大な力を開花させ、たちまち騎士団から声がかかった。

しかし、ミーフェはその数々の誘いをすべて蹴散らし、自分の忠誠は母にあると度々宣言した。

「私は出て行った父の代わりなの。だから出て行けないわ」

これが、ミーフェの天命なのだと自分自身でそう強く感じていた。

だが、あるときある役人からの手紙に気づく。

母は便箋に書かれた文字を一通り読み終わると、ミーフェに何年ぶりかの微笑を向けた。

「ミーフェ、お父さん帰ってくるってよ。」

自分にとっては嬉しいのか悲しいのか分からないような口調で切り出した母に、何故かミーフェは腹が立った。

「そんな、なんで今更帰ってくるのよ！もうお母さんはあんな奴となんか別れたんでしょ！？そのために私頑張って剣術も槍術も弓術も磨いたのよ。なのに…なんで今更なの！」

ミーフェの破裂した癪癢玉を他所に、母は娘から目をそらした。

「だ、だったらもうここに居なくていいよ！あの王女の護衛仕事が舞い込んでたんだろ？だったら家を出てってさっさとお城に行っちゃまいな」

「え……………」

それは、母から初めて言われた戒めの言葉であり、果てしない所へ母の心を置き去りにしていきたいと思った瞬間だった。

そして翌日から、ミーフェは王城へ独り向かい、住み込みで末の王女の護衛任務をこなして行く。

一人の娘としての父母に対する心を捨て、王女に対する異常なほどの愛情を生み出して。

現実の暗い世界へ戻った母は、静かに苦笑した。

「あの子はロケットペンダントに気づいているかね…」

今までのミーフェとの僅かな思い出を想い、静かに眠る娘の姿を遠目で見つめた父と母は、複雑な表情でその場を後にした。

太陽を見守る月の眈（後書き）

今回は再びミーフエの親子話です。

そしてエリー出てきませんでしたね…すみません。

親子のなぞばっか作ってたらぜんぜん解く時間が裂けず、慌てて書いた次第です。

出来うる限りのスピード更新を目指しますので、引き続き皆様に読んでいただけると嬉しいです。

月が称える優しき微笑み

小さな、今にも止まりそうな呼吸をしたミーフェの胸元には、鈍く輝きを放つロケットペンダントが下げられていた。

しかし、その裏に彫られた文字のことを、ミーフェはまだ知らない。

「ミーフェ…何処にいるの」

エリーは走りつかれて息を弾ませながら、唇をぎゅっと噛み締めた。いくら地下牢を駆け回ってもミーフェは見つからず、バースも苦悩の表情で黙り込んでいる。

本当にミーフェは此処に居るのだろうか。

「…?」

エリーは、遠くから聞こえてくる足音を耳にした。足音はだんだん近づいている。

「…ミーフエ？」

バースも反応し、剣に手をかける。

「エリーさん、念のため下がってください。敵やもしれない」

やがて、足音が目の前で止まり、立ち止まったのは二人組みの男女だった。

エリーとバースの前の二人は、戸惑いながら先へ進もうと足を前に出した。

「待つて。あなたたち、何故急いでいるの？地下住人なら、急ぐ理由もないはずよ。どこの役人？」

エリーは眉根をよせながら、密かに落胆した。遠くからやってくるのはミーフエだと思っていたからである。

一方の女が目を泳がせながら声を張り上げた。

「わ、私達はただの地下住人だよ、役人なんて嫌いだ。あんたらも役人だろう。さっさとそこをどきな！」

次の瞬間、隣で機会をまっていた男がエリーに飛び掛った。

「やつ…！ バースさん、ありがとう…」

間一髪でバースが剣の塚で男の手を叩きのけ、足払いをかける。

「エリーさんに手を出す前に、まず私を相手にしていただきたい」

バースは静かに拳を握った。

そう、ミーフェがない今、エリーを守るのはバースの役目であると分かっていた。

エリーを傷つけるのを許すことは、ミーフェへの裏切りに値すると思えた。

「動かないな。ではこちらから行かせてもらう…！」

バースは言うのが早いか一気に駆け出し、男のわき腹に力を溜めこんだ拳を思い切り打ち付けた。

「う……！」

男はあまりの衝撃に失神した。

さらに駆け、足に精神を集中させたバースは、立ちすくむ女に足払いをかけようとした。

しかし、女はバースの押さえつけようとのばした手を叩いて、さつと後ろへ後退した。

「これでも夫よりは強いんだよ。舐めてもらっちゃ、困る！」

女は格闘技の姿勢でバースに立ち向かう。バースは息をつき、また踏み出した。

女の手を逃れるように大きく飛び上がると、女の後ろに着地し、素早く首に腕を回し、動けなくした。

「くっ…！あんた何者だい！？」

「お前の方から名を名乗れ！何故急ぐ？」

バースの強い声に逃れることができなくなった女は、言い逃れをした。

「私は我が娘をたつた今看病してきたところなんだ。娘は恐ろしい病にとり付かれてる…早く洗脳してやらねば女王様に」

女はバースの表情を垣間見て言葉を切った。

バースは驚きを隠せずにいた。まさか、この女は

「お前は、ミーフェの母だな。ミーフェはこの奥にいるのか」

「え？この人が、ミーフェのお母さん…」

エリーはバースに捕らえられたミーフェの母と、その場で失神している男を見た。

よく見ると、二人とも帝国の王宮仕えの服を着ている。女は苦しそうに下唇を噛んだ。

「じゃあ、この人はミーフェのお父さんなのかしら？」

「そうみたいだ。だが、少々引つかかることがある。」

バースは空いている左手を懐に伸ばし、細いナイフを取り出して、ミーフェの母の首筋に突き立てた。

「あなたはミーフェをサラの元へ送り込むことにより娘との縁を断ち切ったはず。ならば何故、ここでミーフェを監禁している？」

「く……！」

ミーフェの母は悔やみがあるように俯いた。

そう、あの時ミーフェをわざとサラの元へと送り込んだのは自分だけれど、ミーフェには言えなかった。言ったら、ミーフェが迷うだけだ。どうせ恨まれるのは自分なのだから、憎まれ役は買ってでも引き受けようと思った。

「あの時だよ。ミーフェの人生を狂わせまった瞬間はね…王宮から、手紙がきたんだよ。」

私は、出て行った父からの手を差し伸べてくれる手紙だと思った。ミーフェだって、父のことを嫌っていたが、そう考えていたに違いない。

だけどね、現実はずっと残忍だった。内容は、父が死んだこのこ

とだった。

私は、まだ年端もいかない娘にこの事実を伝えられなかった。だから、仕方なく追い出したんだよ。もうミーフェが私のことを、夫のことを忘れられるようにね……………」

ミーフェの母の言葉からは、溢れるようなミーフェへの愛情と、亡き夫への悔いを感じられた。

「でも、父は…夫は、生きていたんだ。役立たずとして王宮から追い出された後に、奴隷としてまた私の元へ戻ってきたんだよ。それが、丁度ミーフェが帝国をでていった時なんだけどね」

エリーは目を見開いた。

「それで、こんな形で出会ってしまうことに…。でも、どうして女王の下であなたが働いているのです？おかしいですよね」

「こんなこと言っても信じてはくれないだろうが、少しでも帝国から姿を消したミーフェの居場所が知りたくて、女王陛下のもとでさえ、聞きだそうとしたのさ。だが、女王陛下はなかなか教えては下さらなかった。きっと知っていただろうに、教えてくれたときにはミーフェはあなたの専属騎士だったよ」

「そうだったんですか…」

「そして、その女王の命令で監禁していると言う訳か。それならば納得がいく。」

黙り込んでいたバースが結論を下した。

「ねえ、バースさん。私：見つけたわ」

エリーは何か閃いた様にバースを呼んだ。

「ねえ、このミーフェのお父さんとお母さんをヴィアナへ呼べばいいのよ。そうして、ミーフェとの誤解を解くの。そうしたらきっと、ミーフェはまた家族の温もりと触れ合えるわ」

「だが、二人は帝国に仕える者だぞ。仮にもヴィアナへ呼んだとして、ミーフェが受け入れるかどうか分からない。」

「でもねバースさん。たった一つだけの家族なのよ。もう他に無いのよ。だったら、試して見る価値はあるわ。ねえ、ミーフェのお母さん、ヴィアナへ来ない？私が責任をもって、ミーフェとの仲を取り持ってあげる。」

エリーの提案に、ミーフェの母は目を丸くした。

「で、でも私はこっちの国の女王に仕えてるんだよ。今更裏切ったところで何がついてくる？ミーフェとの仲だって、戻るかどうかも分からないんだ…」

悲しそうに空笑いするミーフェの母の姿は、まるで昔の自分を見ているようだった。

「…じゃあ、試して見ればいいじゃない。」

エリーは、屈託のない笑顔でミーフェの母の手をとった。

「本当にミーフェが受け入れてくれるかどうか分からないけれど、出来る限り私が説得します。ねえお母様、心優しい者達が集うヴィアナへいらして、そして幸せに暮らしましょう。きっと、永遠の幸せが約束される…いえ、約束して見せるから。私が約束するから…」

「……………。本当に？」

ミーフェの母の目には、溢れんばかりの涙が滲み出ていた。

そう、何度自分は、幸せを手に入れた自分を想像したことが

死んでも手に入らないと思っていた望みが、今、自分の選択肢の中にあるのだ。

しかしミーフェのことをろくに世話してもやれず悔やんでいた時、やっと手を差し伸べてくれたのはミーフェの主人であり、敵国の次期王妃。

ミーフェの母は、涙を頬に伝うのを感じながら、微笑んだ。

「…それはそれは、これ以上考えられないほどの幸せだけだね、それはミーフェのためにはならないと思う。ミーフェは前に進むべきだよ、後ろを振り返るような性格じゃない。これ以上私達は近づいてはいけないんだろうね、きっと。それが運命ってもんさ。」

「…どうして？」

エリーの問いに、ミーフェの母は素直に、心の中に浮かんだ言葉を並べた。

「私の今仕えてる主人はとんだ極悪人でね。その内私らが真相を暴いて復讐してやるんだ。その為には、ここに留まらなきゃならないんだ。」

でも、ミーフェの主人であるあなたに約束する。私らは、あなたの肩を持つよ。今日きりで王宮も出て行くし、女王の顔なんか見たくないね。まあその内ヴィアナへいくからさ、出迎えしておくれよ。ミーフェも一緒に……」

「おかあ、さま……」

エリーは、そつとミーフェの母の手を離した。

ミーフェの母は、自由になった左手で服の隙間から牢屋の鍵を渡すと、バースに投げた。

「これは……!!」

バースが受け取った鍵には、銀で縁取りされた【ミーフェ】の名が刻印されていた。

「ミーフェの牢屋は真直ぐ行った先だよ。早く助けてあげておくれ。私は旦那を連れて行かなきゃならん所がある。さあ、早く!!」

ミーフェの母が思い切りエリーとバースの背中を押した。

エリーは霞む目を擦って、最後に大きく手を振った。

「ありがとうございますお母様！きっとミーフェを助けますからね！」

「ありがとうね、絶対だよ！！」

ミーフェの母は力強い微笑を称えると、ミーフェの父を抱え、反対へ走り出した。

ミーフェの母に初対面したエリーは、よじちかくミーフェに会おうとしていた。

月が称える優しき微笑み（後書き）

何度も書き直していたら更新が遅れてしまい、すみません…。

目覚めた太陽は静かに輝く

「女王陛下、少し宜しいでしょうか」

「どうしたの大臣？そんな顔をして」

「それが：ヴィアナ王国の公爵令嬢がミーフエ殿が居られる地下牢へ乗り込んだようなのです。」

「……まあ、意外と早かったようね。エリーさんは賢い騎士をお持ちのようだわ。」

「どうされます？地下牢へ乗り込みますか」

「……いいえ。此処で待ちましょう。いずれあのこたちは此処へ来るわ。決着をつけにね」

「承知いたしました。では門兵に伝えておきます」

女王のみが残った部屋の中で、サラは一息をついた。

頭の中では、既に最愛の騎士との夢の生活が繰り広げられていた。

「夢だけでは終わらせないわ。絶対にミーフエは私が取り戻すのだ」

から」

そう呟いたサラの顔には、ミーフェに対する溢れるほどの愛情がうつりこんでいた。

エリーとバースは、ミーフェの母と別れた後、石畳の地下牢を絶え間なく見渡しながら走っていた。

やがて、先頭を切つて進んでいたエリーの目に、一番無くしたくないものの姿が映った。

エリーは走るのを止め、静かに歩きながら、ミーフェが倒れている牢によつた。

「…ミーフェ。やっと、やっと見つかった…！こんなところに居たなんて」

エリーはミーフェにやっと会えた嬉しさと、ミーフェの気を失っている状態に対しての衝撃で喉を詰まらせた。

バースは、震える手でやっと鍵を取り出し、そつと錠の鍵穴に差し

込んだ。

ゆっくりと開け放たれた扉を二人は急いでぐり、ミーフェの元へと駆け寄る。

「ああ、ミーフェ！起きて、起きて。私やバースさんが見えないの。ねえ、御願いだから、目を覚ましてよ　　！！」

エリーはやつとのことで声を絞り出し、ミーフェを力いっぱい揺さぶる。しかし、ミーフェは揺れるばかりで瞼はピクリとも動かない。バースは放心したように、衝撃をうけたときの表情のまま立ちすくんでいた。エリーは、なおも大きな声でミーフェの名を呼び続け、懸命にミーフェの頬を引っ叩いた。

しかし、ミーフェは目を覚ます気配すら見えなかった。

「　　ミーフェ　　！！」

エリーの悲痛の叫び声は、遂にミーフェには届かなかった。バースが我に返って、エリーの肩を叩いた。

「エリーさん、ミーフェはきっと生きているはずだ。だが、私達だけではどうにもならない。まずはここから運び出そう。」

「…ええ。そうですね。きっと、きっと生きてるわ。だってお母さんが看病してくれてたんだものね。　　ミーフェ…」

バースはミーフェをそつと抱きかかえ、牢の入り口をくぐった。エリーもあとについて、ひっそりと牢をでようとした。

その時

エリーは、抱えられたミーフェの首筋から、何かがすり抜けて落ちていくのを見た。

「今ミーフェから何か落ちたわ…何かしら」

エリーは屈みこんで、ミーフェから落ちてしまったロケットペンダントをすくいあげた。

「ロケットペンダント？」

ミーフェが好んでつけるようなデザインではなく、ずっしりとして重みのある、古風なロケットだった。

「ミーフェのかしら…」

エリーは裏返し、ミーフェの名が書かれているかどうかを確かめた。すると、裏には小刀で文字が刻まれていた。

「まあ…」

エリーは、その宛名がミーフェということに気づき、そして差出人

の名を見たとき、これは誰のものだったのかを瞬時に理解した。

「エリーさん、急いで。置いて来た部下に事情を説明しないと」

「御免なさい、行きましょう。」

二人は、急いでもと来た道を辿った。

一方、残されたバースの部下達は、これでもかという数の襲い掛かる地下住人を斬りつけ、やっとのことで落ち着いていた。

「あーあ。剣が刃こぼれしちまったよ。隊長に怒られるよあ、うわーん」

「俺だって、隊長に曰ころは使っなって言われてたオナラ攻撃しちやっただけ。絶対殺される！」

「あーじゃあさっき臭かったのお前のオナラ？なんだよ、お前にはブライドってもんが無いのかよ…ったく。」

「ちょっと、うるさいぞそこ。また住人の軍団が来たらどうすんだよ！…あ、なんか来た…もう、またかよ…」

騒がしい騎士たちの目に、二人の走ってくる人影が映った。一人の騎士が立ち上がって目を光らせた。

「おい！あれ隊長とエリーさんじゃねえ？おーい！」

他の騎士達もぞくぞくと立ち上がって敬礼をする中、バースとエリーはやっと入り口までたどり着いた。

「隊長！。ミーフェさん大丈夫でしたか？」

「ああ、お前達は…大丈夫そうだな。」

エリーと騎士団員、そしてバースは、お互いを見て、ゆっくりと笑った。

「良かったです…みんな無事で。あとはミーフェだけですが」

エリーの言葉に、騎士が眉を跳ね上げた。

「何だつて！？ミーフェさんがどうかしたのかい？」

「どうもしてないわよ。みんな揃って、気持ち悪いわね」

久しぶりの声を聞き、皆が振り向いた先には

「ミーフェ！！！」

エリーは迷わず、よろよろと立ち上がったミーフェの元へ駆けつけた。

「エリー…なんでここに居るのよ？もうすぐ結婚式でしょ。」

ミーフェは、さっきまで眠っていたことも見せない素振りで、エリーに呆れた表情を見せた。どっと周囲が笑った。

「うるさいわね、ったく。こっちは寝起きだったのよ、さっさと行くわよ。ほらっ」

ミーフェは心なしかいつもよりピリピリした様子で騎士達の集団を掻き分けてその場から出た。

エリーが驚いてついて来た。

「ミ、ミーフェ！まだ怪我が治ってないじゃない。何処へ行くのよ？」

「何処って…サラのところに決まってるでしょ。決着、つけに行かないの？私今すっごくサラに復讐してやりたいんだけど」

「あ　　！サラさんって分かっているの？あなたを閉じ込めた人」

「ええそうよ。だってサラの目の前で私が失神したんだから、閉じ込めるのはサラ以外いないでしょう。すぐ終わるから、怪我なんてどうでもいいわ」

エリーは、ミーフェのあまりのさっぱりぶりに、思わず言葉を失った。

「エリーも来る？私がサラに向かって捨て台詞はいて出てってやるの、見届けたいでしょ。」

ミーフェは、エリーに土で汚れた手を差し出した。

エリーは暫く黙ってたが、やがてその手に自分の手を重ねた。

「ええ。行くわ。結婚式よりも、そっちの方が気になるもの」

「おー！今の爆弾発言ー！」

一人の騎士が口を挟んだ。皆がまた笑った。

そして、バースとエリーとミーフェは、馬に乗って先にサラの待つ
王城へと向かった。

残りの騎士達は、ヴィアナへ援軍を要請するということで、後から
出発することになったのだ。

馬に跨ったエリーは、馬を走らせながらミーフェに問いかけた。

「ねえ、ミーフェ。さっきあなたが落としたロケットペンダントを
拾っただけどね…メッセージ、見た？」

「何をよ？なんか書いてた」

「裏にね、お母さんから。あなたを、永遠に愛していますって。」

「…嘘よ。そんなただの社交辞令にすぎないわ。あいつは母親な
んかじゃない」

口をへの字に曲げるミーフェみて、エリーはあのと看のことを思い

出した。あのミーフェの母の顔を。

「私、さっきあなたのお母さんに会ったの。…本当にミーフェのことを愛しているようにしか見えなかったわ。きつと、気持ちはずまくつたえられないけれど、ミーフェのことが一番大切に違いないわ」

「……………」

固く口を閉ざしたままのミーフェの顔には、少しだけの期待があった。

本当に嫌われているのなら、こんなロケットペンダントをよこしたりはしないはずだ。これは、母が身に付けていたお気に入りのおケットだということを知っている。

エリーとバースは微笑んだ。

ミーフェは、嬉し泣きにも近い笑みを一瞬浮かべて、またいつもの表情に戻った。過去はどうであれ、今は関係の無いことだ。

「さつさとサラをギャフンと言わせて、帰るわよ。結婚式が待ってるんでしょ。」

「…うん！」

三人のは、間もなく城門に到着しようとしていた。

太陽は過去に別れを告げる

エリーとミーフェとバースは、ようやく王城へたどり着いた。

ミーフェは力を込めて自分の剣を握り締めた。

「……………」

三人共に、思い思いに黙り込んだまま、門を通り抜けようとした。

しかし

「貴様らが女王殿下に敵対する奴らだな！俺達をまず倒してから行くことだ」

門兵や衛兵が、エリーたちの情報を聞きつけ、三人に向かってきたのだ。

三人は素早く馬から降りると、バースとミーフェは素早く剣で敵を叩き斬った。

そして、エリーが見守る中、二人は間もなく敵を片付けてしまった。

「すごい！！やっぱり二人は強いわね」

エリーは馬を柱に繋げながら二人に笑いかけた。

ミーフェは顔色ひとつ変えずにまた歩き出した。

「当たり前でしょ。何年騎士やってると思ってんのよ」

「うん、そうだね。」

二人で話していると、先を急いでいたバースが遠くで呼びかけた。

「おい！こっちだ。早く！！」

二人は足早に声の先に走り出した。

「女王様、ご覧になりましたか？あの女がヴィアナ王国の次期王妃だそうですね。」

「うふふ、なんだか面白そうな子ね。でも、ミーフェはあの子に使えるべきではないわ。」

サラは、大臣と共に門の傍に佇む塔でエリー達一行がやってくる様子の子の一部始終を見ていたところだった。

遠くからでも三人の様子は、はつきりと見えたのだ。

「ねえ大臣、そろそろ行った方がよくてよ。もう直ぐにでもあの子達はやって来るでしょうから。」

「そうでしょうな。さあ、参りましょうか、女王殿下」

そういつて大臣が後ろへ下がったとき、サラの体に異変が起きた。

突然咳をしたかと思うと、サラは体を抱え込むようにして窓辺に倒れこんだのだ。

「ごほっごほっごほっ…大臣、いつもの、あれを…」

大臣が大急ぎで女王の口元に薄紫の紙に包まれた薬を運ぶ。

サラは苦しそうに息を詰めながら、窓に手をかけて支え、ゆっくりと薬を水で流し込んだ。

「大丈夫ですか、女王殿下！」

「はあ、はあ、はあ…ありがとうございます大臣、大丈夫よ。もう直ぐミーフエに会えるのですものね。楽しみだわ。ミーフェを手に入れるのは私なんだから。」

二人はゆっくりと階段を下りた。玉座へ向かうと、整列した軍の列の向こうで、アルデンヌが騎士団長と雑談を交わしていた。

アルデンヌは女王に気づくと、話をやめて女王に敬礼した。

「女王陛下、お待ちしておりました。丁度これから、客人が参られるとのことですよ。」

「ああ、ミーフェたちのことね。さっき塔から見ていたわ。あの令嬢も居てよ。」

ミーフェと会えることが嬉しいのか、女王は嬉々とした様子でアルデンヌと共に玉座への階段を上った。

しかし、アルデンヌはそれよりも嬉しいことがあるかのように、女王に切り出した。

「いいえ、それが違うのです。女王陛下のご病気を治す御薬がようやく作れたと、薬師から連絡がたった今入ったのでございます！！」

アルデンヌの言葉を聞いた女王は、目を見開いた。

「なんですって！それは本当なのですね？」

「ええ、勿論でございます。間もなくその薬師が此処へ参ります。」

「まあ…今日はなんて日なのでしょう。私ばかりがこんなに幸せになっただけなのかしら。」

女王は心からそう思った。

アルデンヌは首を振り、女王に笑いかけた。

「陛下だけではありませんわ。私も、ほんとうに幸せですよ！」

「アルデンヌ、有難う。あなたが居てくれて、本当に良かったわ。これで、やっと私は万能になれる。病気などに縛られなくて済むのね…」

サラは、幼い頃から発作や肺炎の持病に悩まされていた。

今までに何度肺炎になったのかは数え切れないが、今までずっとこの病気によって悔いを残してきたことは覚えている。

国中の医師や薬師に呼びかけ、一時的に発作を直す薬は開発されたものの、今までこの原因不明の病が完全に治ることはなかったのだ。

「大臣殿、只今客間にて薬師がお持ちです。通しますか？」

大臣の下に一人の兵士がやって来た。大臣は頷くと、女王にそのことを短く伝えた。

「まあ、直ぐに通して頂戴」

サラは手を合わせて喜ぶと、大臣にこう付け加えた。

「大臣、ミーフェたちは放っておいてあげて。私は忙しいけれど、せめて城の中で遊ばせてあげましょうね」

「はっ。」

大臣が玉座の傍を離れると、直ぐに薬師を呼ぶための準備が始まった。

薬を携えてきた薬師には、褒美をとらせよとの女王の命からである。女王の玉座の横にそれぞれ金や宝石が積み上げられ、女王の化粧直しが終わり、ようやく薬師が呼ばれた。

呼ばれた薬師は男女の二人組みで、薬師が着るゆつたりとしたロブを頭まですっぽり被っていた。

「女王陛下、薬師のシルデモンとドリムでございます。どうか、お見知りおきを」

薬師の一人が顔を上げ、それだけ言ってまた礼をした。

サラは冷静を保とうと深呼吸をし、二人に声をかけた。

「よくやってくれました。あなた達にはそれぞれ有り余るほどの褒美を取らせましょう。」

それで、薬はどこにあるのです？さあ、早く見せてくださいな。」

「では、早速…こちらが、我々の開発した新薬に御座ります。お手にとつてご覧下さい。」

薬師はそついい言いながら、嚴重に守られた木箱を丁寧に開け始めた。

サラは早く薬が欲しいという思いから、つずつと玉座から身を乗り出し、その様子を見守った。

薬師が最後の鍵を外し、ようやく箱の蓋を開けようとしたとき

ふいに、玉座の間の大扉が派手な音を立てて開いた。いや、開いたというよりは、むしろ蹴破ったに近い破壊的な音だった。

そして、エリーとミーフェとバースが、サラとの対面を果たすこととなった。

エリーははじめて見るサラに少し心が揺らいだ。

ミーフェは昔この人に仕えてたのね…

エリーは晴れない面持ちで、ミーフェだけを見て嬉しそうにするサラの横顔を見据えた。

本当にこの女王はミーフェを愛しているように見えた。ミーフェを監禁することが無かったのならば。

サラはミーフェを見、一瞬エリーとバースに目を移すと、ミーフェに呼びかけた。

「ミーフェ！来てくれたのね、ありがとう。今日は最高の日よ」

サラは嬉しさのあまりとうとう玉座から立ち上がって、段差を降りてきた。

ミーフェは微笑み、そしておもむろに口を開いた。

「何が最高の日よ！もうちょっと学習能力がある人間だと思ってたけど、こればかりは直らないのね。呆れたわ。」

しかし、ミーフェは微笑む顔とは裏腹に、女王に対するものとは思えない爆弾発言をサラリと言ったのけた。

サラは微笑んだまま、段差を降りた直後に止まった。

「何に呆れているというの、愛しい私のミーフェ。私は呆れることなんて何もやってないわ。」

その口ぶりは、前にまして愛しさが籠ったようだった。ミーフェはほくそ笑んだ。

「あら、笑わせちゃって。いい、あんたのその考え方が可笑しいって言ってるの。あんたはそれが正しいと思ってるから、変えられる事に気づけない、本当の馬鹿だわ。私、昔こんな人に仕えてたなんて危うく私まで洗脳されるどころだったじゃない。何かあったらどうしてくれるつもりだったの？」

「ミーフェ、それは誤解よ。私の考えは正しいの。あなたは、隣にいる娘に洗脳されかかっているだけ。今からなら遅くないわ。さあ、私の元へいらっしやい」

サラはクスリと笑い、そんなことがあるはずないとばかりに肩をすくめた。

一方、ミーフェの双眸は次第に冷たくなっていくのを、隣にいたエリーは感じ取った。

ミーフェ、目茶苦茶怒ってる…

ミーフェもなお微笑んだまま、サラに向かって宣戦布告をした。

「サラ、あんたには失望したわ。心を改めてくれたらもうちょっとお話してあげてもよかったのに。本当に、残念無念ね！」

私が仕えるべき主人はあんたじゃない　！狂ってまで私を奪おうとする人間じゃないのよ！！！！」

エリーは、ミーフェのきつぱりぶりに驚き、そして実感した。

本当に、自分とミーフェは…二人は繋がっているということ。ただの思いあがりかもしれないけど、そう思うほかなかった。

サラは、遂に笑みを消し去り、暫し黙り込んだ。再び開いた口からは、氷の刃のように冷たい言葉がミーフェに降りかかった。

「私はあなたと生死を共にするために生まれてきた。ミーフェ、あなたがその女とヴィアナへ戻ろうものなら、必ず後悔することになるわよ。私はあなたを取り戻すまで、諦められない」

「いいわ、望むところよ。これであんたが私を愛してないってこと

が明確になったわけだし、もう私も悔いはないから」

ミーフェの呆気ない言葉に、サラは口をワナワナと振るわせた。

「……………私は、ミーフェを愛してる！！愛してるが故に、そのために ……！！！」

そのために、此処まで来たというのに。

幼き頃、二人過ごしたときの記憶が消えてゆく。

灰のようにほろほろと零れ落ち行くその記憶の欠片は、もう一時の温もりさえも、失っていた。

サラの大きい瞳に、初めての泪が浮かんだ。

今まで、一度も悲しいことなんてなかった。

隣にはいつも、最愛の騎士が居たから。

だから、その騎士を守るために、自分が最高権力者になった。他人や王族は必要さえあれば凶手を雇って殺しもした。

けれど

騎士の心には、今や私の面影は無い。

心から笑いかけてくれる日は、もう無いのだろうか。

心から自分を信頼してくれていた一人は、もう彼方へと別の道を歩んでしまうのか。

いつまでも、一緒にいると思っていた、あの少女は……

「ミーフェ、私が何をしてでも手に入れたかったもの…それはね、永遠の心なのよ。」

小さい頃、誰からも愛されなかった私を導いてくれた人がミーフェだった。心から私を慕ってくれた人はミーフェだけだった。

もう失いたくなかったの、あなただけを。それを、忘れないで

「

サラの言葉に、ミーフェの顔から表情が掻き消えた。

「ミーフェ、サラさんて…」

エリーの言葉に、ミーフェは手で制止した。

「…エリー、これで終わるわ。もう、終わり。繋がらないのよ。私とサラの間には、最初から絆なんてないの。必要も無いのだから。」

言葉を切って呟いたミーフェは、再びサラに笑いかけた。今度は、本当の笑顔で。

「サラ、ほんとと言うとね、昔は楽しかったわ。でも、今は進むべき道に従わなくちゃならない。これは誰にでもある天命なの。あなたにもあるわ。」

だから、あなたもこれから自分の歩む本当の道を見つけないきゃ駄

目よ。見つけれられたら、また会いましょう。今度はお友達としてね。」

ミーフェの優しい言葉に、サラは泪で濡れた顔を上げた。

「ミーフェ……………」

サラは、衝撃を受け止められないように、また屈みこんだ。

けれど、今度は少しだけ、肩の重荷が消えたように心が軽かった。

花と王の一の誓い

サラの呟いた言葉の後に、ミーフェは座り込んで二人を見つめこんでいた薬師に囁いた。

「あなたたち、お父さんとお母さんでしょ。」

ミーフェが覗いたフードの置くには、見覚えのある懐かしい二人が居た。

「ミーフェ！どうしてそれを!？」

「あまりにも無理がある変装に見えたから」

ミーフェの言葉に、父はため息をついた。

「むづ…母さんや、もうここでいいだろう」

変装した父の声に、母は微笑んだ。それは、ミーフェが久しぶりに見た母の笑顔だった。

「そうだねえ…。ミーフェ。あんたの方に母さんたち住み込むことにしたよ。これから行くんだ」

「え!？何それ」

驚くミーフェの隣で母が立ち上がり、ローブを脱ぎ捨てた。

「おい、あんたたち！」

突然のミーフェの母のどでかい声に、聞き入っていた兵士達が跳ね上がった。

しかし、ミーフェの母は止めずに続けた。

「私らはねえ、このときを待ってたんだ！帝国の鎖から逃げるチャンスな。そして今、そのときは刻一刻と近づいている！！」

扉の音やら母の大声に気づいた大臣が何処からか戻ってきた。大臣はミーフェの両親を見ると飛び上がった。

「おい！お前らなにをやってる！？奴隷の分際で、女王の前に立ち大声で叫ぶなどと！！恥を知らんか！」

「おや、これは大臣。最後に言っておくけどね、この世には奴隷なんて存在すらないのさ。あんたらが勝手に決めつけただけなんだよ！」

ミーフェの母は物凄い剣幕で大臣の胸倉を掴んだ。

「ああついでに、あたしは薬師でもないって、あんたの主人に言うときな。クスリなんてないってね」

母の囁きを聞いた。大臣は、目を見開いてへナへナと座り込んだ。

「そんな…これで女王陛下のお体をなおせると…」

「嘘だよ、嘘。そんなことも見抜けないなんて、あんたは大臣として失格だよ。消えちまいな」

それだけ言つと、満足したようにミーフェの母は大臣を突き放して戻ってきた。

ミーフェの呆れたような表情を見た母は、ミーフェに一言だけ言った。

「あたしたちは満足さ。あとはミーフェ、あんた次第だよ。」

ミーフェはエリーを見た。

エリーはミーフェを見返し、ミーフェに頷いた。

そしてミーフェは少しして、サラにまた話しかけた。

「サラ、あなたに会えてよかったと思うようにするわ。じゃあね、また会うときまで」

そう言つと、ミーフェは擦り切れた薄い上掛けを翻して、サラの元から去った。

サラは去つてゆくミーフェを見つめ、ただ複雑な顔をしていた。

そうして、サラとミーフェの関係は完全に断ち切られた。

ミーフェはそのまま王城を出て、エリーにヴィアナへ戻ろう、と伝えた。

エリーはようやくおわたのだと、ほっと胸を撫で下ろした。

いつも緊張していた糸が緩む。エリーは言葉に表せなくて、ただ笑った。

その後、援軍を率いてやって来たバースの部下達に出来事を伝えると、騎士達はミーフェの無事帰還を心から喜び、ミーフェを助けたエリーとバースに労いの言葉をかけた。

そして、エリーたちは馬に乗り、あのヴィアナへと戻ったのだった。後に伝説とも言われる、ヴィアナの花の最初の武勇伝を土産話に。

騒ぎになるからということでごっそりと入った裏門には溢れんばかりの人の波で埋め尽くされ、大音量のマーチが鳴り響いていた。

「何これっ余計うるさいんじゃない、まったく迷惑ね。」

馬に跨ったミーフェは門を潜りながらエリーに舌打ちした。

エリーは苦笑いしながら頷いた。

「何だか申し訳ない気分ね。わざわざお出迎えなんて」

そう言いながらも、エリーは何処か嬉しそうだった。

「戻ってきたんだもんね、ヴィアナに…やっと」

エリーの言葉に、ミーフェはただ微笑んただけだった。

けれど、エリーはミーフェの気持ちを汲み取って自分も笑った。

バースや他の騎士達と共に入城すると、エリーとミーフェとバースは真っ先に王に呼ばれた。

玉座の間へ一度足を踏み入れると、ヨーアンの眼差しに目が留まった。

思えば、結婚式はいよいよ明日に迫っていることに気づき、エリーは真っ青になった。

どどどどどどど…絶対王様に怒られるよね。やば…

ミーフェの目の前で結婚式より大切だからとか言った手前、今更相談できずエリーはため息をついた。

三人が頭を垂れると、王が口を開いた。

「エリー殿、そしてバース殿。よくぞヴィアナの掛け替えの無い命を助けてくれた。心から礼を言わせて貰うぞ。」

ミーフェ殿を止められなかった事を、どうか許してもらいたい。」

ヨースンは爛々と輝く瞳を二人へ向けた。

エリーは礼をしたまま言葉を連ねた。

「ミーフェの事を気づいてられなかった私の責任でございます。決して殿下の責任ではございません。」

エリーがそう言うと、ミーフェは目を閉じたまま口を開いた。

「この一件は、全て私の責任です。エリーも王様も、そんなお互いに責任負わなくていいですけど、どうされます?」

ミーフェの言葉に、その場にいた全員が笑った。ミーフェは礼儀も忘れて立ち上がった。

「皆さんに笑っていただいたことですし、そろそろ休みたいのですが、宜しいでしょうか王様?」

「ああ、ではエリー殿は残ってもらいたい。他の者達も退室せよ。」

ミーフェ殿とバース殿はゆっくり療養し、仕事に復帰するように
王の言葉で、ミーフェとバースは足音をたてずに側近のネフルアー
ドらと出て行った。エリーは更に顔を青くした。

や、やっぱり怒ってるわよね…そうですねだって悪いのはこの自
分だし別に怒られたっていいですけどね…

エリーはため息をついて、王の次の言葉を待った。

しかし次にエリーの耳に飛び込んできた王の声は、意外な内容だっ
た。

「エリー殿、あの約束の用意が出来ました。もう明日に迫っている
ことだし、今日は二人でゆっくり城を回ろうと思うと思ったのです
が…別にあなたがお疲れならばいいのです。」

王の言葉にエリーは心底安堵した。ついでに頷いた。疲れを感じさ
せない、笑顔で。

王ヨースンは、玉座を立ててエリーの元へ歩み寄った。

そして、優しく呟いて、エリーの手にキスをした。

「これまでよく頑張ってくれました。どうぞ、力を抜いて私に寄り
添ってください。」

「まあ…ありがとうございます。では遠慮なくそうさせていただきます」

やもしれませんわ。」

そして二人は、エリーの旅の思い出話で盛り上がりながら、夕時まで城を心行くまで歩いた。

エリーにとっては久しぶりの安息だった。しかし、何故か疲れがどつと流れ出ることは無く、むしろ心がすっきりとしていた。

二人が中庭の池のほとりまで歩いたとき、エリーが切り出した。

「侍女から聞きましたわ、セトのこと。きっとあの侍女は、本当の場所に帰ったに違いありません。きっと…」

「そうですね、あの方は貴女のお付の侍女だった。きっと複雑な事情があったに違いない。」

「…貴方の事、これからヨーアンって呼んでもいいでしょうか？」

エリーの言葉を聞きながら池を見つめるヨーアンは、微笑んだまま答えた。

「いいですよ。敬語も使わなくなっただっていい。これから沢山語り合おうだろうから、敬語じゃ不便でしょう？」

「ええ、そうね。じゃあ敬語は使わないわ。わたしはあなたをヨーアンって呼ぶから、あなたもエリーって呼んでね。いい？」

「分かった。約束する」

ヨーアンも敬語を崩して答えた。

エリーはそんなヨーアンの優しさが伝わってきて、嬉しさに顔が綻んだ。

「ありがとう」

ヨーアン「」

花と王の一の誓い（後書き）

少々手を加えさせていただきました。

読んでくださった方、誠に申し訳ございません。

今回までの見直しで他の話にも少し修正する部分が出てくる可能性
がありますので、修正をやり次第お伝えさせていただきます。

束の間の問いかけ

そして、翌日が訪れた。

朝早くから、人々の歓声や歌声が町中で響き渡る。

号外の新聞やポスターが壁に貼り付けられ、そこらじゅうで紙ふぶきが舞っている。

煙突に乗っかって拳を振り上げた一人の少年が本日数十回目の叫びをあげた。

「ヴィアナに麗しく勇敢な王妃がやって来たぞお！！皆歌えー！！
今日はお祝いだー！」

王宮内・中庭

ヨーアンと側近のエルフェイネスはすっかり準備が整った式場
を眺めた。
・
・

「今日か、結婚式は。何だか実感が沸かないな」

「何を仰せられます！今日は国を挙げての一大事に御座いますぞ。陛下はもつと胸を張って、ほら」

エルフェイネスはヨーアンの背をビシッと叩くと、満足げに微笑んだ。

「しかし、エリー嬢は粹なことを考えますな。これから良き王妃となりましょう」

「…ああ。そうだろうな」

エルフェイネスの眩きは、やがて想像以上のものとなる。

「ねえミーフエ、この格好変じゃない？顔色大丈夫かしら??」

「もう、大丈夫ってさっきから言ってるじゃない。その内そんな格好が当たり前になるのよ。なんとって王妃になるんですものね」

エリーは既に準備を終え、三面鏡の前で顔色を確認していた。

エリーの真珠で飾られた純白のドレスに、髪を纏めてダイヤモンドが嵌め込まれた髪留めで留めているその姿は、まさに天使のようだった。

隣で騎士の正装に着替えたミーフェが肩をすくめて微かに笑った。

二人で談笑していると、塔の扉をノックする音が響いた。

ミーフェが駆け寄って扉を開くと、そこには公爵と夫人が立っていた。

「お母様、お父様、来てくださったのですか。嬉しいです」

エリーは両親の元へ駆け寄った。

「エリー、会えてよかったわ。でも帰ってきた次にはお嫁入りなんて、悲しいわ」

「まあお母様、私は遠くへなんて行きません。これからも先生はあなた一人です。…困ったら、頼ってもいいですか」

「…勿論よ。お茶の用意をして待ってるわ、エリー」

エリーは頷いた。これから先、相談することが数えきれないほど出てくると思ったから、それ以上何も言わなかった。

「エリー…君はこれから、沢山の責任を背負っていくことになるだろう。しかし、決して心を曲げてはいけないよ。自分の心を、真直ぐ貫き通すんだ」

「分かりました、お父様。今まで有難う御座いました。」

「トン、トン、トン…」

再びノックが響く。今度はエリーが扉を開いた。

優雅な仕草で取っ手を回すと、そこにはこれから数十年人生を共にすることとなるう、一人の男の姿があった。

「エリー、迎えに来ました。さあ……」

ヨーアンはエリーの手を取ると、先に出て公爵に挨拶した。

「兄上、公爵夫人、来てくださって有難うございます。特別席のご案内をさせますのでしばらくお待ちください。」

そう言うと、ヨーアンは敬礼をして微笑む二人をエリーの部屋へ残した。

そして頬をほんのり紅く染めたエリーと、相変わらず凜とした表情のミーフェをエスコートし、大広間の隣の小部屋に向かった。

「エリー、準備はいいかい？」

「あとはベールを被るのみよ、ヨーアン」

ここでミーフェがため息をついた。

「二人とも熱いわねえ…私、お邪魔かしら？」

ミーフェが肩をすくめて部屋を出て行った。しかしその顔は微笑んでいた。

ミーフェが出て行った後、エリーがヨーアンを見つめた。

「ヨーアン、あの約束覚えててくれてありがとう。凄く嬉しいわ。」

「勿論さ。初めて聞いたときは驚いたけど、楽しそうだし、ヴィアナに新たな歴史を生み出すのだから、他には無い結婚式がよかったからね」

エリーはそうね、と頷いて、暫くしてからヨーアンに最後の確認をした。

「ヨーアン、私きつとあなたを困らせてばかりになるけれど、それでも私でいい？本当に？」

「約束するよ。一生君と傍に居るよ。」

その言葉を聞いて、エリーは心から微笑んだ。

大広間では、楽団のファンファーレが鳴り始めた。

しかし招待客や公爵家の姿は見当たらず、エルフェイネスを始めとする家臣たちは不安げに、でも何処か嬉しそうに並んでいる。

新郎新婦の用意は既に終わり、間もなく結婚式は始まることとしていた。

「ヴァイアナ王国国王殿下のご入場でございます!」

その声を合図に、曲調が変わり、優雅な交響曲に変わった。

そして、玉座の間の大扉からヨーアンが迎えられ、すっと王室色のカーペットを歩いてゆく。

ヨーアンは玉座を、家臣の列を通り過ぎ、拍手に迎えられて大広間の入り口で立ち止まった。

拍手が静まってくると、次にまたエルフェイネスの声がかかる。

「グルニエール公爵令嬢、エリー・リーブ・マフィー・グルニエール様のご入場でございます!」

全体が静まり返った。

ゆっくりと再び扉が開かれ、曲調が緩やかになると、エリーが頬を染め、ミーフエがエリーの長いベールを持って入場してきた。

二人の後に並ぶ護衛は あのバースが率いるカントラス地方ヴ
イアナ武力騎士団である。

エリーの姿が現れた瞬間、割れるような拍手の波が耳を劈くように鳴り響いた。

エリーは玉座の間の装飾に目をチカチカさせながら進み、時折ミーフエに微笑みかけた。

やがてファンファーレがなり終わった。エリーとヨーアンは笑みを零しながら手を組み、開かれた扉の先へと歩んだ。

護衛や音楽隊に囲まれて二人は進んだ。

そして

遂に、本当の結婚式場へたどり着いた。

そこは、なんと王宮内の中庭だった。

実は、この結婚式場を提案したのはエリーである。

木々が生い茂り、噴水からは水が溢れ、小鳥が囀る場所で、エリーは結婚式を挙げるのが子供の頃からの夢だった。

そして、怪我をしていたときにそれを思い出したのだ。

中庭には教会の椅子が運び込まれ、中央の教壇には既に神父の姿があった。

エリーとヨーアンの行列が中庭に入場して来ると、たちまち歓声と拍手が心地よく耳に響いた。

椅子に座りきれなかった見物人も大勢群がって、二人を見守ろうと身を乗り出していた。

やがてエリーとヨーアンは教壇の前に到着し、ミーフェはエリーの後ろでエリーのドレスの裾を整え、バースたちは立ち並ぶ椅子の横に並んだ。

神父が静かに微笑んで、両手を空へ掲げた。

「只今より、ヴィアナ王国国王ヨーアン・エルドナ・グルニエール・スィープ・オブ・ヴィアナ様と、グルニエール公爵令嬢エリー・リーブ・マフィー・グルニエール様の、結婚式を執り行います。」

花が辿るは奇跡の証

「只今より、ヴィアナ王国国王ヨーアン・エルドナ・グルニエール・スィープ・オブ・ヴィアナ様と、グルニエール公爵令嬢エリー・リーブ・マフィー・グルニエール様の、結婚式を執り行います。」

神父の声が王宮の庭に響く中で、会場から離れた花壇の傍で一人の男が石垣に寄り掛かっていた。

明るい若草色の瞳を煌かせ、力強い腕が踝まで垂れた長いマントから見え隠れするその姿は、とても六十を超えた老人には見えなかった。

その男は壇上にかかるエリーとヨーアンの姿を見届けると、顔を少し綻ばせて、姿を眩ました

「ヨーアン・エルドナ・グルニエール・スィープ・オブ・ヴィアナ、あなたはいつまでもたった一人のこの娘を愛することが出来ますか？」

沈黙が広がりつつある中での、白髪に埋もれてくぐもった神父の声。ヨーアンは素直に答えた。

「はい、愛します！一生愛します！！」

素直すぎる。素直すぎるのだ隣の青年は。後でミーフェは噴出しそ

うなのを堪えているし、バースはニヤニヤしている。

エリーは今更この場から逃げ出したくなかった。

神父はエリーに向き直り、同じ質問を繰り返した。

「では、エリー・リーブ・マフィー・グルニエル。あなたはいつまでもこのたった一人の青年のことを愛することが出来ますか？」

「は……はい。愛します」

エリーはそう言うのがやっとだった。

神父はそのことばを聞き取ると、手を掲げて正面に向き直った。

「では、二人で手をおつなぎなさい。これより、二人を夫婦と誓うために、代々ヴィアナ王国王家に伝わる秘宝を授けましょう。ヴィアナ王国を造り上げた名君アルスベルガの首飾りと、アイルヒューステスの腕輪です。」

神父は恭しく二つの秘宝が置かれた器をそれぞれに渡した。

エリーは神々しく鈍い輝きを放つ秘宝を見つめた。

婚礼や王位継承の儀でもなければ人目に出されることのない王家の宝。

それが目の前に出ているということは、この婚礼が王国にとってどれほど重要なかが伺えた。

「さあ、今から夫婦の証としてその秘宝を互いに交換しはめなさい。その瞬間に……貴方達を夫婦と認めます」

言われるがままに、エリーとヨーアンは向き合つと渡された秘宝をそれぞれに渡し、付けた。

エリーの首元で輝く首飾りと、ヨーアンの腕に神々しくはまるその腕輪は、まさしく王家の証だった。

神父は顔を綻ばせ、二人に膝を立てる正式な敬礼をした。

「此処に、また新たな夫婦と王妃の誕生です！！」

その刹那、割れるような大歓声があがった。

大勢の招待客は拍手と笑顔で取り巻き、グルニール公爵は泣き叫び、夫人も一緒になってスカーフを目に押し当てた。

バースや騎士団員は壇上に登りでてヨーアンを担ぎ上げ、ミーフェはエリーの花嫁姿をそっと目に焼き付けた。

誰もが、笑っていた。

いま持ち上がっている問題がどんなに大きなことだろうと、誰もがその存在を頭から消し去った。

心の中にどんなに深い闇があろうとも、幸せが、全てを消し去り、光を与えてくれる。

エリーは感じていた。

これから自分が背負わなければならない苦悩と、そして、これから自分が紡いで行くであろう零れ落ちんばかりの愛を。

しかし確信していた。

自分は、どんな事があるうとも、仲間と夫と助け合い、乗り越えられることを。

エリーは歓声に包まれて、笑顔が絶えなかった。

「ありがとうございます皆様！私は、私は……………」

担がれていたヨーアンが戻ってきた。

「私は、皆様に愛される王妃になります！今までのどんなお后よりも、何よりこの国を、そして国民を守ることを、そして夫を支えていくことを、ここに誓います！！」

そして、エリーは差し出されたヨーアンの手をとり、軽やかに壇上を降りた。

二人はミーフェとバースを後ろに従え、参列客が開けた道を緩やかに進んだ。

色とりどりの花びらが舞い、婚礼を祝う歓声が飛び交う。

しかしその中で、エリーはみつけた。

懐かしい、たった一人の肉親。そのひとの姿を。

エリーはヨーアンに目配せして、一人その場を離れた。

ミーフェが追いつけないほど速く駆け出し、ドレスは思い切り風に靡く。

そしてエリーが駆け寄った先には、あのマント姿の男が立っていた。エリーは瞳を潤ませ、そっと口を開いた。

「お父さん…でしょう？」

男は一瞬驚いたような仕草を見せたが、やがてゆっくりと、顔をすっぽりと覆っていたフードを剥いだ。

そこには、あの懐かしいエリーの実父であるジエイガンの姿があった。

父は皺の刻まれた顔を綻ばせると、その場に跪いた。

「エリー姫…いえ、エリー妃。この度は誠におめでとうございます。

騎士団長を務めさせていただいておりますこの私にも、祝いの言葉を述べさせていただきたい。」

エリーは少しその反応に戸惑いの色を見せた。実の父親が自分に頭を下げるなんて、思ってもみなかった。

エリーは言葉を慎重に選び、やがて手を差し伸べた。

「騎士団長殿、祝いの言葉、礼を申します。さあ、もうお立ちになって。あなたが跪いてくださるだなんて、まだ妃になりたての私には勿体ないですわ。」

「それは違いますぞエリー妃。あなたは一国の国王と結ばれた身。もうあなたは王族の方なのです。私たち騎士団は命をかけて国王とあなたをお守りいたします故、その事お忘れなきよう」

エリーの差し伸べた手にわずかに触れて立ち上がった騎士団長は、はるか遠くに行ってしまう娘をせめてすこしだけでもこの目に留めておこうとエリーをにわかに見つめ、そして娘と直接話す最後の機会を終えようとした。

騎士団長はエリーに城の巡回があると伝え、速やかに敬礼をすると、その場を離れようとした。

「待つて!!!」

エリーの声が会場に響き渡る。騎士団長が何事かと振り返った。

エリーは父のもとへ駆け寄り、他の者に聞こえないよう口早に何かを呟いた。

騎士団長　父は、その言葉を聞くと、顔を綻ばせ　そして
また歩き出した。

エリーは小さく笑うと、またヨーアンのもとへと戻った。

そして、それまで何事もなかったかのように：あの瞬間だけ刻が止まっていたかのように、結婚式は続いた。宴が開かれ、その宴は宵まで続き、国中がエリーとヨーアンを祝福していた。

エリーは賑やかな宴を一人離れ、庭園の中の隅にある果樹園へと来ていた。

まだ自分が妃になったことがにわかには信じられず、気持ちの整理をつけにきたのだ。

果樹が広がるなかに置かれた休憩用の椅子に腰を下ろすと、果樹の間から広がる満天の星空が目映った。

エリーが星空を眺めていた時、ふいにヨーアンがやって来た。

「ヨーアン…何故ここへ？」

ヨーアンはエリーのすぐそばの桃の木に寄りかかると、穏やかにほほ笑んだ。

「何故つて、君がここにきたからさ。夫たるもの、妻を守らなければならぬし…それに君がここへ行くのが見えたからね」

エリーは息をついてクスツと笑った。

「あら、ばれてたのね。みんなに心配されたくなくてこっそり抜け出そうとしたのに、ヨーアンにはいつも見抜かれてばかりだわ。」

「そうかな？私は見抜いてるつもりはまったくくないよ。ただ、気付いただけだ」

エリーはその言葉に、心配性な人ね、とまた笑った。

ヨーアンはほほ笑んだまま、エリーに尋ねた。

「エリー…私はあの騎士団長がエリーの実父ということを知っている。あの時がきつと最後の体面になるだろうが…君はあの時、父上に何と呟いたんだい？」

「…あの時、いつも傍にいるから、心配しないでって言ったのよ。それだけなの」

エリーはまた星空を見つめて、ヨーアンの問いかけに答えた。

ヨーアンはその言葉を言われたエリーの父の顔が鮮やかに浮んだ。

「そうか。君らしい、いい答えだ」

ヨーアンの返事に、エリーは立ち上がってヨーアンのもとへと歩み寄った。

「ヨーアン、あなたに礼を言わせて。私を選んでくれて、ありがとう」

エリーはヨーアンの胸元に寄りかかり、そつと呟いた。

ヨーアンは突然のエリーの行動に少し驚いた様子だったが、やがてエリーを抱き寄せた。

「こちらこそ、私を選んでくれてありがとう、エリー」

エリーはヨーアンの深く安定した声音に安心したかのようにつかの間目を閉じた。

そして星空を見上げた。

「私たち二人で治めてゆくヴィアナ王国にはあの星の数ほどたくさん国民がいるわ。そして私たちは国民を従え、財政を安定させ、

国を未来へと導かなければならない…。でも、それは逆に言えば、私たち次第で国は良くも悪くもなるということよ。私はまだ国が抱えている問題の全てを知っている訳ではない…けれど、あなたの力になれるのならば、この国のためになるのならば、喜んでこの身を差し出すわ。」

エリーの言葉に、ヨーアンは頷いた。

「私もまだ王を長く経験している訳ではない。だからこそ、二人で築き上げてゆこう…幸せな未来を」

二人は抱き合い、そして口づけを交わした。

結婚式は大成功ののち夜明けとともに幕を閉じ、やがていつもの平穏な日々が始まった。

そこで今までと一つだけ違うのは、王の執務室でいつまでもほほ笑みを絶やさず王を導いたエリー妃の姿だった。

エリー妃の横にはあのヨーアン政権を支えた三強騎士と謳われた女騎士、ミーフェの姿と、後々に至るまで名が語り継がれてゆくこととなる、ヴィアナナ王家第二十六代国王ヨーアンが寄り添い、少しずつつながりもヴィアナナ王国の平和が確立される政治が続いたという。そして三強戦士の一人、地方騎士団総統のバースはヴィアナナ王国の地方に至るまでの治安維持に尽力を注ぎ、三人目の三強騎士、首都騎士団長のジェイガンは若手の騎士育成に力を入れるなどしたことから、後世にまでこの三強騎士の名は語り継がれる。

それから長年の時を経てヴィアナナ王国は世界に名を残すこととなる。

永久^{とわ}の平和を目指した、ある王と妃の奮闘を描いた物語として。

花が辿るは奇跡の証（後書き）

まずはお詫びを…

この度、最終話が大変遅れてしまい、本当に申し訳ありません。半年ばかり更新が遅れてしまいました。それには、ただただ忙しかったという言い訳と、グダグダと書き綴ってきた自分の思いにきちんとけじめをつけたい、という思いがありました。

その結果、自分なりにきっちりした締めが出来ました。

このお話を読んでくださった読者の皆様には大変長らくお時間をいただき、私としては、このお話で少しでも皆様が満足していたければ幸いです…。

さて、では少しこの小説について感想を述べておきます。

最終話：私の小説の中では最も大切な行事が行われましたね。

こんな風に結婚式をやって完結とはなかなか新鮮に感じる一方、新しく前へと踏み出せる、完結にふさわしい話にまとめることが出来たのでは、と思います。

今更とは思いますが、これまで読んでくださった皆様、ありがとうございます。ごぞいます。

これからも時間さえあれば書き続けていきたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

ではこれにて…みなさんにまたお会いできる日まで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8062f/>

ヴィアナの花

2010年10月9日16時34分発行